

復元！興道寺廃寺を とりまく景色

～古代寺院の景観を考える～



2019

美浜町教育委員会

例 言

1. 本書は、美浜町教育委員会が福井ライフ・アカデミー（福井県生涯学習センター）と共催し、以下のとおり実施した美浜町歴史フォーラムと、福井ライフ・アカデミーと連携し、以下のとおり実施したみはま土曜歴史講座の記録集（講演録）です。

平成 30 年度美浜町歴史フォーラム「復元！興道寺廃寺をとりまく景色」

平成 30 年 11 月 3 日（土・祝）、会場・美浜町保健福祉センターはあとびあ
趣旨説明「興道寺廃寺をとりまく古代景観」 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏
フォーラムⅠ「7・8世紀の金堂からみた興道寺廃寺の建築的特徴」
東京大学大学院 工学系研究科 准教授 海野 聡 氏
フォーラムⅡ「伽藍配置から見た興道寺廃寺」 東京医療保健大学 医療保健学部 教授 三舟隆之氏
フォーラムⅢ「ラグーンの寺々 ―古代海上交通と古代寺院―」
名古屋大学大学院 人文学研究科 准教授 梶原義実氏
フォーラムⅣ「興道寺廃寺と三方郡家」 福井大学 教育学部 教授 門井直哉氏
座談「復元！興道寺廃寺をとりまく景色 ～古代寺院の景観を考える～」
進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏
パネリスト 上記の講師

平成 30 年度みはま土曜歴史講座第 6 回講座

平成 30 年 9 月 22 日（土）、会場・美浜町歴史文化館
報告Ⅰ「興道寺廃寺」 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏
報告Ⅱ「柳田シャコダ廃寺」 羽咋市教育委員会 文化財室 学芸員 中野知幸氏
報告Ⅲ「末松廃寺跡」 野々市市教育委員会 文化課 主事 腰地孝大氏
トークセッション「北陸の古代寺院、発掘最前線」
進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司氏
パネリスト 上記の講師

平成 30 年度みはま土曜歴史講座第 7 回講座

平成 30 年 10 月 20 日（土）、会場・美浜町歴史文化館
講演「提言！興道寺廃寺跡の保存と活用」 慶應義塾大学 文学部 准教授 渡辺丈彦氏

2. 歴史フォーラム等の講演・座談（トークセッション）内容の活字化は、当日の録音記録をもとに美浜町教育委員会事務局 教育政策課 歴史文化館 松葉竜司、金森浩美、神戸綜合速記株式会社が行いました。

本書全体の内容、文章表現を調整するためにパネリスト（著者）が必要に応じて加筆修正し、松葉が最終的な調整をしています。このため、本書の内容と歴史フォーラム等の内容とは同一ではないことをあらかじめお断りします。

3. 本書の編集は、講演者（著者）等の指導、助言のもと、松葉が行いました。

4. 歴史フォーラム等の実施から本書の刊行まで次の関係機関各位のご支援、ご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。（敬称略）

秋田市教育委員会（文化振興課）、海龍王寺、株式会社吉川弘文館、興福寺教学部、国土交通省九州地方整備局（建政部都市整備課）、琴浦町教育委員会（社会教育課）、島根県教育委員会（文化財課）、第一法規株式会社、千葉県教育委員会（文化財課）、唐招提寺、東大寺、長門市教育委員会（文化財保護室）、奈良県文化財保存事務所、奈良文化財研究所、野々市市教育委員会（文化課）、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井ライフ・アカデミー、平城宮跡文化庁管理事務所、若狭町教育委員会（若狭三方縄文博物館）、海野聡、梶原義実、門井直哉、腰地孝大、清野陽一、中野知幸、三舟隆之、渡辺丈彦

目次

例言・目次

【第1部】復元！興道寺廃寺をとりまく景色

問題提起「興道寺廃寺をとりまく景観」	3～6
美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員	松葉竜司
フォーラム I 「7・8世紀の金堂からみた興道寺廃寺の建築的特徴」	7～21
東京大学大学院 工学系研究科 准教授	海野 聡
フォーラム II 「伽藍配置から見た興道寺廃寺」	23～37
東京医療保健大学 医療保健学部 教授	三舟隆之
フォーラム III 「ラグーンの寺々 ―古代海上交通と古代寺院―」	39～51
名古屋大学大学院 人文学研究科 准教授	梶原義実
フォーラム IV 「興道寺廃寺と三方郡家」	53～61
福井大学 教育学部 教授	門井直哉
座談「復元！興道寺廃寺をとりまく景色 ～古代寺院の景観を考える～」	63～78
進 行	松葉竜司
パネリスト	三舟隆之、門井直哉、梶原義実、海野 聡

【第2部】北陸の古代寺院、発掘最前線

調査概報 I 「末松廃寺跡、発掘最前線」	81～84
野々市市教育委員会 文化課 主事	腰地孝大
調査概報 II 「柳田シャコデ廃寺跡、発掘最前線」	85～88
羽咋市教育委員会 文化財室 学芸員	中野知幸
トークセッション「北陸の古代寺院、発掘最前線」	89～94
	中野知幸、腰地孝大、松葉竜司
講演「提言！興道寺廃寺跡の保存と活用」	95～108
慶應義塾大学 文学部 准教授	渡辺丈彦
図表・写真出典	109～112

パネリスト（著者）略歴

【第1部】

復元！興道寺廃寺をとりまく景色

問題提起

興道寺廃寺をとりまく景観

美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員

松葉竜司

1. はじめに

美浜町歴史フォーラムでは、これまでに3度、興道寺廃寺と周辺の古代寺院が取り上げられた。平成16年度開催の「興道寺廃寺の謎に迫る」、平成21年度開催の「ここまで分かった！興道寺廃寺」では、その時点までの発掘調査が総括され（美浜町教育委員会2006・2011）、また平成27年度開催の「再論、若狭の古代寺院」では、興道寺廃寺発掘調査報告書の発行に先立ち、国分寺跡を含めた若狭の古代寺院について改めて検討が加えられた（美浜町教育委員会2015）。

発掘調査の成果だけでなく、このような普及啓発事業が継続的に実施されたことも興道寺廃寺の国史跡への指定（平成30年2月13日指定「興道寺廃寺跡」）に弾みをつけたものと思われるが、これまでのフォーラムでは興道寺廃寺をめぐる遺構や消長、建立氏族などが議論の中心にあり、古代寺院をめぐる景観に関する議論は部分的に行われてきたに留まっている。

古代寺院に関する景観論は、近年、研究の深化が図られており、興道寺廃寺の史跡指定を記念した今回の歴史フォーラムでは興道寺廃寺をめぐる景観をテーマに掲げ、考古学、歴史学、建築学、歴史地理学、それぞれの立場から議論を深めた。

2. 興道寺廃寺の伽藍・寺院地

寺院の消長は、7世紀後葉に寺院建立が始まり、8世紀前葉に塔、金堂を備え、8世紀中葉に講堂、8世紀後半以後、塔の造り替えを経て、金堂・中門・南門のほぼ同時期の造り替えの後、10世紀前葉には廃絶へと至ることが判明した（美浜町教育委員会2016）。つまり、寺院の創建と再建とも言うべき大きく2時期の伽藍を備え、同じ場所で断続的に基壇の造り替えを伴う大規模な寺院再建を行っていることが特徴である。

伽藍の規模は、創建期で南北51m、東西50mほど、再建期で南北51m、東西60mほどに復元され、伽藍配置は創建当初から再建期を通じて法起寺式をとり、塔と金堂が東西に並び建つ景観であったことが判明している。再建段階には塔、金堂に加えて中門、講堂が存在し、段階的な建物の造り替えが図られたため、再建金堂・中門以外は建物の方位がそれぞれ微妙に異なっている。また、塔と金堂、講堂の位置関係がそれぞれ非常に近い反面、中門まで距離があることも特徴として挙げられ、再建中門の西側以外に回廊の痕跡を見出せないが、もし回廊が四面存在したとすれば講堂は創建伽藍の方位に近いと見られ、再建期は講堂への回廊の取り付けはいびつとなる。

寺院地の規模を考える上で寺院区画施設の検出にあまり恵まれていないが、創建期では伽藍の南側で2条、北側で1条の東西溝が確認されたことから南北約120m、再建期は南門基壇と寺域の北限を画する東西溝との距離から南北112～118m、東西80mほどに復元されている。

伽藍地から寺域北限までの南北約40mのエリアでは、複数時期の掘立柱建物跡が複数確認されており、食堂、僧坊などの建物の他、雑舎群なども展開していたものと考えられる。

3. 興道寺廃寺周辺の関係施設

興道寺廃寺をめぐる関係施設として、まず瓦窯が未発見である。寺院南方の山裾に所在する高善庵遺跡が瓦窯と目されるが、かつて焼きひずんだ瓦片が採集されている。これまでの断片的な発掘調査でも窯は見つかっていない。

寺院の北方から北西にかけての地域では8世紀前半の竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡4棟が確認されており、さらに律令集落が潜在的に広がっているものと考えられる。これらの律令集落からは鉄滓、鞆羽口なども出土しており、鍛錬鍛冶が行われていた可能性も高い。

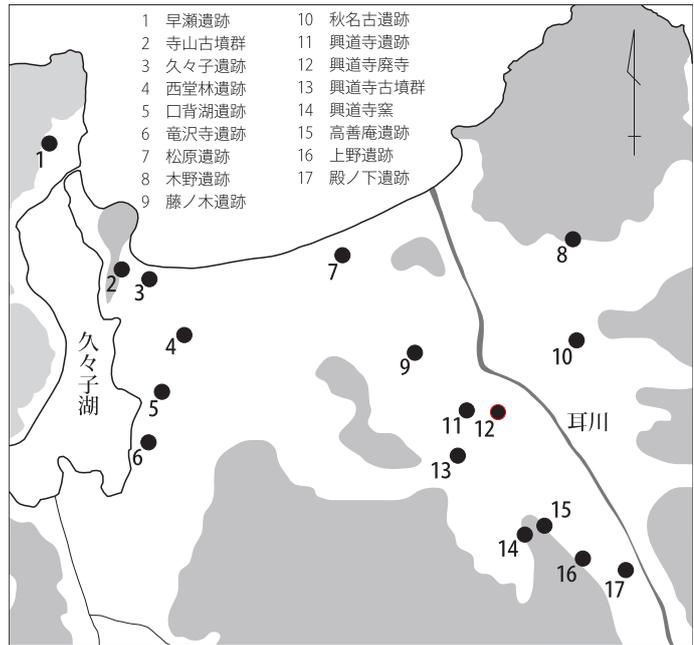


図1 耳川下流域の遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)

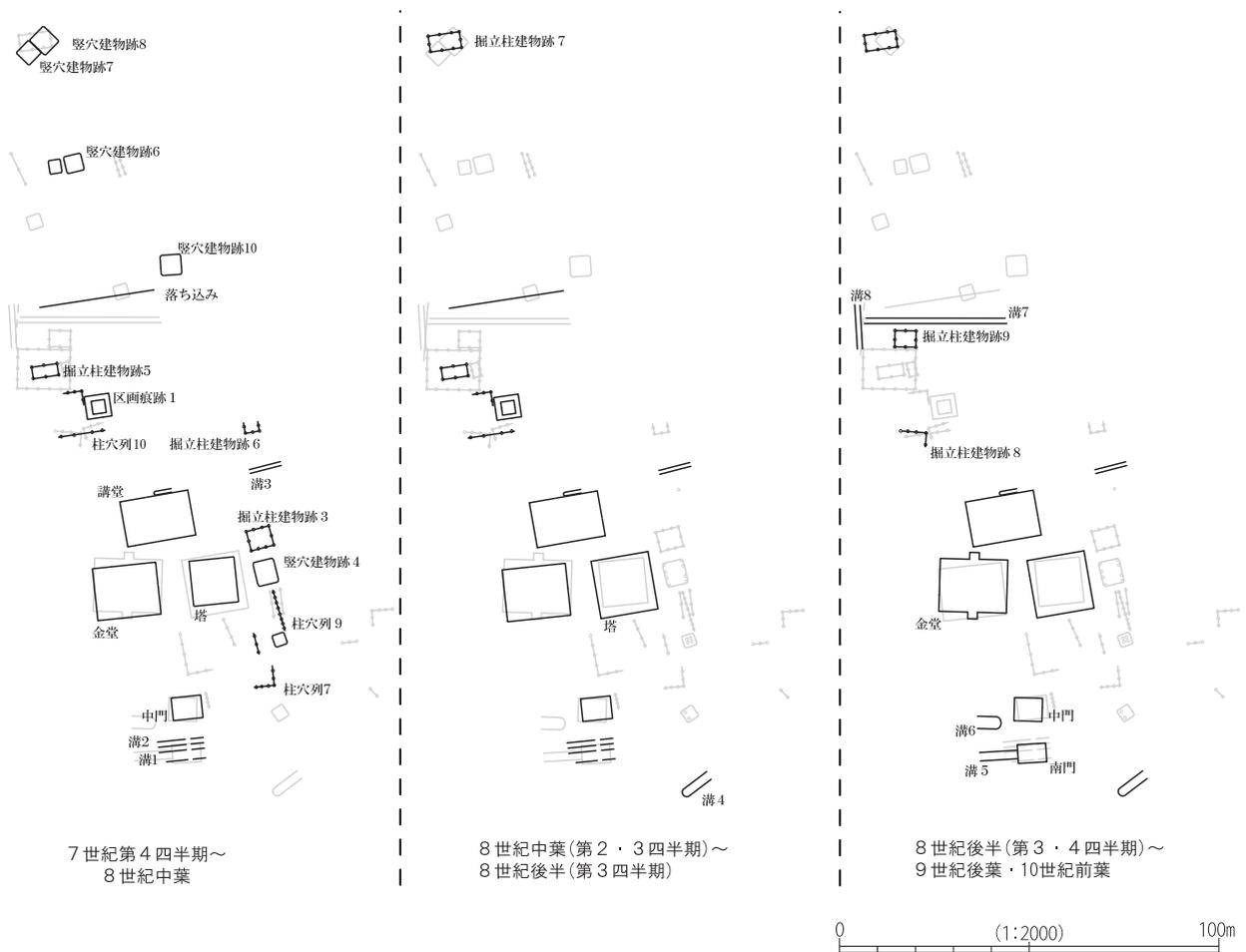


図2 興道寺廃寺遺構変遷模式図 (縮尺 1/2,000)

三方郡家（郡衙）の所在については、鱒川流域の城縄手遺跡の周辺が有力視されてきたが、近年、興道寺廃寺周辺に初期郡家の所在を求める見解も提示されている（美浜町教育委員会 2016）。郡家の所在比定に関する議論は決着を見ていないので、興道寺廃寺と三方郡家との関係をこれ以上論じられないが、興道寺廃寺が所在する河岸段丘面の西側には十分な微高地が展開している。

また、『延喜式』、『和名類聚抄』などに記載が見られる弥美駅家については、これまで耳川下流域を占める三方郡弥美郷に所在が考えられている。美浜町郷市、河原市、木野、中寺など、いくつかの所在説が提示されているが（真柄 1978、門井 2011 など）、いずれにしても興道寺廃寺とのアクセス性は低い。なお、近年の調査で美浜町郷市に所在する藤ノ木遺跡からも 8 世紀に属すると考えられる地床炉、砥石などが確認され、古代の鍛錬鍛冶集落の一部が発見されたことから（美浜町歴史文化館 2018）、弥美駅家との関係も検討する必要がある。

4. 興道寺廃寺周辺の古代景観

有吉重蔵氏が指摘するように（有吉 2014）、例えば『額田寺伽藍並条里図』の共同研究においては寺領（田畠、岡、林、原）、道・冠木門、墳墓、河川、水路、池など、氏寺と考えられる古代寺院の景観構成要素の一端が明らかにされているが、実際に興道寺廃寺の寺院地周辺にはどのような景観が広がっていたのか、不明な点も多い。

ただ、興道寺廃寺においては南門基壇からさらに南に約 25m の範囲まで再建期の整地層が広がることが確認されている。南門の前面、つまり寺院の正面には寺院にいたるまでの道路や、ともすれば幢幡などを立てた広場状の空間が広がっていた可能性も想定されるが、このように寺院地外であるにも関わらず、一定程度の土地改変（整地）を施す様相は、寺院へのアクセス道、空間整備に留まらない寺院再建期の地域開発の一端もうかがうことができる。

また、興道寺廃寺の北方から北西方では竪穴建物や掘立柱建物などからなる 8 世紀前半代を中心とした集落が潜在的に分布する様相が明らかになっている。土井ノ上 1 区調査区では鉄滓、鞆羽口などが出土しているが、当然、小鍛冶のみに留まらない、寺院の維持、経営のための施設である可能性は高い。また、寺院地の西限を画すると考えられる南北溝 SD160202 埋土中の花粉分析によってイネ科、ソバ属の花粉が抽出されており、8 世紀後半以後の寺院再建期には寺域北西隅部付近に田畠があった可能性が新たに浮上するなど、寺院経営に伴う計画的な植物栽培が展開していた可能性も考えられる。

寺院は在地社会の核ともなるランドマークであり、この周辺には官衙を含めたさまざまな施設、交通路、瓦窯、集落拠点などがあったものと考えられるが、しかし、前述のとおり瓦窯、官衙施設、交通路の様相は未だ不明であり、さらなる調査研究の蓄積が必要である。

5. 興道寺廃寺の立地と景観

興道寺廃寺は、耳川下流域左岸の低位河岸段丘面の東縁に立地する。この段丘には興道寺遺跡やその北側に藤ノ木遺跡が所在し、弥生時代以後、特に古墳時代から古代にかけての遺跡が面的に広がっている。さらに北方（現在の国道 27 号以北）には潟湖（ラグーン）があり、若狭湾へといたる。一方、下流域の右岸には旧流路に沿った自然堤防も見られるが、遺跡の多くは東方に位置する御嶽山の山裾緩斜面に立地しており、左岸とは対照的な地形と遺跡分布を示している。

興道寺廃寺から周囲を望むと、まず南から南南東にかけては近江・湖西（旧マキノ町）へといたる標高 900m 級の山々と谷筋を遠望し、東には耳川の流れや近江へと至る交通路を見下ろすな



写真1 耳川下流域空中写真（北から撮影）
〔福井県教育庁埋蔵文化財調査センター提供〕



写真2 興道寺廃寺空中写真（南から撮影）

ど、耳川を介した南北の往来を一望できたと考えられる。

また、西には前代の後期古墳群や、寺院の西側を中心に展開した律令集落、あるいは寺院と接続するように存在したであろうローカルな交通路も眺望することもできたものと考えられる。北は興道寺廃寺の雑舎群の向こうに、北陸道（駅路）の東西の往来、そしてさらに潟湖や若狭湾を行き交う水上交通の往来を遠望したのと考えられる。このように興道寺廃寺からは四方を十分に見渡すことができ、逆に言えば耳川下流域の平野があまり広くないため、



写真3 興道寺廃寺周辺写真（東を望む）

四周、東西南北いずれの方向からも興道寺廃寺の伽藍を一望できたものと考えられる。このことは興道寺廃寺の立地と景観を考える上で大きな特徴の一つである。

そして、現在、国史跡・興道寺廃寺跡の塔基壇の東側に立ち、周囲を望むと、東から南にかけては御嶽山のふもとに広がる長閑な田園景観と、美浜町新庄を越えて近江へといたる耳川の谷筋を遠望し、北には若狭湾とランドマークとして象徴的な洪水山や天王山を一望し、西には現代のいくつかの建物の間から興道寺古墳群のいくつかの墳墓を眺めることができる。幸いにも興道寺廃寺の周辺は大きな開発が及んでいないため、古代景観を比較的イメージしやすい歴史的・自然的景観が残されている。平成31年度にかけて検討が進められている「興道寺廃寺跡保存活用計画」の策定を行う上でも、重要な景観要素が残存していると言えよう。

（引用・参考文献）

- 有吉重蔵「国分寺と都市計画」『季刊考古学』第129号 2014 雄山閣
 門井直哉「興道寺廃寺から見た交通路」『歴史シンポジウム記録集5 こまで分かった！興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 美浜町教育委員会編 2011
 田辺常博「古代三方郡の寺院と集落そして生産遺跡」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
 真柄甚松「第4章 北陸道 第2節 若狭国」『日本古代の交通路』Ⅱ 1978 藤岡謙二編 大明堂
 美浜町教育委員会『歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 2006
 美浜町教育委員会『歴史シンポジウム記録集5 こまで分かった！興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 2011
 美浜町教育委員会『歴史シンポジウム記録集10 再論、若狭の古代寺院 ～遠敷郡の古代寺院そして興道寺廃寺～』 2015
 美浜町教育委員会『興道寺遺跡発掘調査報告書』2016
 美浜町歴史文化館『みはま発掘速報展2018 「掘り出されたみはまの歴史Ⅰ」解説パンフレット』 2018

7・8世紀の金堂からみた興道寺廃寺の建築的特徴

東京大学大学院 工学系研究科 准教授

海野 聡

皆さん、おはようございます。ただ今、ご紹介に預かりました東京大学の海野と申します。私の所属は工学系研究科という理系で、歴史とはあまり関係ないと思われる方も多いかも知れませんが、発掘して遺構として何らかの建物の痕跡が出てきた際に建物をどのように考えるのかという、建物と発掘遺構を繋ぐということをしています。私以外の同僚はビルやマンションなどの建物を造るようなことをしていますが、私の研究室では基本的には古い建物をどのように残していくのか、あるいは発掘遺構で出てきたものから過去の建物がどのような建物であったのかということの研究をしています。



その中で、今日は興道寺廃寺の金堂を中心にお話ししたいと思います。発掘遺構で7、8世紀の金堂はいくつかわかっているのですが、実際に痕跡から建物をどう考えていくのかということをも最初に簡単にご説明させていただいて、興道寺廃寺と一文字違いの有名な興福寺で平成の中金堂が奈良時代の形を模してちょうど先月に完成しましたので、どのように発掘遺構から建物が復元できたのかというお話しをさせていただいて、この興福寺の例を通じて、では興道寺廃寺はどうであったのかというきっかけを提示できればと思います。

1. 古代建築の基本構造

まず最初に、古代建築の基本的な構造をご説明したいと思います。だいたい皆さんは古い建物を見た時に、ゴチャゴチャしているという印象を受けられる方が多いと思いますが、建築は下から順番に積み上げていかないと造れないという特徴があります(図1)。

建物は基礎や土台が大事と言われるように、一番下のところにはいわゆる基礎と言われる部分があり、古代建築の場合は基壇という、普通の地面よりも少し高くして、そこに建物を建てています。その上に礎石を据えて、柱を立てることになりますが、柱や梁などの部材、建物の骨組みにあたる部分を軸部と言います。その上に組物が乗っているのが日本、あるいは東アジアの寺院建築の特徴ですが、今日のお話

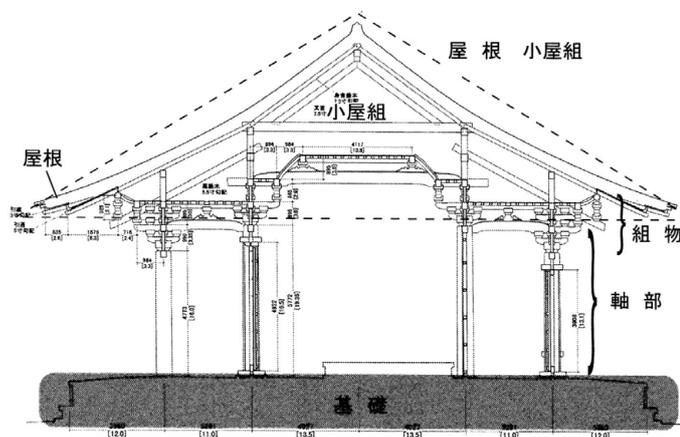


図1 建物の各部の構成

しでもこの組物という部分が地面から屋根を考える際の一つのキーワードになるので、これに少し着目していきたいと思います。その上に全体の屋根をかけて、瓦、あるいは板などを葺き、風雨をしのぐための屋根をかけていくという順番になります。

奈良時代の名建築である唐招提寺金堂のように、現代まで残っているものでは、だいたいの建物の全体像がわかりますが、発掘調査で出てくるのは基本的に基礎だけです。建物の一番下の部分だけから全体像をどのように考えていくのかというところが問題になってくるわけです。今日のフォーラムでは、伽藍の中の一つの建物がどのような景観をつくっていたのかというところが、私に与えられたテーマかと思えます。

では、古代の建築を見る時に何を考えていかなければならないかということですが、日本建築の古い建物の場合には、屋根の形が見る人に大きな影響を与えています。屋根の形には大きく四つありますが(図2)、この全てを知っていると、少しは古建築をわかっていると自慢できるのではないかと思います。一番単純な形として切妻造^{きりづまづくり}があります。本を伏せたように山型に折って屋根をかけるという形で、一番簡単にかけやすい屋根です。門などに比較的好く使われていますが、奈良時代の代表的な門である東大寺転害門の屋根は切妻造です。この切妻造の四周にぐるりと廻らせると入母屋造^{いりもやづくり}になります。中世以降の日本建築では比較的好く用いられて、古いお堂に行くと入母屋造の屋根が多く見られるかと思えます。屋根の頂部から三角形の破風^{やぶかぜ}が出てくるのが入母屋造の特徴です。同じような形で寄棟造^{よせむねづくり}がありますが、この場合は破風の三角の部分なくなり、大きな三角形と台形で構成された屋根の形になります。我々、現代人が見ると中国っぽい屋根とよく言われるのですが、中国では格式が高いとされている屋根の形式です。この寄棟造と入母屋造は一見よく似ているのですが、三角の部分があるか、ないかで見分けていただければと思います。今までの屋根は横長の平面の場合ですが、例えば正方形、あるいは正六角形、正八角形といった形の場合は宝形造^{ほうぎょうづくり}という形の屋根であることが多いです。昔、算数や数学で三角錐や四角錐を習ったと思えますが、その錐の形の屋根で、一点から各所まで棟がおおりて屋根を構成しています。代表的なものとしては法隆寺の夢殿という建物があります。今日は取り上げませんが、このような形で代表的なものは、塔が正方形の平面をしていますので、塔の場合は宝形造の屋根があり、その上に相輪が塔の上に立っているということになります。

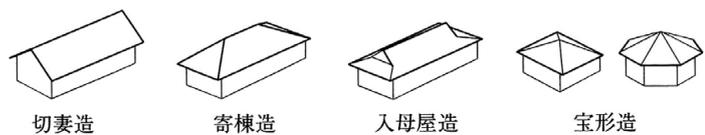


図2 さまざまな屋根の形

この四つの屋根の特徴は、木造建築の構造と大きな関わりがあります。では木造建築がどのように造られているのかというお話を簡単にさせていただきます。一番単純なものとして、柱を立てて、梁をかけたものが基本構造になります。鳥居のように柱を立て、横に1本の梁を渡すというのが単純な形になります。ただ、この形では横からバンと押すとパタンと倒れてしまうので、建築として成立させるために門形の架構を何個も何個もつなげて、それを桁でつな

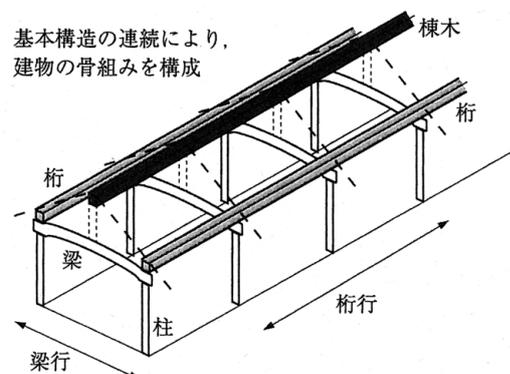


図3 基本架構の連続

ぐことで安定させるという方法をとります。その上に棟木をつけることで安定した構造とすることが木造建築の基本的な形になります（図3）。

こういう構造ですので、古い建築の場合、建物の平面は基本的に長方形の形になるということが基本的な構造になります。ただし、これはあくまで古代建築の話で、近世以後、新しい時代になると屋根の形と平面が離れていって複雑になっていくのですが、少なくとも古い時代では、ある程度この平面と屋根の形が一致することが特徴です。

では、屋根の形がどのようにできているかを考えると、平面をどのように大きくしていくかということと大きな関わりがあります。建物の場合、門の形のような一番基本的な構造を見た時に、奥行きを幅を広げるとということと、長手方向を広げるとということのどちらが簡単かと言えば、この長手方向を広げの方が簡単です。例えば回廊、長い廊下みたいものを考えると、ひたすら長くしていけば建物の面積を広くすることはできるわけです。しかし、この梁行、奥行方向を大きくしようとするとうどうなるのかということが一つ問題になります。例えば梁行方向の大きさを 20、30mと大きくしたいと考えた時に柱と柱の間に梁という部材を渡さなければならないわけですから、この梁を 30m分用意しなければいけない。さらに途中で梁を支えるものがないので、太い大きなものを用意しなければならないとなると、材料の入手が難しいですよね。実際、これは近世でも難しく、東大寺大仏殿の再建をする際にやはり全国中探し回っても梁となる木材がなく、日向国まで探しに行ったという記録も残っていますので、この梁を大きくするのは大変という歴史があります。

それでは、どうしたらよいかということですが、この梁行の梁を長くできないのであれば、庇を前につければよいのではないかとということで、この奥行き方向を広げていくということが日本建築の発展になっていきます。

一番簡単なのは、片廂として建物の正面側に廂をつけて面積を増やす。それでも足りなければ、建物の前後の二面に廂をつけるという形式。さらに足りなければ建物の両脇にも廂をつけて三面、最終的には四面廂しめんびやしとすることで、面積が大きくなる。梁行方向を大きくすることができるということが一つの建築的な発展になります（図5）。

一番大きな四面廂はもちろん格式が高く、面積も大きいので立派であるということになります。これは屋根の形とも関係してきます。片廂、二面廂などの建物に関しては前後に廂をつけるので切妻造という屋根がかかります。それに対して、この四面廂の場合は入母屋造、あるいは寄棟造という屋根がかかります。要は平面の形から屋根の形が変わって、外からの見え方が変わってくるということになるわけですね。これは、ただ面積が大きくなった、平面が大きくなったということだけではなく、外からの見え方も変わってくる、今日のテーマで言えば

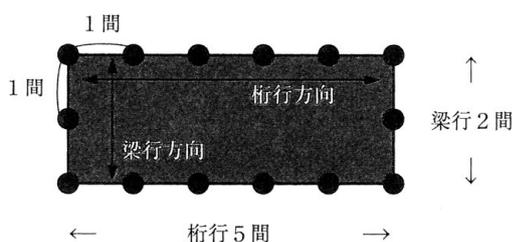


図4 建物規模の表し方

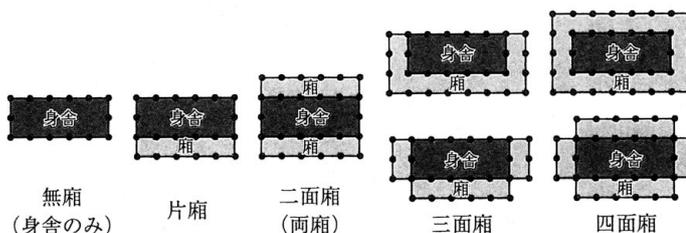


図5 平面の拡大と廂の付加

景観が変わってくるということが古代建築の特徴になります。

もう一つ、実は組物は軒の出と大きな関わりがあります(図6)。この組物の図は大きく分けて上のグループと下のグループに分かれます。上と下とで何が違うかと言えば、柱と桁という部材の位置関係がそれぞれのグループで違うということです。まずそもそも、この組物に何の役割があるのかということですが、一つは組物をつけていると建築として格好よいという意匠的な面もあるのですが、もっと大事な要素があります。それは軒の出を大きくするという方法です。何を言っているのかというと、桁は屋根を支える部材で、基本的にはこの桁は柱の上に載っている一番単純な形、全て直接柱の上に桁を置くという形になるのですが、軒の出を大きくしたい、軒先をどんどん外に出したいとなると、この桁の位置を柱から外に大きく出すことになってくるわけですね。柱の上に直接桁が載っている場合はだいたい2.0~2.4mぐらいで、軒先はその位置までしか出ないということになるのですが、この組物を使うことで柱よりも外側に桁を出すと、なんと4.4mぐらい外に軒先を出すことができるということになります。倍近く軒の出が出るわけですね。

なぜ軒の出が大事なのかと言えば、日本の場合、雨が多いということがあって、一つは屋根を大きく出すことで、例えば柱の足元の部分が腐りにくい、さらには水平性ですごく軒の出が大きいことで、意匠的にも軽やかな外観ができるということもあって、このように軒の出が平面とも関わってくるわけです。

組物を大きく分けると、図6の上側は手先の出ない柱から外側に軒先を出すような組物ではなく、そのまま柱の筋と桁の筋が合う形式の組物で、下側はいくつか手先を出す組物になります。この下側の手先を出す組物を使うということは、ある意味、格式を表すものでもあるので、組物をたくさん使っている建物は立派な建物ということになります。具体的な例では唐招提寺の金堂が手先を出す三手先という一番格式の高い組物であることに対して、その背後にある講堂は手先を出さない組物にしているので、どちらが大事かということも組物の形からわかるということになります。

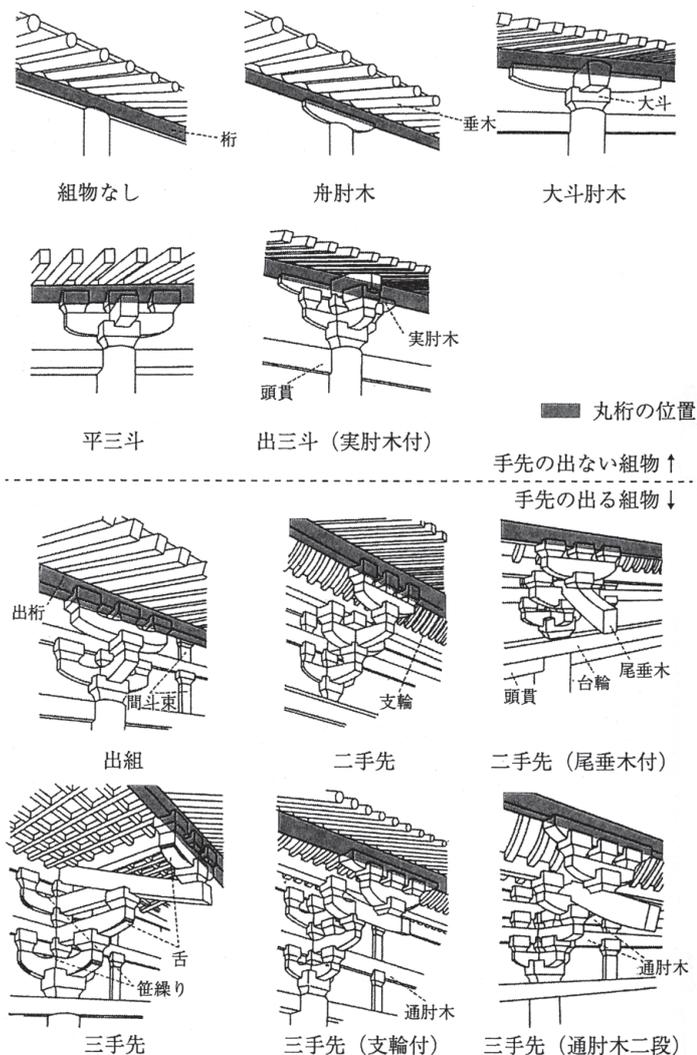


図6 さまざまな組物形式

この組物と軒の出の関係が、今日のお話しと関わってきます。一つは屋根と雨落溝の関係にあります。発掘調査でわかるのは一番下の部分だけですが、柱の位置と基壇の大きさがわかると、実は軒の出がわかるという関係性が見えてくるわけですね。図7は平面と断面の模式図になるのですが、基壇の外側に雨がポタポタと落ちる、その雨を受ける雨落溝があったとすれば、この基壇の端、あるいは雨落溝までの距離が基本的に屋根の軒の出とほぼ同じ距離、あるいはそれ以上の距離になるということが推定できるわけです。基壇の内側に落ち

屋根と雨落溝の関係

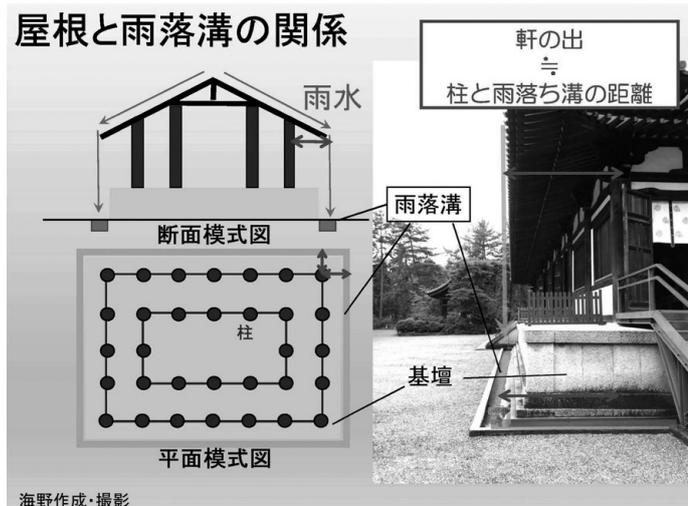


図7 軒の出と雨落溝の関係

る可能性もゼロではないですが、基本的にはやはり基壇の上は歩いたり、儀式で使ったりするということを考えると、基壇の外側にちゃんと雨を落とすということが比較的多く、現存する建物を見ても軒先が基壇より少し外側にあり、雨落溝があればそこに雨が落下するという関係性があるので、このような関係性を知っておくと基壇の形や大きさ、あるいは柱の位置がわかれば、ある程度、屋根の軒の出がわかるということになります。

さらに軒の出がわかれば、組物の形がどうだったのかということも想定できる材料になってくるわけですね。この基本的な基礎の構造から建物の上部構造との関係を考えていく一番の基本になってきます。実際に組物の関係を見ると、唐招提寺の金堂では柱から基壇の外側までの距離がかなり大きいわけですね。柱の筋から一番外側の桁までが少し外側に出ている。そこからさらにその外側に軒先を出すことで、大きな軒の出をつくっています。軒の出と柱、雨落溝、あるいは基壇の端までの距離がほぼ一致するということになるわけです。このようなことを通して建物を復元する、建物の構造を考えていくということが一つの材料になってきます。

ここで簡単に建物を復元するために、どのようなことを考えなければならないかということを示しておきたいと思います。まず、一番大事なのは発掘調査の情報です。何をにおいてもこれが一番大事なことになります。どこの遺跡でも基本的に発掘調査で出てきた遺構は建物の痕跡そのものですから、その情報が一番大事になってきます。そこからもちろん柱の配置がわかることもあり、柱の位置から基壇の出がわかることで軒の出が判明することもあるということが、発掘遺構から得られる基本的な平面情報の整理になります。もちろんこれだけでは形をつくることはできませんので、それ以外のものとして同時代の現存する建築が大きな参考材料になります。例えば唐招提寺の金堂はとても大事な例になります。また、もう少し古い時代ではもちろん法隆寺の金堂がそうです。このような古い建物が日本には残っていますので、これらから組物などのサイズ、組物の形や種類がわかります。

二つ目は、柱と柱の間隔も時代的な特徴があるわけですね。時代によって技術的な差があるので、ある程度、同時代に造ることができる構造的な限界があるので、このようなことも重要な参考の一つになってきます。また、実際に建物を編年的に長く見ていかないとなかなかわかりにくいのですが、古代建築、あるいは鎌倉時代ぐらいまでの建築は、我々の言葉でいうと木太いという言い方をしますが、柱や梁、桁などの部材が割としっかりしているという印象を受けるよ

うなものを使っています。これに対して、室町時代、あるいは江戸時代になると、どんどん柱が細くなり、細い小さな部材でも大きな建築を造るようにできる技術が出てきます。このような柱と部材の比例関係みたいなものも、残っている現存する古い建築からの大きな情報になってきます。

三つ目、これは場所によりますが、文献史料が残っている場合には建物の規模や、あるいは金堂にしても何重の屋根であったのか、塔にしても三重なのか、五重なのか、七重なのか、そのような情報が記されていることもあって、復元の材料になることがあります。

四つ目に関してはかなりレアなケースですが、絵画資料から昔の建物の形がだいたいわかる場合があります。絵画といってもさまざまで、絵巻物や曼陀羅などに描かれている場合もあります。中世や近世になると建築の建地割図という、今で言えば設計図に近いようなものが残っていることもあるので、建物を復元する上でかなり有力な資料になってくるということになります。ただし、この絵画資料に関してはデフォルメされている可能性もあるので、そのまま受け取ることはできないということもあって、資料の解釈が必要になってきます。

2. 奈良時代金堂の建築的特徴

では、奈良時代の金堂にどのようなものがあるかということを少しお話ししたいと思います。実は奈良時代の金堂はあまり残っていません。一つは海龍王寺に西金堂が残っているのですが、長手方向、桁行方向が3間、梁行方向が2間の小さな仏堂です(写真1)。中に五重小塔が入っていることで有名ですが、西金堂は一番簡単な切妻造の屋根で、組物に関しても平三斗という形をとっています。仏堂の形としてはかなり小規模なパターンの一つとして考えられるということですが、ただ、これは西金堂ですので伽藍でいうところの中心的な金堂を考える際に、この西金堂の例から考えるのはしんどいと思います。

もう一つが東大寺の法華堂です(写真2)。法華堂という名前がついているとおりに、東大寺の金堂ではありませんが、桁行5間、梁行4間という規模の仏堂としては一つの有効な参考になるという形になります。実際に建物を見ると、どの部分が奈良時代のものなのかということがわかりにくいといわれるお堂ですが、左側の部分が奈良時代で、右側の礼堂と言われる部分が鎌倉時代にくっつけられたという形になっています。この左側の部分が奈良時代の金堂の形を考える上で参考になるということになります。5間×4間という規模で、組物は出組という柱筋から一手だけ手先を出したような組物で、三手先などの組物に比べると少し簡素な組物という形をとっています。屋根の形は寄棟造の屋根になっています。現況では前に礼堂というお堂がくっついているので屋根と屋根の取り合いのところには雨と雨が入り込んだところを受ける樋を設けて、



写真1 海龍王寺西金堂 (著者撮影)



写真2 東大寺法華堂 (著者撮影)



写真3 唐招提寺金堂 (著者撮影)

まさに平面を拡大しているということになっています。内部を見ると、中心の身舎は折上げた天井をしており、仏像を奉るところは内部空間でも一段屋根、天井を高くしています。天井が一段切り上がっているので、ここが大事な空間であるということを経験表現しているということになります。今日のお話しでは建物の外のお話しが中心になりますが、建築はその場所、その場所で、床の高さや天井など細部を使いながら、それぞれ差別化していますので、表現の違いが格式の違いになっています。

奈良時代の大寺院で、唯一残っている金堂が唐招提寺の金堂です（写真3）。鑑真が唐からやってきて、そのために造られたお寺としてよく知られていますが、桁行は7間、梁行、奥行が4間という規模です。正面の1間は吹き放ちという構造で、要は建物の内部ではなく、外とつながっているような場所になっています。組物は三手先という、日本建築では最高級と言われる手先の大きい組物を使い、軒の出がかなり大きなお堂を造り出しています。屋根は寄棟造で、内部の仏像を奉るところの上にはやはり折上げた天井を造ることで空間を荘厳しています。

実は参考にできる8世紀の金堂はこのぐらしかなく、なかなか日本建築から復元することは大変ということがわかっていただけかと思えます。さらに言えば、日本はまだこれでも残っている方で、お隣の韓国ではそれこそ本当に古代の建物が残っていないので、今も建物を復元する際は日本の事例をある程度参考にしなければいけない。あるいは中国も8世紀の建物は残りが少なく、唐代の建物が少ない中で日本のものを参考にしながらというところで研究されているということが実情です。

3. 奈良時代諸寺金堂の発掘遺構

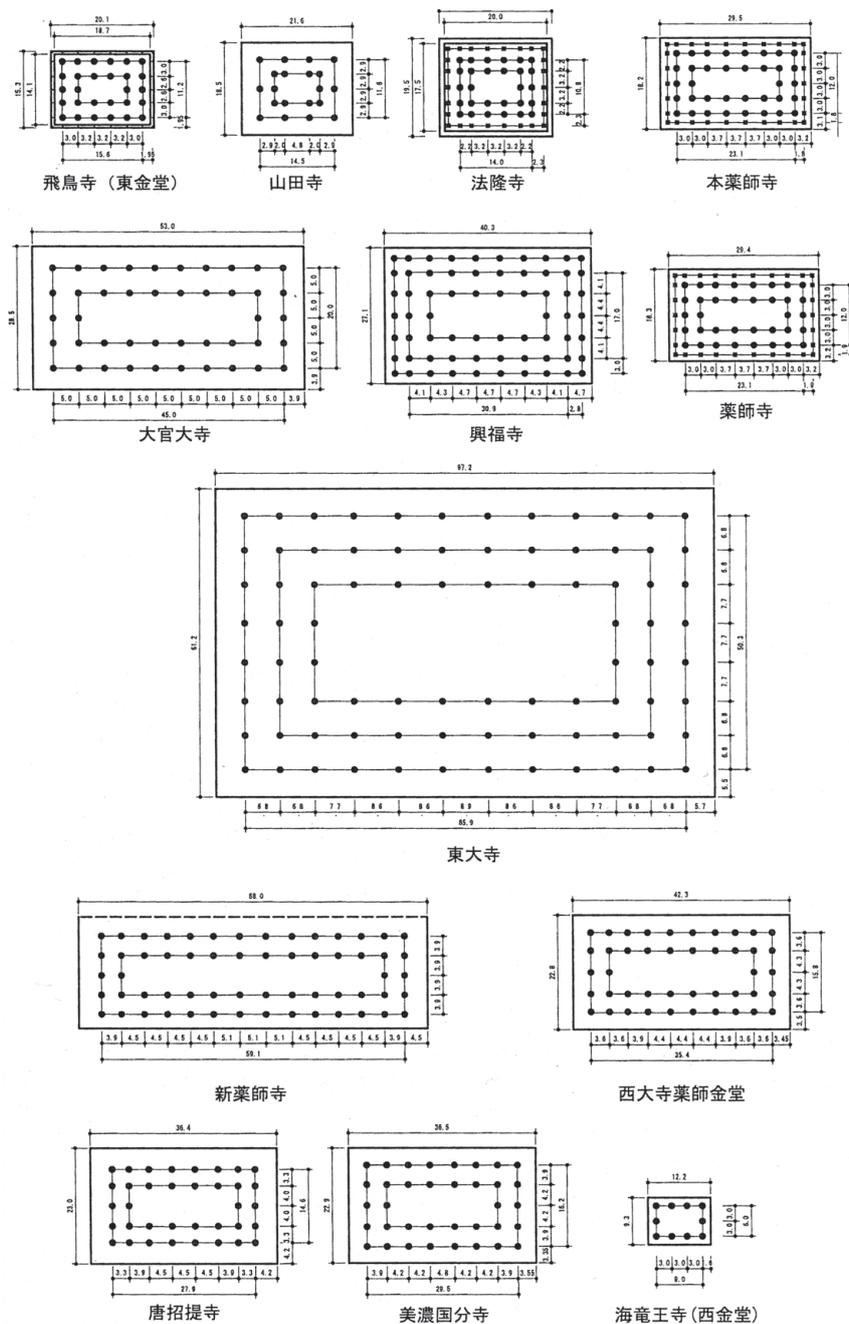
では、次に奈良時代の他の大寺院、諸寺の金堂の発掘遺構を見ながら、興道寺廃寺はどうかということをお話ししていきたいと思えます。

まず、奈良時代の金堂の特徴の一つとして、飛鳥時代、いわゆる7世紀の金堂と比べると、圧倒的に規模が大きくなっていることが挙げられます。古くからよく知られているのですが、飛鳥寺や法隆寺などの7世紀の金堂に対して、官大寺と言われるような興福寺の中金堂、薬師寺、本薬師寺などでは梁行方向、桁行方向ともかなり規模が大きくなるのが一つの特徴として挙げられます。奈良時代の金堂について言えば、四面廂という二重の柱位置なのですが、その外側にさらに裳階が廻り、三重の柱配置になるものもいくつか出てくるという大きな特徴があります。

まず奈良時代の、最高級のいわゆる官大寺と言われる平城京内にあるような寺院がどうかであったのかということ、文献史料、あるいは絵画資料から少し見ていきたいと思えます。一番大きな東大寺ですが、今の東大寺は残念ながら奈良時代の東大寺ではなく、江戸時代に再建されたものです。さらに言えば、江戸時代の時に規模を縮小し、建物の両脇を削っていますので、奈良時代は今よりさらに大きな東大寺であったということになります。その大きさは、いろいろな資料からわかっているのですが、屋根にだけ注目していきますと、『七大寺巡礼私記』という、平安時代の貴族がお寺を巡った際にどのような形だったのかメモ書きした史料を見ると、「有（裳）層仍二蓋」、裳層があり、二蓋、二つの屋根があるという記述があります。これが意味するものは、今の東大寺もそうですが、屋根が二重になっているということを書いてあると考えられるわけです。

後でお話する興福寺に関しては春日大社が脇にあり、「春日社寺曼陀羅」という14世紀ぐらいの曼陀羅があるのですが、それに興福寺の伽藍の図があり、比較的よく描かれています。南大門があり、中門があり、回廊で囲って、その先に中金堂があるという図になっています。この中金堂を見ると、屋根が寄棟造で描かれ、さらに下にもう一層の屋根があって、二重の屋根に描かれていることがわかります。残念ながら文献史料には二重の尾根とは書かれていないのですが、14世紀の絵から見れば二重の屋根であったことが想定できるわけです。さらに発掘遺構からも二重と考えてよいであろうという成果が出ています。

薬師寺の金堂も残念ながら残っていません。薬師寺東塔という国宝の三重塔が残っていますが、各層に全て裳階があります。三重の各重裳階つきという特殊な構造をしています。薬師寺の金



(単位はm)

図8 主要金堂の平面模式図 (縮尺 1/1,500)

堂に関しても二重二閣という書かれ方がされています。金堂に関してこの閣が何を示すのかということがなかなかわからなかったのですが、薬師寺の東塔が残っていたおかげで、閣とは裳階を指すのであろうことが考えられ、屋根は二重で各重に裳階がある形ではないかと考えられるわけです。やはり薬師寺についても二重二層ということですね。

大安寺に関しては『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』という史料が残っています。大安寺の由緒や財産目録の記述があって、その中に「金堂。長十一丈八尺。広六丈。柱高一丈八尺。」と金堂の大きさが書いてあり、柱の高さまで書いてありますが、残念ながら屋根が一重か二重かというところまでの記述がこの史料には書いてないので、少し残念ですが大安寺に関してはわからないということになります。

番号	寺院名	年代	柱間				基壇					備考		
			間数	桁行		梁行		形式	桁行		梁行			
				身舎柱間寸法(m)	廂の出(m)	身舎柱間寸法(m)	廂の出(m)		総長(m)	基壇の出(m)	総長(m)		基壇の出(m)	
*	興道寺廃寺	創建期	5×4力	-	-	-	-	不明	16.8	-	13.8	-	1.22	
*	興道寺廃寺	再建期	5×4力	2.4×3	2.4	2.4×2	2.4	乱石積	18.0	3.0	14.1	2.25	1.28	
*	興道寺廃寺	再建期(新案)	5×4力	3.0×3	2.7	2.7×2	2.7	乱石積	18.0	1.8	14.1	1.65	1.28	
1	新薬師寺	8世紀中頃	13×4力	4.5×4, 5.1×3, 4.5×4	3.9	3.9×2	3.9	壇正積	68.0	4.5	29以上	-	-	
2	東大寺	8世紀中頃	9×5	7.7, 8.6×2, 8.9, 8.6×2, 7.7	6.8	7.7×3	6.8	壇正積	97.2	5.7	61.2	5.5	1.59	裳階付(裳階の出6.8m)。基壇の出は裳階隔柱から。
3	西大寺薬師金堂	8世紀後半	9×4力	3.6, 3.9, 4.4×3, 3.9, 3.6	3.6	4.3×2	3.6	壇正Or切石積	42.3	3.45	22.8	3.5	1.86	
4	大官大寺(文武朝)	8世紀初	9×4	5.0×7	5.0	5.3×2	5.0	切石積	53.0	3.9	28.5	3.9	1.86	
5	興福寺(中金堂)	8世紀前半	7×4	4.3, 4.7×3, 4.3	4.1	4.4×2	4.1	壇正積	40.3	4.7	27.1	4.6	1.49	裳階付(裳階の出桁行2.8m, 梁行3.0m)。基壇の出は主屋隔柱から。
6	薬師寺	8世紀前半	7×4	3.0, 3.7×3, 3.0	3.0	3.0×2	3.0	壇正Or切石積	29.4	3.2	18.3	3.2	1.61	裳階付(裳階の出1.9m)。基壇の出は主屋隔柱から。
7	本薬師寺	7世紀末	7×4	3.0, 3.7×3, 3.0	3.0	3.0×2	3.0	切石積	29.5	3.2	18.2	3.1	1.62	裳階付カ。基壇の出は主屋隔柱から。
8	東寺	9世紀初	7×5	5.1×2, 5.4, 5.1×2	3.9	3.4×3	3.9	切石積	42.2	4.3	26.8	4.4	1.57	現存遺構と同規模。
9	唐招提寺	8世紀後半	7×4	3.3, 3.9, 4.5×3, 3.9	3.3	4.0×2	3.3	壇正積	36.4	4.2	23.0	4.2	1.58	現存遺構。二重基壇の可能性あり。
10	肥前国分寺	8世紀中頃力	9×4力	3.3×2, 4.2×3, 3.3×2	3.3	3.6×2	3.3	不明	39.4	3.5	20.8	3.5	1.89	
11	武蔵国分寺	8世紀中頃	7×4	5.4, 5.9×3, 5.4	3.9	4.5×2	3.9	乱石積	45.5	4.6	26.4	4.8	1.72	
12	相模国分寺	8世紀後半カ	7×4	4.8, 5.9×3, 4.8	3.6	4.8×2	3.6	葺石状	40力	2.8	22力	2.6	1.82	
13	飛騨国分寺	8世紀中頃力	7×4	3.6, 4.2×3, 3.6	3.3	3.6×2	3.3	-	-	-	-	-	-	基壇不明。
14	美濃国分寺	8世紀後半カ	7×4	4.2×2, 4.8, 4.2×2	3.9	4.2×2	3.9	磚積	36.5	3.55	22.9	3.35	1.59	
15	駿河国分寺	8世紀中頃力	7×4	4.5×5	3.6	4.9×2	3.6	乱石積	37.0	3.1	23	3.1	1.61	
16	遠江国分寺	8世紀中頃	7×4力	4.2×2, 4.8, 4.2×2	3.0	4.8×2	3.0	木製	33.3	2.7	21.5	3.0	1.55	
17	伊賀国分寺	8世紀中頃力	7×4	3.6×2, 4.2, 3.6×2	3.0	3.6×2	3.0	不明	31.5	2.9	20.2	3.5	1.56	
18	出雲国分寺	8世紀中頃力	7×4	4.2×5	3.3	4.2×2	3.3	瓦積	33.0	2.7	19.8	2.4	1.67	
19	周防国分寺	8世紀中頃	7×4	3.6, 3.9×3, 3.6	3.0	3.6×2	3.0	磚積	33.9	4.5	22.2	4.5	1.53	
20	讃岐国分寺	8世紀中頃力	7×4	3.9, 4.2, 4.8, 4.2, 3.9	3.6	3.6×2	3.6	-	-	-	-	-	-	基壇不明。
21	豊後国分寺	8世紀後半	7×4力	3.6×2, 3.8, 3.6×2	3.7	3.6×2	3.7	乱石積	32.6	3.5	21.6	3.5	1.51	
22	薩摩国分寺(創建金堂)	8世紀後半	5×4	3.6×3	2.6, 2.2	3.5×2	2.7, 2.5	乱石積	20.2	2.3	16.3	2.1	1.24	各面で四面廂の出が異なる。
23	若狭国分寺	8世紀後半カ	5×4	4.8×3	3.6	3.9×2	3.6	乱石積	28.8	3.6	21.9	3.5	1.32	
24	観世音寺	8世紀前半	5×4力	3.7×3	2.6	2.6×2	2.6	瓦積	24.0	3.9	18.0	3.8	1.33	
25	法隆寺	7世紀後半	5×4	3.2×3	2.2	3.2×2	2.2	切石積	22.0	4.0	19.5	4.4	1.13	現存遺構。二重。裳階付(裳階の出は2.2m)。基壇の出は主屋隔柱から。二重基壇。
26	飛鳥寺(東金堂)	6世紀末	5×4	3.2×3	3.0	2.6×2	3.0	乱石積カ	21.9	3.2	17.4	3.1	1.26	二重基壇。下成基壇上に礎石アリ。下成基壇上の礎石の出は1.95m。基壇寸法は下成基壇のもの。
27	川原寺	7世紀後半	5×4	3.6×3	3.0	3.0×2	3.0	壇正Or切石積	23.4	3.3	19.2	3.6	1.22	
28	檜隈寺	7世紀後半	5×4	2.7×3	2.9	2.8×2	2.9	乱石積	18.0	2.1	15.5	2.1	1.16	二重基壇。下成基壇上に礎石は不明。基壇寸法は下成基壇のもの。
29	高麗寺	7世紀後半	5×4	2.1, 2.7, 2.1	2.4	2.1×2	2.4	瓦積	16.0力	2.2	13.4	2.2	1.19	
30	賞田廃寺	7世紀後半	5×4	2.4×3	2.4	2.3×2	2.7	瓦積カ	15.0	1.5	13.0	1.5	1.15	
31	杉崎廃寺	7世紀末	5×4	1.5, 1.8, 1.5	1.5	1.5×2	1.5	乱石積	11.3	1.8	9.0	1.5	1.26	二重基壇。基壇寸法は下成基壇のもの。
32	山田寺	7世紀中頃	3×2	2.0, 4.8, 2.0	2.9	2.9×2	2.9	壇正積	21.6	3.6	18.5	3.5	1.17	放射状柱配置。
33	夏見廃寺	7世紀末	3×2	1.4, 2.9, 1.4	1.5	1.8×2	1.5	玉石積	14.4	2.9	11.8	2.5	1.22	放射状柱配置。基壇は地山+盛土。
34	穴太廃寺(再建金堂)	7世紀後半	3×2	2.2, 4.7, 2.2	2.5	2.8×2	2.5	瓦積	22.1	4.0	18.7	4.0	1.18	放射状柱配置。基壇の出が大きい。
35	正家廃寺	8世紀中頃	3×3	1.5×3	1.5	1.5×2	1.5	盛土	11.1	1.8	9.1	1.6	1.22	放射状柱配置。
36	海竜王寺(西金堂)	8世紀前半	3×2	3.0×3	-	3.0×2	-	壇正積	12.2	1.6	9.3	1.7	1.31	現存遺構。切妻造。

*柱間・間数には裳階を含めていない。また柱間寸法・基壇総長は四捨五入し、10cm単位までとしている。そのため、柱間総長と基壇の出の合計が基壇総長と一致しないものもある。
アミカケは基壇の出が約4.5m(15尺)をこえるもの。

表1 古代日本の金堂の平面規模(海野2016に追記)

西大寺もやはり『西大寺流記資財帳』という財産目録の史料があって、西大寺に関しては「薬師金堂一字 長十一丈九尺。広五丈三尺」、「弥勒金堂一基 二重長十丈六尺。広六丈八尺」と二つの金堂、薬師金堂と弥勒金堂があり、この弥勒金堂はやはり二重と書かれているので弥勒金堂に関しては二重であることがわかります。ちなみに西大寺の資財帳には列記する建物の数え方を一字と一基と書いていて、数え方を変えているのですが、基を使うのが塔や楼門といった重層建物にのみ使っているだけで、一基と書かれる弥勒金堂は二重であろうということはここからも信頼が置けるのではないかと考えられています。

元興寺に関しては、修理をした際の文書が残っています。『元興寺堂舎損色検録帳』という平安時代の史料を見ると、そこに「七間二重瓦葺金堂一字」と桁行7間の二重の瓦葺きの金堂と書かれていますので、やはり元興寺に関しても、基本的には二重であったのであろうことが想像されるわけです。ちなみにこの文書では、宇と基の使い分けをしていませんので、一字と書いています。

このように見ると、平城京の中にある大きなお寺の金堂は、二重の屋根であることが見えてくるわけですね。これは建築の一つのステータスシンボルとして役割を果たしているということになります。次に各国にそれぞれ造られた国分寺を見ると、面白いことが見えてきます。地方では白鳳寺院などいわゆる7世紀段階から各地に寺院が存在し、礎石や瓦葺き建物があつたことはもちろんそうですが、そうはいっても地方寺院のなかでも国分寺の金堂は巨大なわけです。ただ、中央の寺院の金堂と比べてみると、実は国分寺の金堂は唐招提寺の金堂とすごく規模が近いということになります。これらの規模が基本的には桁行7間、梁行4間の四面廂で瓦葺きの金堂ということが見えてきますが、唐招提寺の金堂は単層で二重の屋根になっていないという形式ですので、各国の国分寺の金堂は唐招提寺の金堂のようなものがあつたのではないかとということが発掘遺構、あるいは建築的なところから見えてくるわけです。ただ、例外がいくつかあつて、少し規模が小さい若狭や薩摩、あるいはかなり柱間が大きい武蔵や相模といった例もあります。一概に画一的に国分寺の金堂が造られたということまでは言えないのですが、一つの傾向として国分寺の金堂は唐招提寺の金堂ほどの大きさというイメージはしやすいのではないかとと言えます。

これを見ていくと、奈良時代の金堂には何らかの格式があつたらしいことが見えてきます。興福寺の金堂の例を挙げましたが、第一級の金堂は唐招提寺の金堂に比べると、そのさらに外側に一周裳階を廻らした格好になっています。唐招提寺の金堂が7間×4間という規模であることに對して、興福寺の中金堂も7間×4間ですが、その外にさらに裳階を廻らせる構造になっているという特徴になってきます。

これらの金堂を比べてみると、第二級の金堂というところで、唐招提寺や国分寺は7間×4間で、裳階がつかない単層の金堂であつたということです。ちなみに東大寺は破格の規模、倍以上の大きさで、さらに桁行も9間あつた上に裳階もあるということで、大きな規模としているわけですね。

この別格の東大寺は置いておいて、第一級の金堂に関しても、平城宮大極殿の9間×4間という平城宮の一番大事な建物、天皇を象徴するような建物を超えない規模としていたと考えられます。さらに金堂を二重で立派に見せるというようなことをして、建築の外観や景観から考えていくと、奈良時代の金堂はすごく強い意味をもっている建物で、寺院の格式によって差別化されているということが見えてくるわけです。

では、興福寺の中金堂は発掘調査の成果から中金堂の構造がどのようにわかったのかということをお話ししていきたいと思います。写真4は奈良文化財研究所が発掘した時の写真ですが、柱配置を見ると中心に一番中心の身舎と言われる部分があり、四周に廂を廻らせて、その外側にさらに裳階を廻らすという三重の柱配置になっていることがわかります。ほとんどの礎石が奈良時代から変わってなく、興福寺は中金堂の焼亡と再建を繰り返しているのですが、礎石に関しては動かずに使ってきたと考えられています。



写真4 興福寺中金堂（平城第325次調査）

詳しく見ると、桁行が9間、36.6m、124尺で、梁行が6間、23mで78尺という規模です。基壇の柱配置が三重で、重層の建物が考えられるのですが、古代建築には法隆寺のように1階の上に積み木のように2階を積み上げていく方法と、裳階型という真ん中の部分をしっかり造って外側に見せかけで差しかけのように裳階をつける方法という二つの方法があります。興福寺中金堂に関しては後者の形式であろうことが柱配置からも見えてきます。

それはなぜかという点、一つは発掘遺構から中心の内側の柱と外側の柱とで、柱の形が違う点です。真ん中の柱は丸い柱を使っているのに対して、外側の柱は四角い柱を使っているという違いがあります。これは構造が違うという一つの根拠にもなり、建築では丸の柱が正式で、四角い柱が略式という違いがあります。このことから中心のところは建物でいうところの本体で、裳階という付属的な部分というような二つの違いがありそうということが見えてきます。そして、この中心のところにも屋根をかけなければいけないのですが、ここから基壇の先まで出る距離を測るとだいたい5m近くあり、かなり大きいわけですね。この基壇の端までの距離から考えると、手先の出る組物、それも三手先クラスというかなり大きな組物を使っているであろうことが発掘遺構から見えてくるわけです。

裳階がなくても屋根の外側まで裳階を出すという構造をとっていると考えると、手先の出るかなり大きな組物であろうと思います。それに対して、この隅から基壇の端までの距離が小さい場合は裳階から見るとだいたい2.1m、半分以下の大きさです。これを見ると、手先が出ないとは言えないのですが、比較的手先の出ない組物、三手先のようにすごく外に手先を出すという構造ではなく、小さくて済むような構造であろうというのがここから見えてくるわけです。真ん中の部分は丸い柱を使って立派な組物を使うのに対して、裳階は角の柱を使って手先も小さい組物を使うというところで、見た目でも違いを出しているというようなことが見えてきます。

興福寺の場合、中世の絵図ですが屋根が寄棟造で描かれているということで、屋根の形は寄棟造であろうことが想像されます。これだけではなく、興福寺の場合には「興福寺建築諸図」という図面が残っています。これは近世の享保2年、1717年以前に焼けた中金堂よりも前に描かれた図面であろうと考えられています。描かれた中金堂が建てられたのは応永年間で、中世の建築を実測したものであると考えられます。このような図面が残る、この図面の描写の中金堂自体は中世の

建物ではあるのですが、古代風の図として一つの参考になると思います。これを見ると、真ん中の中心部の寄棟造の屋根があり、その下に裳階がついている。四手先で描かれているのですが、組物も描かれています。四手先は中世以降には用いられることもありますが、現存建築を見る限り、古代には少し考えにくいということもあります。そのため、古代には四手先はないので、まあ三手先ぐらいかなというのが復元する時に考えられる一つの根拠になります。



写真5 興福寺中金堂（事務局撮影）

実際にでき上がった平成の興福寺の中金堂は、寄棟造に裳階がついたお堂ができ上がっています（写真5）。本体は三手先の組物で、裳階に関しては出組という一手だけ出る小さい組物で、軒の出としては中心部の方が大きいという形で復元されています。

4. 奈良時代金堂のなかの興道寺廃寺金堂

これを踏まえた上で、では興道寺廃寺の金堂がどのような構造だったのかということをお話ししていきたいと思います。まず、興道寺廃寺の一番の大きな特徴は二つの基壇が出ているということがやはり重要かと思えます。もちろん創建期の基壇も大事ですが、それだけではなく再建された時の基壇も出ていることが最大の特徴です。ただ、残念ながら同じ場所で何回も造られると、よくわかるのは最後の時期というのが発掘の常ですので、再建期の基壇の方が比較的情報が多いということになってきます。

創建期の基壇に関しては、まず地山の削り出しの基壇ということで、地山という元々の地面を削り出して、新たに上に積み上げるのではなく基壇を造っていくという形をとっています。その上に2、3cm程度の版築をして丁寧な施工をしていますが、残念ながら基壇外装はよくわからない。基壇規模に関しては東西方向が16.8m、南北方向13.8mと、基壇の大きさに関してはある程度わかっていますが、実際の柱配置についてはなかなか想定しにくいことになっています。

それに対して、再建期の基壇に関しては、もう少し情報がわかっています。版築の積み方は若干粗くなりますが、例えば基壇外装は乱石積みという積み方で、花崗岩を主体に自然石を積み上げていることがわかっています。一番下の基底石は60cm×40cm程度の、かなり大き目の石を置き、2段目にはそれよりも一回り小さい自然石を積むということをしています。さらに基壇の南側は削られてしまっていますが、北側は発掘調査の結果、中央間に階段があることがわかりました。基壇規模としては18m×14.1mという規模になっていますが、この北側の中央のところに幅が2.4m、階段の幅が2.4mで、出が1.6m近い階段が見えてきたということがわかっています。発掘調査によれば、この階段部分には基壇外装がないことから、基壇を全て造ってから階段を造ったということではなく、基壇と階段は一体に造られたことが報告されています。

これらの情報が金堂の建物を考える前提になってくるわけですね。桁行5間、12mで、梁行が4間、8尺等間の9.6mの柱配置が想定されています。この平面の復元では根拠として階段の筋と柱の筋が揃うであろうという古代建築の特徴を使っているわけですね。これは復元で比較的良好に使われる方法です。一番わかりやすいのは階段を上った先に柱があり、扉がないと中に入れないうことを想像していただくとうわかりやすい。だから柱筋と階段の筋がある程度一致するということがあるわけです。これは重要な復元の方法の一つではあるのですが、階段の幅といってもその外側に柱の筋の中心があるのか、内側にあるのか、つまり階段の外側が柱の外にあるのか、

内にあるのかで1尺、30cmぐらいは変わってくるわけです。このことから考えていくと、まだいくつか検討の余地はないのかということ、これからご紹介したいと思います。

図10、発掘調査報告書に収録された興道寺廢寺の再建期金堂の復元案ですが、金堂の規模は桁行5間、梁行4間、おそらくこの規模でなければお堂として成り立たないということはあるのですが、建築としてはやはり柱間が8尺というのが8世紀の金堂としては少し小さいという印象を受けます。なぜ小さいのかと言うと、一つは中に納める仏様、仏像との関係がやはり一つの特徴になってくる。また礎石建物になると、地方でも基本的には10尺が一つの規格として入ってくるということがあるので、そのような関係性から見ても柱間が8尺ではやや小さいという状況があります。

それに対して、軒の出をこれまでの柱配置で想定すると2.1~2.4mということで、比較的柱間に近いぐらいのかなり大きなものになってくるということになるのです。組物の手先がなくとも、この2.4mぐらいの大きさであれば、頑張れば飛椽垂木という、垂木を二重にするという方法を使えば、出せなくはない距離ではありますが、一方で柱間から比較するとやや大きいという印象があるわけです。

これらから疑問点として考えられることを大きく三つ挙げました。一つ目は中央間の小ささ、二つ目が柱間と軒の出のアンバランス、そして三つ目は基壇の隅のところで梁行方向と桁行方向で基壇の出が結構異なってくるという疑問が出てきます。入母屋造や寄棟造といった屋根では斜め45度の方向に屋根が延びてくるので、この基壇の隅の部分は比較的正方形に近くなるという特徴があります。それが少しずれてくるというところに疑問があるわけです。

一つ目の疑問、中央間に関しては礎石の金堂では8世紀以降、10尺以上のものが多いということもあり、これまでの柱間の想定では階段の幅とちょうど柱の中軸とで柱位置が合ってくるということになっているのですが、柱の内側と階段の幅の位置が合ってくると考えると、この中央間の柱の位置は少し外側にずれる可能性があるわけです。

二つ目の疑問、柱間と軒の出がほぼ同寸法になっている、建物全体の規模からすればやや軒の出が大きいという印象を受けますが、賞田廢寺などを見ても基壇の出は柱間より小さくなる傾向があるので、柱間と同じぐらいの軒の出はかなり大きいのではないかと思います。

三つ目の疑問、基壇の隅部分を見た時に桁行方向と梁行方向の出の大きさが違ってきます。柱配置そのものがわかっていないので、想定になりますが、四面廂で寄棟造、入母屋造の屋根と考えると、基壇の隅、斜め45度の方向に隅木という部材が入ってくるのですが、斜め45度のところを延長した時に、この隅のところは正方形にならない、桁行と梁行が一致してこないという問題が出てきます。

このことを踏まえて、図11のように柱間を復元すると30cmずつ柱の位置を外にずらして柱の内揃えという形、階段の外揃えに柱位置がくるように30cm、1尺ずつ東西にずらして行って、身舎中心の部分を桁行3.0m×3間、梁行は2.7m×2間とする。そして、廂は桁行の中央三間だけ3.0mと少し大きくし、それ以外は9尺、2.7mで四面を回

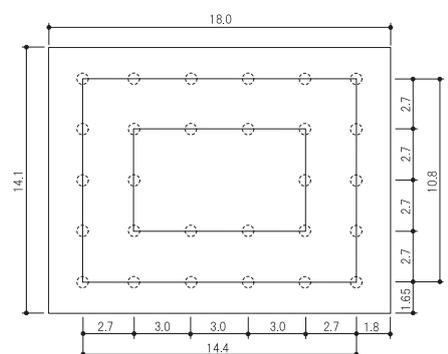


図9 興道寺廢寺金堂の平面模式図
(縮尺1/400)
(海野聡氏の講演内容をもとに
事務局にて作成)

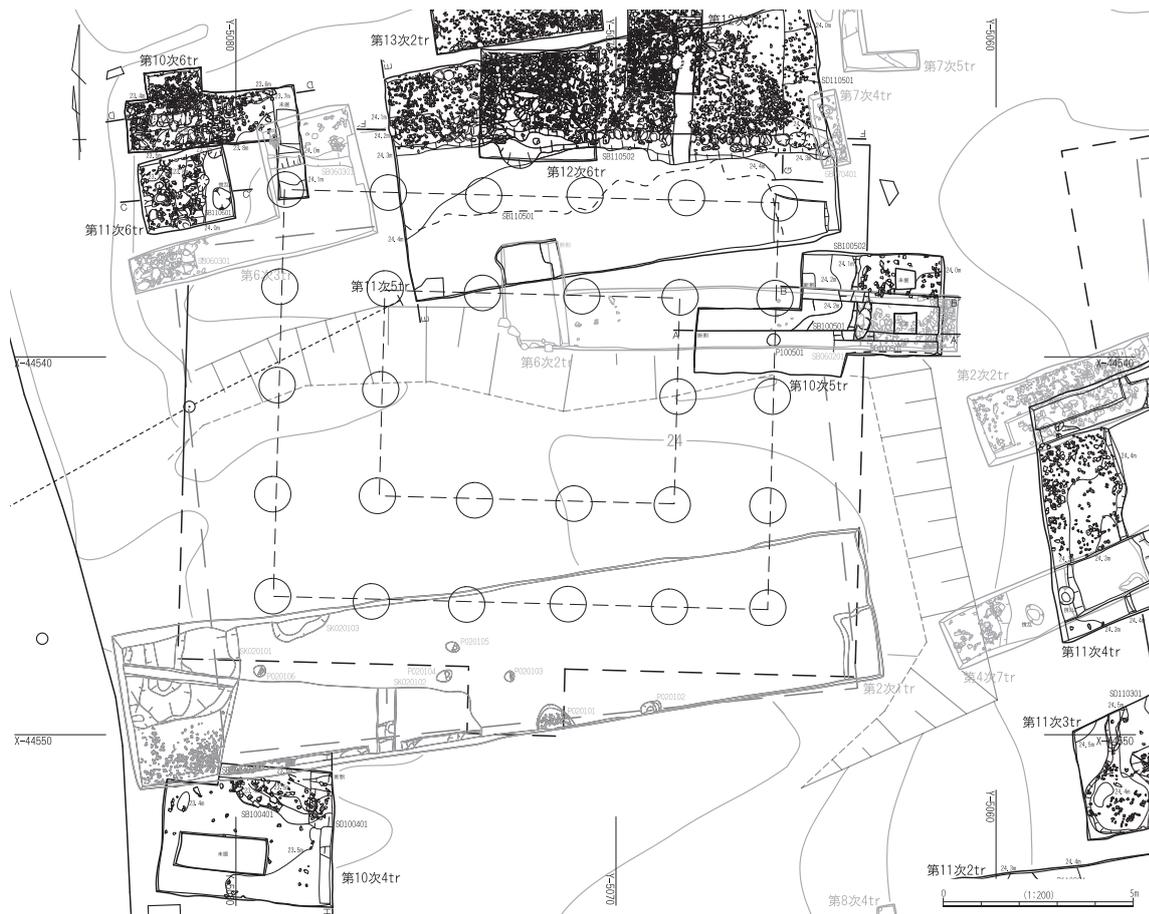


图 10 興道寺廢寺金堂平面復元図・美浜町教育委員会復元案（縮尺 1/200）



图 11 興道寺廢寺金堂平面復元図・海野聡氏復元案（縮尺 1/200）

すと、基壇の出としてほしい桁行、梁行が1.8mと1.65mと少し軒の出が小さくなります。このくらいの大きさであれば、軒の出が手先の出ない組物で構成できるのではないかと思うわけです。

また、これは仏堂の遺構なので可能性はあまり高くないとは思いますが、柱配置がわからない以上、二面廂、あるいは切妻造という可能性も否定できないということもあります。結局のところやはり柱配置が1か所もわかっていないということが、興道寺廃寺の金堂の復元を困難にしているということですね。基礎の部分でも柱がわかって基壇の大きさがわかるとなれば、建物がある程度は考えられます。ですが、残念ながら興道寺廃寺の発掘の場合、その柱の位置が1か所もわかっていないので、基壇の大きさしかわからないというところが柱配置を考えるうえでの大きなネックになっています。

もちろん今後、発掘調査でわかるかどうかということもあるのですが、柱位置が1か所でもわかるとそれをもとに検証できます。柱配置一つとっても、いろいろなことが考えられるので、そこから導かれる建物の形、外観にも影響してくるわけですね。建物がどのように見えるのかということは、伽藍がどのように見えるのかということになってきますので、この地域全体で興道寺廃寺が外からどのように見えていたのか、道からはどのように見えたのかという問題につながります。寺院の例ではありませんが、山陽道の駅家では蕃客、外国からの使節が来るのでよく見えるようにしっかり整備しておきなさいと言われたように、海からの視点も大きく関わってきます。このようなことも、興道寺廃寺の金堂を取り上げただけでも、今後、景観を考えていく上で重要な一つの課題が見えてくるのではないかと思います。

他のお話しも用意していたのですが、このお話しをすると少し長くなりそうなので、このあたりでお話しを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

伽藍配置から見た興道寺廃寺

東京医療保健大学 医療保健学部 教授

三舟隆之

東京医療保健大学の三舟と申します。私は昨年この歴史フォーラムでお話しをさせていただきましたが、その時は興道寺廃寺を造営した氏族の話をしました。興道寺廃寺はだいたい造営した氏族がわかり、周辺に古墳があり、寺院がありという中で、寺院の創建期と再建期がわかり、地方寺院の姿がよくわかるということで、昨年、私もこの席でこれは重要な遺跡であるというお話しをしたかと思いません。その後、国の史跡になりました。これは地方の寺院では本当に有意義なことですので、今日は伽藍配置から興道寺廃寺を見ていきたいと思えます。



1. 古代寺院の伽藍配置

日本の古代寺院は、基本的に朝鮮半島から造営技術が伝わり寺院が造られます。例えば奈良の法隆寺などに行くと、塔や金堂、講堂があります。この三つの建物があるところを伽藍地と言い、寺院では一番重要な場所となります。それ以外にも僧坊という僧侶が寝起きする建物、食堂という食事をする建物、そして経典を納める経蔵や、鐘を鳴らす鐘楼などいろいろな建物があります。このような建物の配置を伽藍配置と言いますが、今日は塔と金堂の並び方について少し見たいと思えます。

(1) 韓国の古代寺院の伽藍配置

7世紀代の朝鮮半島には高句麗・新羅・百済という国があり、三国時代というように三つの国がありました。今の北朝鮮にあたる高句麗の清岩里廃寺を見ると、塔が真ん中にあり、東金堂・西金堂・中金堂の三金堂があり、これが飛鳥寺の伽藍配置に影響を及ぼしたのではないかとされています。

まず、今の韓国にあたる百済と新羅の古代寺院の伽藍配置について触れたいと思えます。近年、韓国では王興寺跡や益山弥勒寺跡などの古代寺院の発掘調査が相次いでいます。韓国の古代寺院では、百済の定林寺跡・軍守里廃寺・陵山里廃寺・王興寺跡などの発掘調査から伽藍配置の系譜を辿ることができますが、百済では王権が造寺技術を掌握し、定型化した瓦当の文様と伽藍配置でもって寺院の造営を行っていたことがわかりつつあります。新羅でも、新羅が朝鮮半島を統一する前後ぐらいから独自の双塔式の伽藍配置を採用し、その系譜が継続されていることがわかりつつあります。その結果、韓国では出土瓦の系譜の研究だけでなく、寺院の伽藍配置の研究も明らかになり、古代寺院の造寺計画や造寺技術が解明されつつあります。

その中でも、百済の王興寺跡と陵山里寺跡の伽藍配置はほぼ同じで、さらに扶余周辺の寺院の多くが百済式の一塔一金堂式伽藍配置を採用しています。日本ではいわゆる四天王寺式伽藍配置

となりますが、これらの寺院の造営技術には共通性があり、発願者と造営組織が同じである可能性が高いようです。定林寺跡や王興寺跡・軍守里廃寺、あるいは現在整備されている陵山里寺跡なども伽藍配置が同じで定形化しているの、造寺に関する技術者集団が王権のもとで掌握されていたと考えられます。百済では、特に寺院造営に関しては隔絶した権力が存在したことが推測されますので、王権・王族とそれを支える中央貴族層の一部が寺院造営の技術を掌握していたと思われる。

そして、日本に大きな影響を与えたのが百済のこれらの寺院で、伽藍配置の特徴として塔・金堂・講堂が一直線に並ぶことが大きな特徴です。大阪府の四天王寺は現在は昭和の建物になっていますが、塔・金堂・講堂の位置は創建当時のままで、百済の伽藍配置の影響を受けています。

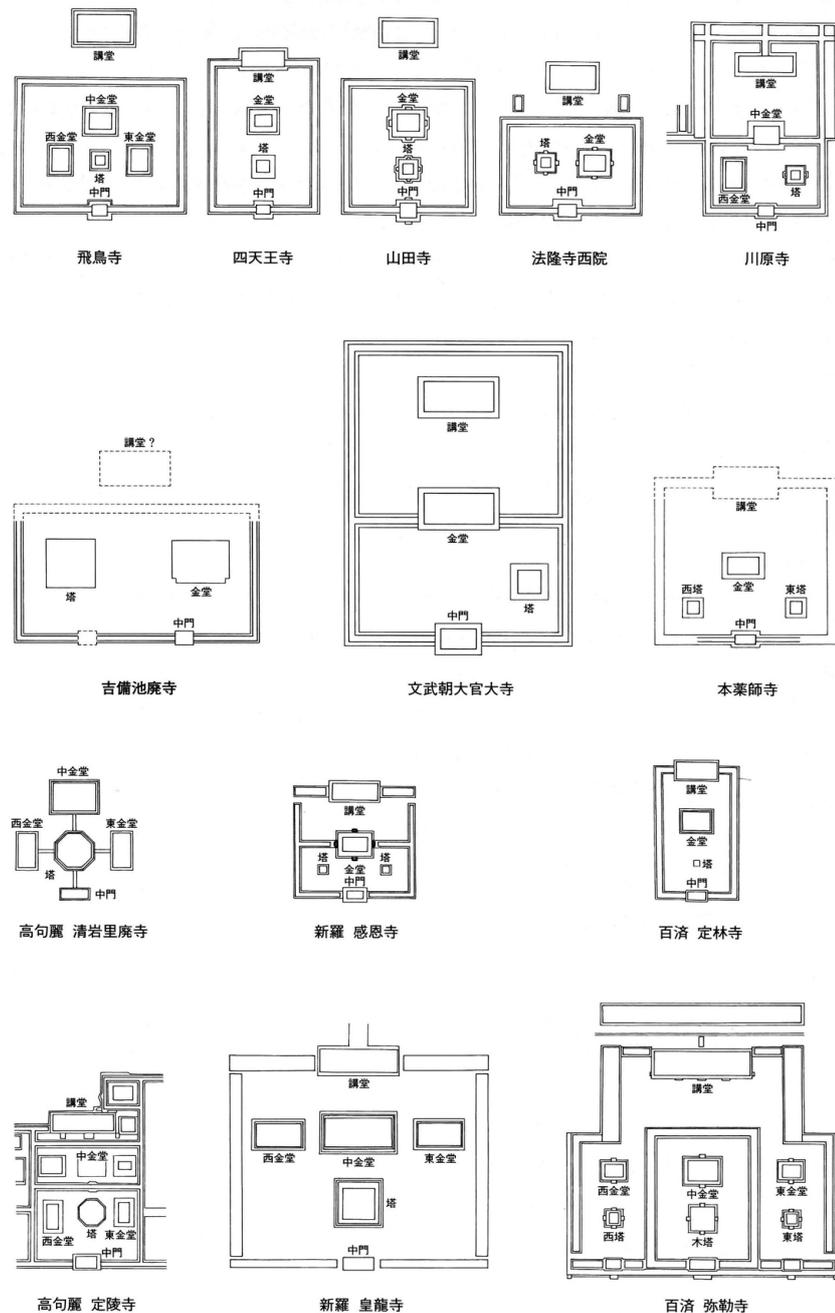


図1 日本および朝鮮半島の伽藍配置の比較 (縮尺 1/5,000)

扶余の定林寺跡は四天王寺式の原形と思われる伽藍配置で、観光で行くとだいたい慶州の仏国寺などとともに観光コースに入っています。定林寺跡は立派な石層塔があり、写真1のシートがかかっているところが金堂、奥の建物が石仏が入っている講堂と、南から塔・金堂・講堂が並んでいます。



写真1 百濟・定林寺跡（著者撮影）

益山弥勒寺跡では、2014年ぐらいに西塔が発掘調査され、塔の心礎に仏舎利があり、舎利埋納物として壺や文字が書かれた金属製の板が入っていました。写真1、2は私が撮った写真です。私は植民地時代にはまだ生まれていませんが、実は植民地時代に日本がコンクリートで固めて保存していましたが、後に修復がされています。弥勒寺跡には中金堂の前に木造塔があり、考え方によっては四天王寺式伽藍配置が三つ並んだ形になっています。余談ですが、私はどうしても全体の伽藍配置が見たいと思い、見晴らしのよいところから見下ろせばよいということに気付いたので、夏に汗だくで2時間かけて背後の山に登りました。日本語がわかる女子高校生も私達と登ると言うので、これは負けられないと思って登りましたが、やはり若い人にはかなわないですね。山に登って面白かったのは、頂上付近に瓦が落ちていました。やはり梶原さんを連れていくしかないと思ったわけですが、中腹に山寺があり、やはり景観を考えるとこの山が信仰の対象になっているという気がします。



写真2 新羅・益山弥勒寺跡（著者撮影）

また、新羅でもその傾向は同じで、皇龍寺・芬皇寺はともに一塔三金堂式で、その後、四天王寺や感恩寺、仏国寺などの二塔一金堂式が続きます。朝鮮半島では王権による寺院の伽藍配置が形式化されて、その造営技術は王権によって掌握されているので、それぞれの寺院の伽藍配置には共通性が見出されます。

新羅の慶州は観光地で、奈良県の飛鳥のようにレンタサイクルもあって回りやすいところですが、皇龍寺では木製九重塔があり、日本では百済大寺に比定される吉備池廃寺が九重塔なので、吉備池廃寺に影響を与えたのではないかとされています。そして、皇龍寺の場合、一塔に対して東西に東金堂・中金堂・西金堂が並ぶ伽藍配置となっています。

（2）日本の古代寺院の伽藍配置

さて、基本的に日本の伽藍配置の図は、山川出版社の日本史の教科書にも出てきます。私は最初は女子高の教員でしたので、この図を教えたりもしたのですが、まず日本で一番古い寺院は飛鳥寺です。高句麗の清岩里廃寺と同様、塔があり、東西に金堂があり、中金堂がありと金堂が三つもあったのです。なぜ三つも金堂があるのか、また不思議です。この内、東と西の金堂を廃止すれば四天王寺になるというような教え方をしたような記憶もあります。山田寺の伽藍配置も含めて、塔・金堂・講堂が一直線上に配置される四天王寺式伽藍配置は、やはり百済の伽藍配置をきちんと表しています。

日本での古代寺院の伽藍配置は、通説では高句麗の影響を受けた飛鳥寺の一塔三金堂式に始まり、その後、7世紀前半には四天王寺や若草伽藍などの四天王寺式が続き、7世紀後半には塔・金堂が横に並列するような法隆寺式と法起寺式伽藍配置が地方に広がり、7世紀末には金堂が寺

院の中心となり、塔が中心を外れて左右に位置する大官大寺式や、薬師寺式のような双塔式伽藍配置が見られるようになり、8世紀には東大寺式が展開したと理解されています。

全国の古代寺院で最も多い伽藍配置は法起寺式で、法隆寺式、四天王寺式、双塔式伽藍配置の順となります。日本に大きな影響を与えた百済の伽藍配置は、定林寺跡に見るようにはほぼ四天王寺式ですが、百済の寺院は全て扶余、益山といった王宮の近くに四天王寺式の伽藍配置の寺院が造られます。一方、日本には地方寺院が多くあり、東北から九州まで全国各地、伽藍配置のバリエーションも多様で、百済や新羅といった朝鮮半島と大きく異なっていますが、これは王権の存在形態と関連している可能性もあります。

このように、日本の地方寺院では伽藍配置が多様ですが、そもそも地方で寺院が造られた背景には、王権による造寺奨励策があって、王権と地方豪族との政治的な関係から造寺活動が行われたと考えられています。ただ、やはり在地側での仏教の受容も重要であったと思われます。地方寺院の伽藍配置では、金堂のみが存在するという単堂式が多く、塔が存在する場合は法隆寺式や法起寺式の伽藍配置が見られますが、塔と金堂のみで講堂がない場合もよくあります。また、二つの塔がある双塔式の伽藍配置も、金堂の横に塔が並列するものもあって、規格性に欠けています。地方寺院の伽藍配置は、必ずしも畿内の寺院と画一性があるとは限らないようです。

飛鳥寺が日本で最古の寺院で、その次に四天王寺、山田寺と造られるので、これまで四天王寺式の伽藍配置は6世紀末から7世紀前半の伽藍配置とされてきました。ただ、地方寺院の中には、三河の北野廃寺、伊賀の三田廃寺、伊勢の智積廃寺、紀伊の北山廃寺、播磨の多可寺遺跡、下太田廃寺、備中の栢寺廃寺、伯耆の石塚廃寺、伊予の法安寺跡、豊前の椿市廃寺といったように、地方に行けば7世紀後半でも四天王寺式の伽藍配置となる寺院もみられます。これらの寺院には川原寺式軒瓦が採用されているので、百済系の素弁軒丸瓦を中心とする畿内の四天王寺式の寺院とは異なる様相を示しています。このように、時代がたつにつれて塔が寺院の中心から外へ移っていくという石田茂作さんの論議は地方では少し違うようで、従来から唱えられていたような四天王寺式から法隆寺式、法起寺式の伽藍配置への変遷については再検討する余地があるかと思えます。これらの四天王寺式の伽藍配置は、それらの寺院だけに採用されて周辺の地域には広がらず、ほとんど影響を与えていません。

それに対して、地方寺院の一般的な伽藍配置としてよくあるのが、法隆寺式と法起寺式の伽藍配置で、全国に多く分布しています。法隆寺式は塔が西、金堂が東にある伽藍の形ですが、塔と金堂の位置が入れ替わるのが法起寺式伽藍配置で、興道寺廃寺も法起寺式の伽藍配置をとっています。ただ、塔と金堂の位置関係の違いが何に基づくものなのか、よくわかりません。

川原寺は塔が東にあり、西金堂と中金堂があり、670年ぐらいに造られた寺院ですが、斉明天皇と関係があり、言わば大寺かと思えます。ところが、1990年代に奈良文化財研究所が発掘調査した吉備池廃寺は、640年代に舒明天皇、天皇家が初めて造った百済大寺であろうと言われていますが、この塔はかなり大きく、九重塔です。今まで塔と金堂が並ぶ配置は7世紀以降の法隆寺式伽藍配置と言われてきましたが、これよりも古い伽藍配置となります。私はこのことをもう少し重視するべきではないかと指摘しているのですが、出土瓦から見れば、いわゆる山田寺式と吉備池廃寺の瓦は同じ型式で、吉備池廃寺の瓦の方が先行するので、京都府立大学の菱田哲郎さんも指摘されているように、山田寺式より吉備池廃寺式という名称にした方がよいのではないかと考えています。この伽藍配置も「吉備池廃寺式伽藍配置」と呼ぶべきではないかと言っているのですが、あまり議論にならないという寂しい状況にあります。

ただ、法隆寺式伽藍配置は百済大寺跡とされている吉備池廃寺が初現ですので、王権の伽藍配置と意識された可能性もあるかと思えます。また、法隆寺式伽藍配置と法起寺式伽藍配置では、畿内では葛城周辺の寺院に法隆寺式伽藍配置が集中している例もあるのですが、地方では法起寺式伽藍配置の方が多傾向にあります。今後、軒丸瓦の型式分類とも関係づけて、分布の傾向を検討する必要があるのかと思えます。

(3) 地方の古代寺院の伽藍配置

次に地方寺院について、お話ししたいと思います。伽藍配置がわかる古代寺院が少ないのですが、地方寺院でこれまでに分かっている伽藍配置には、いろいろな問題があります。まず、塔・金堂・講堂などが必ずしも備わっていないので、金堂のみ(単堂式)、または塔と金堂のみという寺院も多い。これには地形的な制約がある場合もありますが、多くは講堂を必要としていない傾向があつて、経典研究などの教義が必ずしも地方では重視されていないことを示している可能性があります。このことから、地方寺院の伽藍配置から仏教の教義を読みとるのは難しいです。

発掘調査の成果からは、金堂が最初に造営され、その後に塔や講堂などの順に造営されていることが多い傾向があります。法隆寺式や法起寺式伽藍配置では寺院の中軸線上に中門が存在するはずですが、中には金堂の正面にある場合もあります。このような例は、先に金堂が造られた例で、時間差をもって伽藍が整備されています。このような場合、どの時点での伽藍配置を考えていくのかという課題があります。

科研費をいただいたので、全国の伽藍配置について、東北から九州まで、どの地方にどのような伽藍配置が多いのかということ調べました(表1)。当たり前ですが、大和や摂津、和泉など、いわゆる畿内には古代寺院が圧倒的に多いのですが、特に多い伽藍配置が四天王寺式です。全国的にはやはり法起寺式が多いですね。

では、日本海側の山陰道の伽藍配置はどうか(表1、図2・3)。7世紀後半から8世紀前半の古代寺院では、まず因幡では岩井廃寺・岡益廃寺・土師百井廃寺が法起寺式伽藍配置で、柘本廃寺が変則式双塔式伽藍配置、菖蒲廃寺・寺内廃寺は塔心礎がありますが、伽藍配置は不明です。また、伯耆では石塚廃寺が四天王寺式、大原廃寺・大御堂廃寺・大寺廃寺が法起寺式、斎尾廃寺が法隆寺式、上淀廃寺が変則式双塔式伽藍配置です。出土した畿内系の軒丸瓦は、山田寺式が土師百井廃寺、川原寺式が因幡では岡益廃寺・玉鉾廃寺、伯耆では野方・弥陀ヶ平廃寺・久見古瓦出土地・大原廃寺・大御堂廃寺で、紀寺式が斎尾廃寺となっています。出雲では来美廃寺が変則式双塔式伽藍配置で、その他は教皇寺跡・神門寺境内廃寺・天寺平廃寺に塔が存在する可能性があります。石見では下府廃寺が法起寺式伽藍配置です。

ただ、このように山陰道では鳥取県琴浦町の斎尾廃寺、鳥取県倉吉市の大御堂廃寺・大原廃寺と法起寺式の伽藍が多いのも事実で、東海道でもやはり法起寺式が多く、関東になると単堂式といった金堂しかない寺院が山ほどあるわけです。塔も金堂も講堂もあるという寺院は、なかなか珍しいです。

法起寺式伽藍配置が関東にもあるのは、なぜでしょうか。調べてもよくわからない。法隆寺式でよいのではないか。しかし、やはり法起寺式伽藍配置が地方に多い。例えば古代寺院の場合、国家仏教との関係で考えられることが多いのですが、法起寺は畿内でも大きなお寺でもない。聖徳太子が建てた四天王寺や、大宰府の観世音寺、川原寺は大寺ですので、何らかの理由がつけら

れそうですが、法起寺式伽藍配置が多いという理由は考えづらい。

地方の代表的な法起寺式伽藍配置の寺院をみてみます。山梨県の寺本廃寺は、石田茂作さんによって塔心礎が発見されました(写真3)。塔跡・金堂跡・中門跡があり、講堂もあると言われているのですが、実は発掘調査ではよくわかっていません。それでやはり再調査の話もあったのですが、話が立ち消えになっている状況です。国の史跡指定を目指しているようですが、そのような自治体もあることを、皆さんもおわかりになって、興道寺廃寺が国史跡になる喜びを感じていただきたいと思います。実は私が学生の時に発掘調査に参加した最初の現場が寺本廃寺で、当時奈良文化財研究所の森郁夫さんという、瓦を研究されていた先生が指導にあたられていたのですが、宿が一緒になり、瓦の話をいろいろ聞かせてもらったので、卒論は瓦で書こうと思い、その

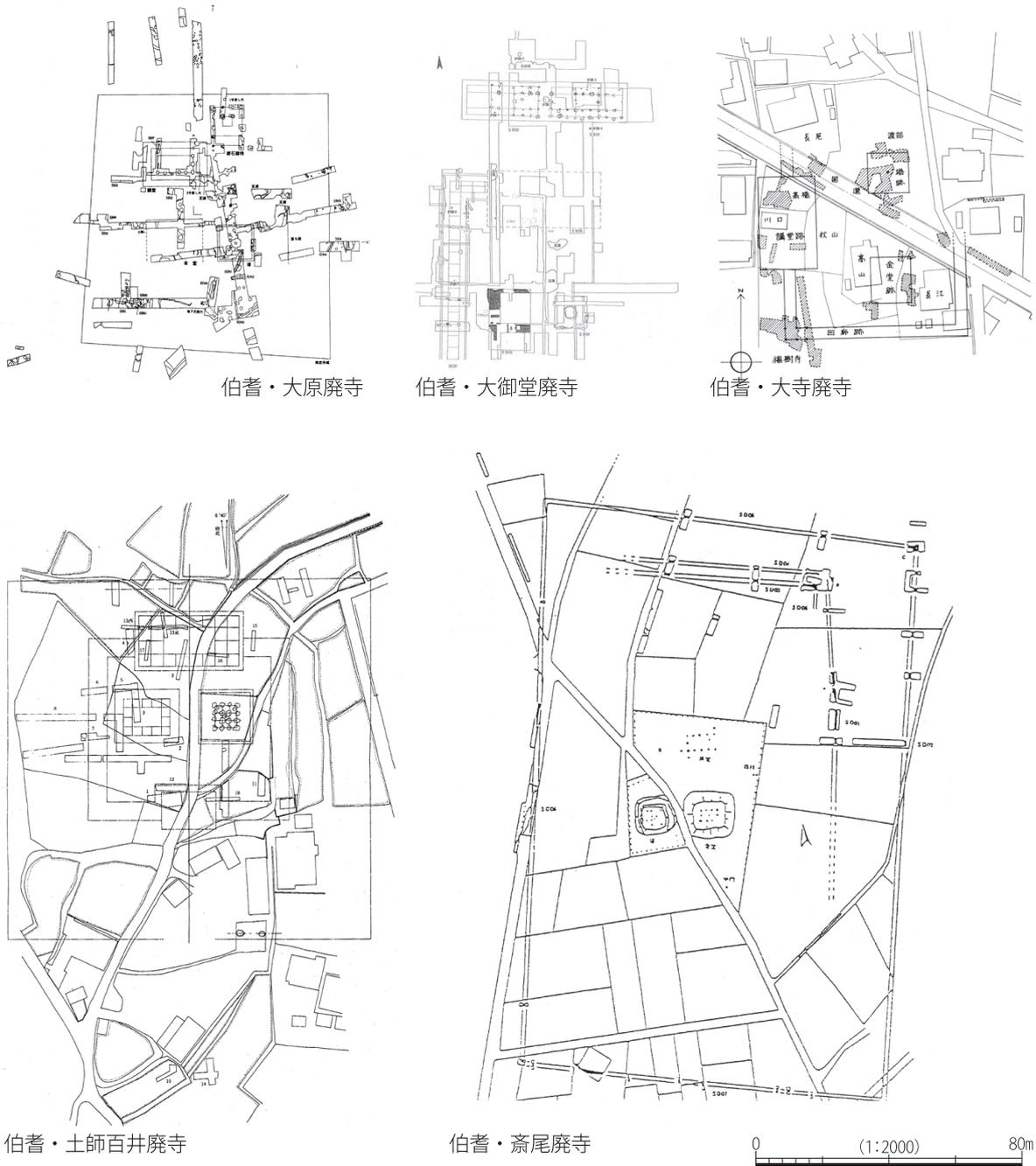
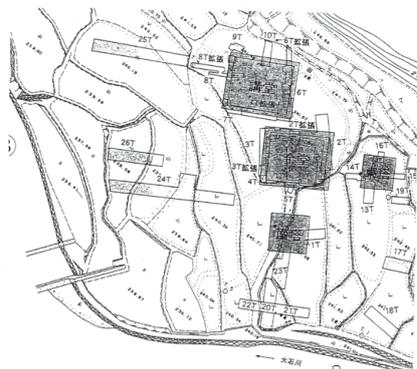
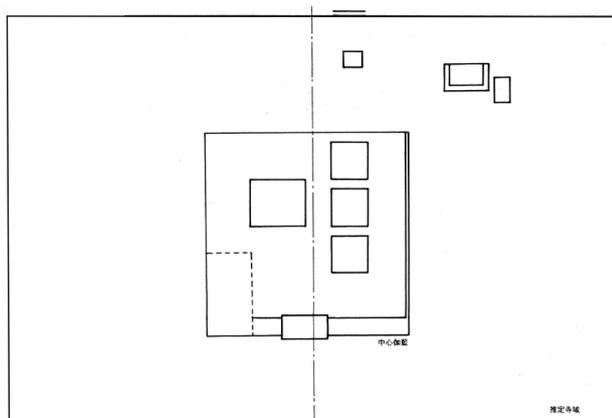


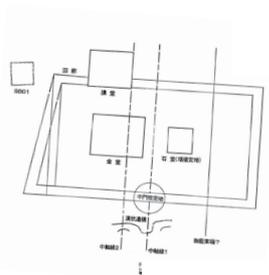
図2 山陰地方の伽藍配置(1) (縮尺 1/2,000)



伯耆・栃本廃寺



伯耆・上淀廃寺



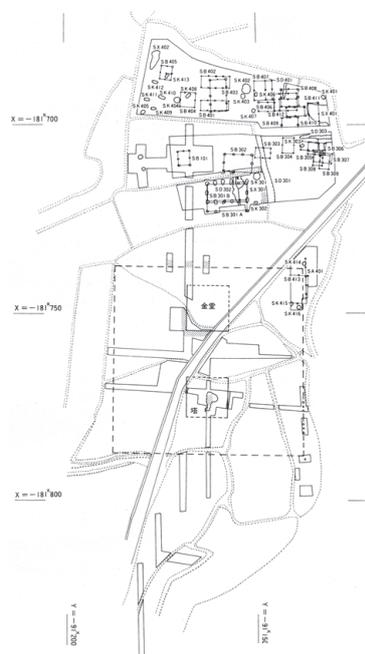
伯耆・岡益廃寺



石見・下府廃寺



出雲・来美廃寺



長門・長門深川廃寺

0 (1:2000) 80m

図3 山陰地方の伽藍配置(2) (縮尺 1/2,000)



写真3 寺本廃寺塔心礎 (著者撮影)



写真4 上淀廃寺跡 (著者撮影)



写真5 来美廃寺 (著者撮影)

国名	四天王寺式	観世音寺式	法隆寺式	法起寺式	双塔式	単堂式	その他
大和	10	1	8	3	4		3
山背			1	3			
摂津	1		3				
河内	2			1	7		1
和泉			2	2			
近江		3	1	1		1	2
美濃			1	2			1
飛騨				1			
信濃							
上野				1			1
下野			1			1	1
常陸			1	1	1	3	
陸奥		3	1			2	
伊賀	1			1			
伊勢	1		1	2			
尾張				2			
参河	1					1	1
遠江							
駿河				2			
伊豆					1		
相模							
武蔵				2		3	
上総			1				
下総				3		2	
美作	1			1			
備前	1	1	1				
備中	4			4			
備後	1			4			
安芸				1			
周防							
長門	1						
若狭				1			
讃岐	2		3	2			
伊予	1		2				
阿波				2			
土佐			1				
丹波	1		1		1		
因幡				3	1		
伯耆	1		1	3	1		
出雲				1		1	
石見				1			
筑前		1		2			
筑後						1	
豊前	1		3	2	1	1	
肥前						3	
肥後				3			
計	30	9	33	57	17	19	10

表1 古代寺院の伽藍配置集計表

まま今日に至ってしまいました。

千葉県の成田空港が近くにある下総竜角寺跡は、近くに「風土記の丘」があり、龍角寺には白鳳仏が残っていますので、公開日に行かれ実際に見られるとよいと思います。国史跡になった美濃弥勒寺跡は岐阜県関市にある寺院で、弥勒寺東遺跡という郡衙遺跡もあり、付近には古墳もあります。このように、地方にはいろいろな寺院があります。

地方に行けば行くほど伽藍配置は崩れていくのですが、鳥取県米子市の上淀廃寺跡も国の史跡になりました。金堂は瓦積み基壇で、三つ目の塔は未完成ですが、塔の基壇が3基もあります(写真4)。有名なのは、金堂に神将像などの壁画があったことで、昨日、美浜町歴史文化館の企画展を見て、私がびっくりしたのは、滋賀県、近江の日置前廃寺からも壁画が出ているのですね。我々は地方の寺院に行くと、何かしょぼいのではないかというイメージもあると思いますが、やはり地方を馬鹿にするなど言いたいです。上淀廃寺は法隆寺の壁画と遜色ない壁画で、このような文化があった。ただ、伽藍配置としてなぜ塔が三つもあるのかということで、上淀廃寺は海からは直接見えないので、塔を三つ造っても全く目立たないという立地です。

島根県松江市の来美廃寺は、金堂があり、塔が二つあります(写真5)。面白いのは須弥壇を調査した結果、金堂に本尊の仏像がおられ、この横に脇侍が並ぶ様子がわかっています。ただ、変な場所に講堂があるので、伽藍配置においては地形に左右されたのか、伽藍配置は崩れています。このように塔が複数あるような双塔式伽藍配置がいくつかの寺院にあり、中央、畿内の伽藍配置とは言えないような伽藍配置になっています。

2. 伽藍配置から見た地方寺院の宗教的機能

このように日本の古代寺院の伽藍配置にはいろいろな型式があり、時期によって変遷がありますが、まず堂塔自体がどのような宗教的な機能をもっているのか考えたいと思います。

塔・金堂・講堂にはそれぞれ意味があります。まず、塔は高層建物で釈迦の遺骨である仏舎利を収める場所ですが、実際には舎利として水晶玉などを収めています。金堂は本尊像を安置する仏殿で、宗教的に実際に祈る、法要を行う寺院の中心的な建物です。基本的に古代の寺院は金堂から造り始めるのが多いです。講堂は仏法を講じ、法会を行う、僧侶の学問研鑽の場です。金堂の後方に配置されて、僧房や経蔵が近くに配置されます。また僧侶が集会するため、金堂よりやや広い平面空間をもつことが多いです。それ以外の建物として、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』や『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には塔・金堂・講堂などの中心伽藍の他に、鐘楼・経蔵・回廊・中門・南門・食堂・僧房など、僧侶の活動や日常生活に伴う建物群、あるいは大衆院屋や政所院・倉など、寺院経営に関わる建物群が見られます。

『令集解』僧尼令修繕条古記には「仏殿。謂塔・金堂・法堂之類、是也。食堂・歩廊等類者非也」とあります。仏殿として塔と金堂・法堂があり、食堂などは違うと解釈され、8世紀の段階には塔・金堂・法堂(講堂)が伽藍地としての宗教的な機能をもっています。興道寺廃寺にも雑舎群などがあるのですが、寺院を運営するための施設は仏地=仏の場所ではないとされています。

では実際、地方寺院ではどのような堂宇が存在したのか、その実態を示す史料を見たいと思います。

まず、【史料1】の『上野国交替実録帳』は長元3年(1030)に上野国司の交替の際に作成された文章の草案で、どのような建物が残っているのかということが書かれています。ここには、ま

ず「金光明寺」(国分寺)に金堂・僧房・築垣・東西南大門・大衆院などがあり、「定額寺」の項には「法林寺」に金堂・講堂・経蔵・倉・東北門などがあつたらしく、「弘輪寺」では多宝塔・法蔵・房舎・大衆院・倉・大門・築垣などがあり、「慈広寺」では大堂・講堂・鐘堂・僧房・大衆院などがあります。

定額寺である法林寺には、金堂壺宇が大風、台風で倒れて無実、すなわち今はない、もう残っていないと書かれています。11世紀初めの段階の地方の寺院には当初の建物があまり残っていないことがわかりますが、元々はどのような建物があつたのかということはわかります。法林寺にはもう今はない金堂・講堂・経堂・板倉・東門・北門があつたことがわかり、弘輪寺には二重の多宝塔・法蔵・房舎、そして食堂があり、酒を造って保管しているところもあり、僧侶がなぜ酒を飲むのかということになります、そのようなものがあることがわかるわけです。

これらの寺院は国分寺や定額寺で、国司が管理した寺院ですが、それらの寺院でも塔・金堂・講堂が全て備わっている寺院はなく、弘輪寺では法蔵はありませんが、金堂・講堂はなく、僧房も存在しないので僧侶の常住はなかった可能性もあります。

【史料1】『上野国交替実録帳』(『群馬県史 資料編4』)

(前略)

定額寺

放光寺

件寺、依氏人申請不為定額寺、仍除放已了者、

法林寺

金堂壺宇 長貳丈壺尺柒寸 廣貳丈貳尺 高壺丈貳尺

長和三年交代日記云、天延三年七月一日遭大風顛倒無実
無実

萱葺講堂壺宇(長伍丈 廣肆丈 高壺丈陸尺)

同前日記云、以長徳元年十一月十日為野火烧亡者、
今検同前

茅葺経蔵壺宇(長壺丈壺尺伍寸 廣壺丈 高壺丈)

板倉壺宇

燈爐壺基

東門壺宇

北門壺宇

同前日記云、件雑舎悉無実者、

(中略)

弘輪寺

(中略)

堂舎

二重多宝塔壺宇(長貳丈肆尺 廣貳丈肆尺 高壺丈壺尺)

法蔵壺宇(長貳丈伍尺 廣壺丈伍尺 高壺丈伍尺)

房舎貳宇

食堂壺宇(長貳丈柒尺 廣壺丈伍尺 高壺丈伍尺)

酒舎壺宇(長貳丈肆尺 廣壺丈柒尺 高柒尺伍寸)

廊代長屋壺宇

大衆院

茅葺碓屋壺宇(四方各壺丈參尺 廣壺丈貳尺 高壺丈壺口)

(下略)

【史料2】の天暦7年(953)の『伊勢国近長谷寺資財帳』を見ると、「堂壺院〈桧皮葺高二丈三尺五寸 長二丈六尺 妻一丈六尺 法名光明寺〉」とあります。海野さんのお話しにもあったように、三面庇の堂壺院が残っていることがわかりますが、やはり中心になるのは金堂です。十一面観音が本尊で、鐘楼・僧房の他に、政所屋・大衆屋・板屋などの建物がありますが、塔・講堂はありません。

地方寺院を見れば、講堂がない寺院が山ほどあります。塔と金堂だけ、あるいは金堂だけというところもあって、興道寺廃寺のように、塔・金堂・講堂の主要建物が揃うのは、相当格式の高い寺院です。

【史料2】『伊勢国近長谷寺資財帳』(『平安遺文』二六五)

実録近長谷寺堂舎并資財田地等事

合

堂壺院〈桧皮葺 高二丈三尺五寸 長二丈六尺 妻一丈六尺 法名光明寺〉

三面庇〈高一丈二尺 長五丈六尺五寸 妻三丈一尺〉

香蘭三面〈南面長六丈四尺 東西妻長三丈六尺三寸〉

(中略)

三間鐘楼壺宇〈高〉 毘頭盧一柱

鐘壺口〈高三尺六分 厚一寸八分〉 口径二尺

四間萱葺僧房壺宇〈高八尺四寸 長二丈八尺三寸〉 妻一丈四尺五寸

三間政所屋壺宇〈高九尺 長二丈五尺〉 妻一丈四尺五寸、在南面庇、

四間板葺大衆屋壺宇〈高七尺 長二丈七尺〉 妻一丈四尺

三間屋壺宇〈高 長〉 妻

三間板屋壺宇

(下略)

3. 興道寺廃寺の伽藍配置

まず、興道寺廃寺の創建期はI期(7世紀第4四半期～8世紀第1四半期)に塔と金堂が並列して並ぶ法起寺式伽藍配置で、南門・中門・講堂は存在しないようです(図4)。創建II期(8世紀中葉)は講堂などの建物も造られ、本格的な伽藍を伴う寺院であったと考えられます。そして、8世紀中葉には塔の再建が始まり、その後、8世紀後半には金堂と中門が正方位を意識して再建されて、南門が新たに造られました。廃絶の時期は、出土した土器の年代から9世紀後半には衰退し10世紀以後には廃絶したものと考えられています。

先ほど海野さんから興道寺廃寺の金堂のお話しがありましたが、金堂基壇は東西約16.8m、南北約13.8mで、創建期の基壇は地山削り出しの基壇で外装はわかりません。再建期は創建期の基壇の南側、西側を削って、東側、北側を拡張しています。基壇外装は石積みです。建物の基軸も大きく東に触れています。

塔基壇は、創建期で一辺12mの地山削り出しで造られ、再建期は全体に拡張し一辺15.3mとなり、金堂と同様、創建期の建物の基軸が変わります。講堂の基壇は塔、金堂にやや遅れるようで、規模は東西約18.0m、南北約12.0mです。その他には中門基壇が見つっていますが、回廊についてはよくわかりません。

では、興道寺廃寺でどのようなことが行われたのか。私は中身、ソフトの部分のお話しをしていきたいと思います。

地方寺院の多くは法起寺式の伽藍配置です。講堂は寺院の中で写経や經典の研究などを行う場所ですが、講堂がない寺院もよくあります。講堂がないということは、金堂に置かれた仏像への信仰が中心であったと思われる。興道寺廃寺でも塑像螺髪、仏様の頭髪の巻いた部分が出土していますが(写真6)、金堂にどのような像があったのか。弥勒菩薩や阿弥陀如来、薬師如来などいろいろな仏像があります。螺髪の大さきで仏様の大さきもわかるので、螺髪の大さきから推定すると本尊はおそらく丈六の釈迦如来仏であった可能性が高いと思います。

これもまた座談で議論になるかと思いますが、海野さんは興道寺廃寺の金堂が小さいとお話しされていましたが、おそらく仏様は大きいのではないかという感じです。丈六仏は立像で一丈六尺、4m 80cmですが、それほど高い仏様は金堂に入らないので、お釈迦様に座っていただいて坐像で2m 40cmぐらいです。金堂の丈六仏は、坐像で収まるということになります。

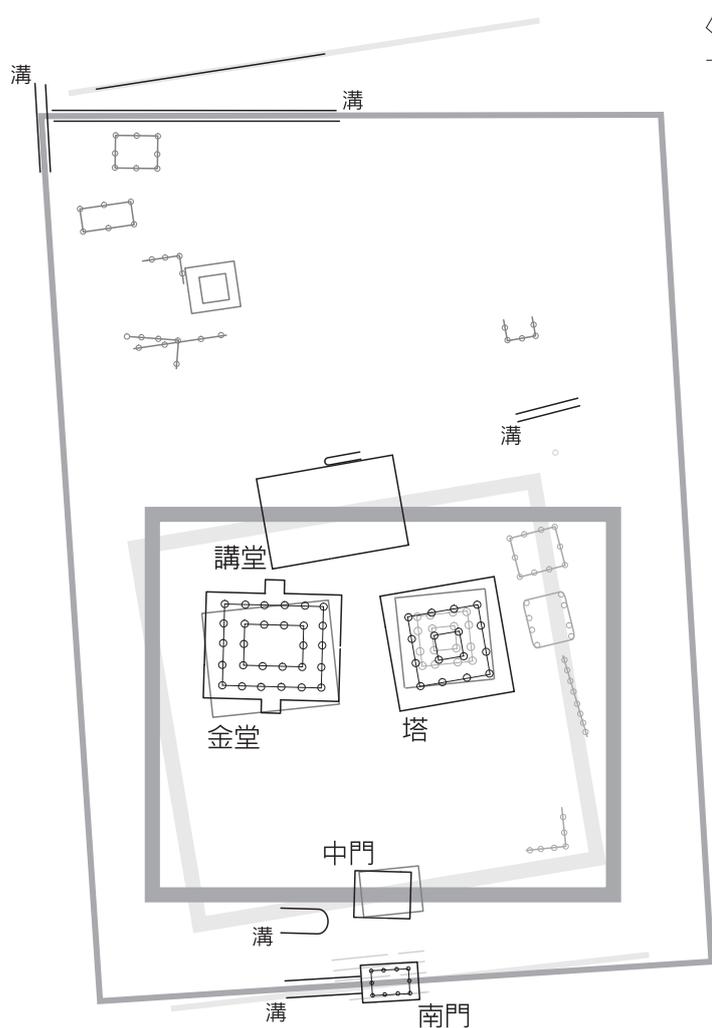


図4 興道寺廃寺伽藍模式図(縮尺1/1,000)

4. 興道寺廃寺で行われた法会

では、このような建物が地方寺院にあり、どのような儀式をしていたのか。地方寺院は郡司や在地の有力者層が建てるのですが、特に郡司となった豪族が建てた寺院は「郡寺」と言われています。「郡寺」は国家仏教的な、国を守るための仏教として国家鎮護を祈ったのではないかという説が結構多いのですが、最近、『東大寺諷誦文稿』・『日本靈異記』という仏教説話を歴史の史料として使おうではないかという動きがあり、その中でも【史料3】の『東大寺諷誦文稿』の面白い部分を史料として載せました。

『東大寺諷誦文稿』は本文に対する書き入れが多く、加筆の部分は法会で語ることを想定したもので



写真6 興道寺廃寺出土塑像螺髪

あり、平安初期の法会で使用された法会次第であることを指摘されています。簡単に言えば官大寺の僧侶達の法会の際の手控え、僧侶が地方に行った際に使用するネタ本です。これを興道寺廃寺バージョンとして少し読んでみます。

「今、この堂は、〈里の名、某甲郷、此れ〉」、ここに里の名前を入れろということで、このあたりの名は弥美郷なので、おそらくお寺の名前は耳寺と言われていた。「今、この堂は耳寺と云う。然る故の本縁。此の堂は大且主の耳別の先祖建立したまふ。堂も麗しく厳り、仏像も美しく造り奉る。郷も何怜く、寺の所も吉し、井も清く水も清し」といったようなことを僧侶が話したと思います。

官大寺の僧侶が地方で行う法会で、まず地名とその由来、寺院建立の縁起と寺名を述べて、堂や仏像を賛美し、寺の景観を賛美することが述べられています。『日本靈異記』には官大寺の僧侶が地方寺院で法会を行っていることが記されているので、興道寺廃寺にこのような官大寺の僧が来ていれば、地名や寺院縁起、景観について述べられたのではないかと思います。

では、寺院でどのようなことをしていたのかということで、【史料4】の『日本靈異記』中巻十一縁には、紀伊国伊都郡の狭屋寺の尼達が発願して法会を準備し、薬師寺の僧の題恵を請けて十一面悔過を行ったとあります。「紀伊国伊都郡の桑原の狭屋の寺」は伊都郡かつらぎ町佐野に所在する佐野廃寺に比定されていますが、発掘調査で塔・金堂・講堂・経蔵・僧房などが見つかри、法起寺式伽藍配置であることが確認されています。

このように地方寺院の法会で実際に行われているのは、圧倒的に多いのが『大般若経』と『涅槃経』、『法華経』です。護国經典の『金光明最勝王経』は『日本靈異記』には1か所しか出てこない。悔過とは前世を悔い改めることで、法華悔過も吉祥悔過も方広悔過もあり、祖先供養です。現世の悔過の法会を行うのが地方寺院の法会で、『日本靈異記』を見る限りでは上巻の十一縁では、最近の研究では姫路市の見野廃寺がそれにあたる播磨国飾磨郡の濃於寺で安居会、上巻十縁では方広悔過、中巻十五縁では法華悔過があり、父母の供養をしています。

確かに東大寺や国分寺を見ると、『金光明最勝王経』などを使って国家の安寧を祈ることが『続日本紀』に出てきます。では、これを全国で使ったのかと言えば、それはどうか。『東大寺諷誦文稿』や『日本靈異記』などの地方の仏教活動を示す史料では、地方では壇越を中心に父母の追善

【史料3】『東大寺諷誦文稿』

今、此の堂は、〈里の名、某甲郷、此れ〉名を某と云ふ。何の故そ某郷と云ふ。然る故の本縁。何の故そ某堂と云ふ。然る故の本縁。此の堂は大且主の先祖〈本願〉建立したまふ。堂も麗しく厳り、仏像も美しく造り奉る。郷も何怜く、寺の所も吉し、井も清く水も清し、〈夏〉の樹影も何怜く、出居も吉し、経行も吉く、遠見も何怜し、駅路の大きなる道の辺にして物毎に便有り。云。若し山、〈林、河〉の辺ならば、山、〈林、河〉に附きて、云。若し城の辺ならば附きて、云。

※ 〈 〉は書き入れ部分

【史料4】『日本靈異記』中巻十一縁

聖武天皇の御世に、紀伊の国伊都の郡桑原の狭屋の寺の尼たち、願を發してその寺に法事を備けき。奈良の右京の薬師寺の僧題恵禪師〈字を依網の禪師といふ。俗性は依網の連なり。そゑに、これをもて字とす。〉を請け、十一面觀音の悔過を奉仕れり。(中略)。凶しき人の妻に、上毛野の公大椅の女あり。一日一夜に八齋戒を受け、悔過に参る行きて、衆の中に居たり。(下略)。

供養や悔過滅罪といった法会が多いのではないかと思います。

さらに面白いのは、寺院の造営意識がわかる史料に「粟原寺伏鉢銘」があります。塔の天辺に伏鉢が置かれるのですが、粟原寺址は奈良県桜井市粟原の山の中に所在し、出土した粟原寺伏鉢銘は談山神社が所蔵し、現在国宝になっていますが、その伏鉢銘文には、

此粟原寺者、仲臣朝臣大嶋、惶惶誓願」奉為大倭国浄美原宮治天下天皇時、」日並御宇東宮、敬造伽藍之、爾故比賣」朝臣額田、以甲午年始、至於和銅八年、」合廿二年中敬造伽藍、而作金堂、仍造」釈迦丈六尊像、」和銅八年四月、敬以進上於三重宝塔」七科鑪盤矣、」仰願藉此功德」

皇太子神靈速證无上菩提果」

願七世先靈共登彼岸」

願大嶋大夫必得佛果」

願及含識俱成正覺」

と記されています。この伏鉢銘によれば、お寺が造られた目的は中臣朝臣大嶋が持統天皇の時に、草壁皇子の追善供養のために発願して、額田比売の父大嶋の死後、甲午年（持統8年、694）に工事に着手して、22年を費やして伽藍を始め釈迦丈六仏像を造り、和銅8年（715）に三重塔に七段の相輪を上げて完成したということがわかります。興道寺廃寺もお寺を造った時は20年ぐらいはかかったと思います。

その願文の対象として四つありますが、一つ目は草壁皇子の追善供養で、二つ目は「願七世先靈共登彼岸」とあるので中臣氏の七世父母に代表される祖先信仰で、三つ目は父にあたる中臣朝臣大嶋自身が佛果を得ることで、四つ目は一切衆生が悟りを得ることを願うことです。これから古代の寺院造営の意識の一端を知ることができます。粟原寺が草壁皇子の追善供養を行い、また一般的な祖先信仰に基づいて造営されていることがわかります。これが古代の仏教信仰の、少なくとも寺院で行われた仏教信仰の本当の姿になるのであろうと思います。

さらに、【史料5】の『日本霊異記』中巻二十一縁と、【史料6】の下巻三縁と二つの史料を挙げました。特に【史料5】には東大寺の前身の金鷲寺という山寺で、後に金鷲菩薩と称される優婆塞が執金剛神の像に縄を引いて礼仏悔過を行っていることが記されています。これはどのようなことかと言えば、お堂の中の仏様に縄をかけて、それを引っ張ってお願いするというのです。私は1回、京都のお寺でそれを見たことがあります。金堂に安置されている仏像に対し縄

【史料5】『日本霊異記』中巻二十一縁

諾楽の京の東の山に、ひとつの寺ありき。号をば金鷲といひき。金鷲優婆塞、この山寺に住しき。そゑに、これをもて字となしき。今は東大となる。いまだ大寺を造らざりし時の聖武天皇の御世に、金鷲、行者をもて常に住して道を修せり。

その山寺に、一はしらの執金剛神の摂像を居きまつる。行者、神王の脛より縄をかけて引き、願ひて昼も夜も憩はず。時に脛より光を放ち、皇殿に至る。天皇驚き怪しび、使を遣はして看しめたまふ。勅信、光を尋ねて寺に至りて見れば、ひとり優婆塞あり。その神の脛より繫けたる縄を引きて、礼仏悔過す。（下略）

【史料6】『日本霊異記』下巻三縁

沙門弁宗は、大安寺の僧なりき。天年弁ありき。白堂を宗とし、多く檀越を知り、高く衆の氣を得たり。（中略）。そゑに泊瀬の上の山寺に登り、十一面観音菩薩に参み向く。

観音菩薩のみ手に縄を繫け、引きてまうしていはく、（以下略）。

を掛けて引き、それを自分の手につなげてお祈りする、礼仏悔過を行うという信仰の実態とされます。仏様とつながっているという形態の祈り方が現れている史料です。おそらく金堂で行われた法会というのは、そのような法会であったのではないか、金堂など一堂でも仏像が存在すれば仏教信仰は成立するというので、同じように礼仏悔過を行う例は【史料6】にも見えます。

5. まとめ

これまで地方の伽藍配置から寺院の宗教的機能を検討し、興道寺廃寺の性格について、いろいろな観点から考えてきました。まず一つ目は、地方寺院の法会を行う場として伽藍配置は重要と思われませんが、実態からみれば金堂が中心で、仏像の礼拝を中心としていた寺院が多かったと想定されます。仏像は観音菩薩が多く、その他にも釈迦如来や弥勒菩薩などありますが、特定の仏像が対象ではないようです。そして、信仰も礼仏悔過が中心であると思われれます。興道寺廃寺でも講堂が塔と金堂に遅れて造られたことは、当時の仏教信仰の本質を表すものと思います。

二つ目は、『日本霊異記』などの例から見ると、地方寺院の法会で用いられた経典は『法華経』が多く、『涅槃経』・『金剛涅槃経』・『陀羅尼経』・『方広経』・『観世音経』・『瑜伽論』などが見られますが、護国仏典の『最勝王経』は極めて少ないようです。その他の写経の例では『大般若経』が多く見られます。

三つ目は、法会の目的として懺悔悔過が中心で、特に方広悔過や二月悔過などの例が見られます。また、この悔過は追善供養とも結びついて、除病延命などの現世利益的な信仰が中心であったと思われれます。これは古代東アジアの仏教的な世界と相違しないと言えます。

四つ目は、法会の参加者は壇越である一族を中心に、他の氏族も含めた地縁的な知識が存在したことも見られ、このような形態が氏寺における仏教信仰の特質であったと思われれます。

そして、最後に問題提起したいと思います。最初に松葉さんは興道寺廃寺の北に北陸道が通っていると言いました。海野さんも海から見れば興道寺廃寺は立派な景観であったと言いました。確かにそうかと思いますが、私が最初に言ったことを覚えていますか。お寺は南に門があって、塔があって、金堂がある。すなわち南を向いて造られます。確かに道が南にあればよいのですが、興道寺廃寺の場合、海から見ればお寺の後ろを見ることになります。海から見ることを意識すれば、北に門をもってくるということになりますが、ところが山陰地方、日本海側の寺院は全て、必ず南向きに造ります。海から見れば伽藍配置の後ろを見ることになるのですね。これでよいのかということで、私が座談のテーマを作ってしまったてよいのかわかりませんが、法起寺式伽藍配置がなぜこれほど多いのかということも含めて、松葉さんも座談でいろいろと用意していることをぐちゃぐちゃにしている気もしますが、時間があれば議論したいと思います。ご清聴ありがとうございました。

ただ今、ご紹介に預かりました名古屋大学の梶原と申します。午前中の三舟先生の立て板に水のような話の後で、何を喋ればよいのか正直よくわからないところもありますが、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願いたします。私は大学時代から20年以上古代寺院について研究をしているのですが、そのうちこの7、8年ぐらいは古代寺院の立地についての研究をしています。



興道寺廢寺が造られた7世紀後半から8世紀初頭という時期は、興道寺廢寺に限らず日本全国で数多くのお寺が造られた時期で、その数600とも700とも言われていますが、なぜこんなに多くのお寺がこの時期特有の現象として一気に造られたのかということに疑問をもっています。

そのような中、寺院の立地、どのような場所に寺院が造られて、どのような人にどのような形で見せるために造られたのかを分析することで、寺院の造営背景に迫ることができるのではないかと考えました。私は歴史地理学の素養は全くないにもかかわらず、立地というような、半分考古学、半分歴史地理学に足を突っ込んだような議論をさせていただいていますので、心苦しいところではあるのですが。

1. はじめに

かつては寺院の立地、選地について、交通の要衝にお寺が造られているということぐらいしか言われていませんでした。または郡家や国府など役所に近い、官衙との隣接ということ程度しか言及がなかったのですが、必ずしもそればかりではないということを考えるようになりました。私は著書の中で古代寺院の立地について、その多様性を強調し、官衙・官道隣接型、港津型、河川型、眺望型、開発拠点、水源、聖域、山林寺院、村落内寺院と9分類し、それぞれの立地、選地に反映される寺院造営の意図や寺院の役割について検討を進めてきました。その結果として7世紀後半から8世紀初頭の寺院の立地、どのような傾向性と意味があるのかということ、大まかには四つの属性と密に関連しているのではないかと考えました。

まず「モニュメント」、五重塔や七重塔のような権威、権力を示すモニュメントとしての役割。次に「水田開発」、新しく田んぼを造ったような場所や既に開発された既耕地を見降ろす場所にお寺が造られている事例。三つ目は「伝統的自然信仰」、山への信仰や湧水への信仰という、あまり仏教的ではない伝統的信仰と融合して寺院が造営される事例がある。そして、「祖先崇拜」、三舟先生のご研究でも指摘されていることですが、考古学的にも、古墳と寺院が近いところに造られた事例がみられます。

もう少し具体的に述べると、郡家や主要官道などに隣接した官衙・官道隣接型の寺院は、いわゆる国家仏教的、律令政府が推し進めようとした仏教のあり方を象徴しているのではないかと思います。その一方で、私が河川型や眺望型などと分類した河川堤防上や段丘崖などに造られたお寺は、在地の有力者が自分達の影響を及ぼしている領域を広く見渡すことができるような場所にお寺が造られたということではないか。谷底平野の奥や沖積低地部、段丘上や扇状地上など既に農業開発された場所を見降ろすようなエリアにお寺が造られたり、また高燥地の開発、扇状地や段丘上など比較的標高の高いところを新しく開発して、その開発した場所にお寺を建てるというような場合、これらは水田開発との関連性で語れるのではないか。扇頂部や扇端部の湧水点など、農業をめぐる水源祭祀との融合もお寺の立地としてあるのではないか。そして、最後は山裾ですね。山麓や古墳との近接。自然信仰や古墳など祖先崇拜との融合する形でお寺が地域社会で受け入れられていると私は考えています。

選地パターン	地 形	周辺施設	選 地 の 特 徴	選地からみた寺院認知
官衙・官道隣接型	沖積低地・段丘上等	国府・郡家・官道・集落	国府・郡家など官衙遺跡や、主要官道に隣接。公的拠点および陸上交通路からのアクセスを重視した選地。	国分寺の選地はほぼこれ。不特定多数の人々の参集が容易で、国家仏教の拠点としてのモデルケース的な選地。
河川型	河川堤防・河川沿いの低位段丘端部等		河川はおもに舟運で物資を運ぶ国内交通路。水上から伽藍を眺める視点を重視した選地。	アクセス性は高くなく、造営者の権力の象徴としてのモニュメント的意味合いが強い。見せる対象は限定的。
港津型	河口付近の台地上等	港津・集落	海港や湖津に隣接。国外への物資の集散地であり、郡家別院 国府津など公的機関が設けられる例も。	おなじ河川流域の選地でも 河川型よりも公的色彩が強く 官衙官道隣接型に近い。
眺望型	段丘端部・低丘陵端部等	条里地割	丘陵頂部や段丘裾部など、周囲の集落や条里(水田地帯)を、高地から広く見渡せる選地。	河川型と同様、地域内のモニュメント的色彩が強い選地。河川型より見せる対象はさらに限定される。
開発拠点型	段丘上・扇状地・沖積低地等	集落・条里地割	条里地割が敷設された沖積低地や扇状地など、水田地帯の微高地を選地し、複数寺院が密集して造営。	モニュメントや宗教拠点としては寺院数が多く、高燥地を中心としたあらたな水田開発に伴い、寺田としての確保という経済的事情も存在か。
水源型	扇央部・段丘端部 湧水点等	条里地割	小河川が山地から平野部に流出する扇央部やその付近を選地。農業用水の湧出地を扼す役割か。	農業開発と濃厚にリンクするが、開発拠点型よりも伝統的な湧水祭祀の役割を引き継ぐか。
聖域型	山 麓	古 墳	前面に河川、背後に山を背負う狭隘な選地。後背山林には古墳が築造される例も。集落や条里からの隔絶。	「俗界」と隔絶し、古来の山岳信仰や祖先信仰等との融合。聖域的な場。寺院への視点はかなり限定され、対象は限定的。
山林寺院	山 林		平野部から遥かに隔絶した山中に造寺。アクセス性は低く また周囲から伽藍を見渡すこともできない。	山岳信仰や境界祭祀などに関わり。奈良期にはその一部が、僧尼の修行の場として国家仏教の中に包摂。
村落内寺院	沖積低地・段丘上等	集 落	集落内に造営された小堂的な建物。非礎石建・非瓦葺で、墨書土器の内容から仏教施設と知れる例も多い。	モニュメントとしての意味合いは皆無で、集落の住民たちの純粋な宗教施設。

表1 古代寺院の選地パターンとそこから想定される寺院認知

地方において仏教という新しい宗教が地域社会の中にどのように根づいていったのかということは、以上に挙げた「モニュメント」、「水田開発」、「伝統的自然信仰」、「祖先崇拜」という地域社会の需要が、仏教と上手く融合した結果、多くのお寺が建てられていったと私は考えたわけです。

その一方で、今まではお寺と比較的相性がよいと言われていた属性の中でも、そうでもないのではないかといったものもまた見えてきました。

一つは、窯業や製鉄、製塩業などの手工業生産や、水田開発以外の諸産業とお寺の立地は意外とリンクしない。古代寺院の造営技術や、仏教自体が朝鮮半島から伝わってきたという中で、例えば窯業生産や製鉄の技術なども渡来人が伝えてきたものですが、このような渡来系技術と仏教との関係は、少なくとも地理的近接地という意味ではさほど上手くリンクしてこない。地域によっては、窯がたくさんある郡にはお寺がほとんどないといったような相反する状況を呈することもあります。

もう一つは、特に地方においては屯倉（ミヤケ）とお寺の立地も意外とリンクしてこないのではないかと考えています。屯倉については多くの研究史があり、一言で言うことはなかなかできませんが、このような王権が直接押さえたような場所に、意外とお寺が展開をしていかない。もちろん中央政府が地域社会に仏教を信仰せよ、お寺を造れとたびたび言っていることは『日本書紀』などにも書かれているのですが、やはりその中心は中央・地方の氏族中心の仏教展開であるということです。王権が直接地方に寺を造るという状況ではなかったということです。

今までいくつかの属性を挙げてきましたが、私が著書の中で「港津型」、海に面したお寺についても一つの類型として提示しています。この海上交通と寺院との関係はどうなのかということは、私は著書を発行した後も、かねがね疑問に思っておりました。昨年、愛知県名古屋市で行われた考古学フォーラムで松葉さんにラグーンと興道寺廃寺との関係はどうでしょうかということをおうかがいしたところ、松葉さんはそれをよく覚えておられて、次の歴史フォーラムは古代寺院の景観をテーマにするから梶原が報告しろというご指名を受け、自分でも興味があったところですので喜んで今回、お受けしたところです。

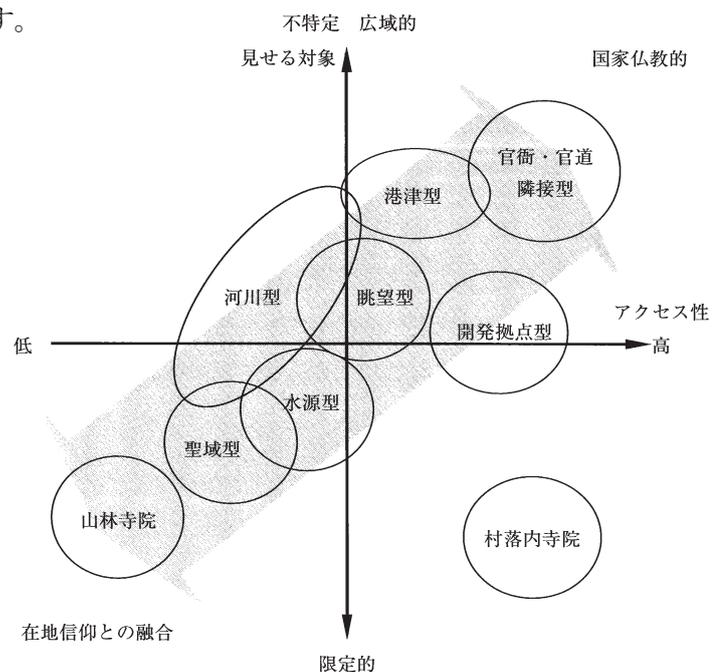


図1 選地パターンからみた古代寺院の造営背景

2. 研究史

ということで、具体的な港津型寺院の様相についてみていきます。ラグーンと寺院との関係についての研究史は少ないのですが、海上交通の要衝としてのラグーン自体については、考古学的にも歴史地理学的にも多くの研究史があります。

そのうちいくつかを紹介をしておくと、おそらく考古学的にそのようなことをはっきりと指摘されたのは森浩一さんかと思います。古墳を中心として港に関する考古学的資料を概観し、ラグーンと古墳との関係などを概観して、古代においてはラグーンが港として利用されていたということを考古資料から論じました。

昨年のことですが、石村智さんという私の大学の後輩が、『よみがえる古代の港』という著書を出され、この本は今回の私の報告のアンチョコにもなっているのですが、全国のラグーンについてGISなどを駆使しつつ、陸化以前の景観を復元し、港の変遷や港をつなぐネットワークについて論及されています。

歴史地理学の立場からは、この後にご報告される門井先生のご研究などもあります。門井先生は日本海のラグーンについて総合的に復元され、地域間交流について論じられています。

基本的にはこのような先学の研究を踏まえながら、私は寺院とラグーンとの関係に限定しつつ、今日は議論を進めていきたいと思います。

3. 選地からみた興道寺廃寺

古代においてどこまでが海で、どこからが陸であったのか、実はこれは難しい問題です。どうすればよいかということで、今回、報告する前に東京まで行って石村さんに話を聞いてきたのですが、基本的には標高3mぐらいが基準になるようで、遺跡の分布図や古地図を参考にしながら、最終的には自分の足で歩いて全て確認するしかないと言われてしまいました。もちろん、それが正しい方法論ですが、今回は仮説的に、標高4m以下は海であったと示しています。本来は個別にきちんと検討する必要があるのですが、これでもある程度の傾向は把握できるのではないかと思います、話を進めていきます。

以下にお示しする地形図については、地図の凡例として青色：標高4m以下、緑色：標高4m以上20m以下、黄色：標高20m以上と標高に応じて3色に分けて表示しました。記号は、●：前方後円墳、●：円墳・後期群集墳、■：終末期古墳、卍：寺院、干：神社、□：官衙系遺跡、○：集落等、△：窯跡を表しています。

まずはご当地の興道寺廃寺のお話しをしたいと思います。図3をご覧ください。興道寺廃寺の所在する耳川流域の顕著な遺跡として、耳川河口部の微高地に造られた獅子塚古墳という全長32mの前方後円墳がありますが、この古墳のすぐ脇まではラグーンが入ってきているとされています。陶製の角杯など海上交通を彷彿とさせるような新羅・伽耶系の遺物が出土していますので、海洋民による古墳ではないかとも考えられようと思います。ただ6世紀の半ば以降、群集墳の時代になると、興道寺廃寺のある付近、耳川左岸の河岸段丘など、比較的標高の高い高燥地に興道寺古墳群が造営されるなど、古墳や集落が見られるようになる。このようにこの地域では、6世紀中頃以降、沿岸部の古墳から内陸部の群集墳へと、古墳造営地の移動が見られます。

そして興道寺廃寺も、この耳川左岸の河岸段丘の端部に造営されています(図2)。現地に行くとわかりますが、寺院の東側がちょうど段状に低くなり、その向こうは耳川の河川敷といったような、耳川に面した立地をとっています。そういう意味では河川型でもあり、耳川左岸の高燥地

の開発と密接に関係した開発拠点型、また周囲からの眺望がよいところでモニュメントとしての眺望型的な役割もあったのではないかと私は考えています。

ただ、このようなあり方は興道寺廃寺のみに限定されるものではありません。海沿いの地域でなくても、川沿いや広く周囲を見渡せるところ、また新しく開発された扇状地にお寺を造るということは一般的に見られる現象かと思えます。獅子塚古墳がラグーンのすぐ傍に造られていることに対して、興道寺廃寺が海上交通を意識しているようにはあまり見えません。

森浩一さんは、三方五湖は船の出入りの条件がよくなく海上交通という意味での地域に対する求心性は乏しかったと指摘されています。この評価が正しいのか正しくないのか、私はよくわかりませんが、沿岸水運と交易、漁業や製塩などを生業としつつも、6世紀以降は、在地有力氏族として内陸部の高燥地のあたりの農業開発に従事するという、この流域の支配者層の生業活動の変化が、遺跡立地に現れていると私は考えます。そのような流れの中で、興道寺廃寺も造営されていると解釈できるのではないのでしょうか。

興道寺廃寺の立地につきまして、実は今朝、松葉さんにご案内いただき、現地にかがいました。もちろん、今回の報告をさせていただくにあたって、私自身、何度か現地を足で運んでいたのですが、そのときには気づかなかったことを少しお話しさせていただきます。

地域のランドマークとなるような山をもとにして地域内部での地割などが決定されるというようなことがあるのか、これは門井先生におうかがいしたいところではありますが、そのような視点で見ると、興道寺廃寺の北の方には天王山の頂上はかなりきれいに見えます。それに対して反対側の南の方に日吉神社がありますが、日吉神社の南にもまたきれいな山が見える。古代寺院の立地を見ていくと、実はこのようにきれいな神南備を前に臨む、あるいは後ろに背負う寺院がそこそこあります。ひょっとすると、このような山の存在や、それをもとにした地域の軸線の策定と興道寺廃寺の造営が関係している可能性はないのか。つい今朝方、そのような妄想を始めたところで、ご紹介させていただきました。



図2 興道寺廃寺周辺地形分類図 (縮尺 1/50,000)

4. ラグーンと古墳と神仏 ―他地域の事例より―

興道寺廃寺周辺の事例だけ見ても、海上交通と寺院の関係の全体像は出てきませんので、他地域の事例を見てからもう一度、興道寺廃寺に戻って考えてみたいと思います。

(1) 石川県・加賀三湖周辺

石川県小松市の加賀三湖周辺のエリアですが、加賀南部の能美郡から江沼郡にかけて、加賀三湖とよばれる、今江潟・柴山潟・木場潟というラグーン地形が広がっています。図4では加賀三湖と言いながら三つの潟が全てくっついてしまっているのですが、標高4mで色を塗ったのは明らかにやり過ぎという感じになってしまいました。この地域では、もう少し陸の及ぶ範囲が大きかったとは思いますが。

今江潟と木場潟の間に突き出しているのが月津台地で、5世紀末から6世紀にかけて、全長25mの前方後円墳である御幸塚古墳や、須恵質の形象埴輪が出土した全長30mの前方後円墳、矢田野エジリ古墳など、100基以上の古墳で形成される三湖台古墳群が造営されています。わかりやすくラグーンに突き出たところで、海上交通との関係が深い古墳立地であることは明らかです。しかしそれが7世紀頃には古墳造営が衰退して、7世紀代の終末期古墳の墓域は、内陸部の那谷金比羅山古墳群に移動していきます。6世紀から7世紀にかけて、ラグーン周辺から内陸部へと墓域の移動が起こっています。江沼郡でも同様で、能美郡北部ではラグーンに近い丘陵端部に和田山古墳群などの古墳群が形成されるのですが、7世紀には墓域が移動して梯川中流域の沖積低地や加賀国府が後に造られる国府台地を眼下に見降ろす場所に、切石積みの横口式石室をもつ河田山古墳群が形成されます。

寺院としては7世紀末頃の瓦が出土する十九堂山廃寺が、梯川中流域の開発に伴う形で国府台地に造営されます。

このように加賀三湖周辺においても、ラグーンを中心とした6世紀までの海洋民的な古墳の展開から、7世紀に入ると地域の中心が内陸部へと移動し、河川の中流域や自然堤防上などの高燥地の水田開発が進行していく。そして、それに伴い終末期古墳が造営され、続いてお寺が造営されるといった流れがあるのではないかと考えます。

もう少しこのエリアを広い目で見ると、手取川の北側、石川郡に末松廃寺というお寺が造営されます。手取川の北側には手取扇状地という広大な扇状地が広がっていますが、この周辺の遺跡展開としてはまず、扇端部の湧水点に御経塚遺跡、チカモリ遺跡などの著名な縄文遺跡が展開します。弥生時代になるともう少し内陸に入るあたりが水田開発されて集落が広がっていくのですが、扇状地の真ん中あたりのかなり標高が高いところは、開発が随分遅れると言われています。末松廃寺の隣には末松遺跡という集落があるのですが、このあたりも7世紀に入ってから集落が形成されます。これまで開発が及んでいなかった高燥な手取扇状地が、7世紀以降、灌漑技術が発達する中で開発が一気に進み、末松廃寺が造営されるという流れが確認できます。また、末松廃寺では単弁六葉蓮華文という珍しい模様の瓦が使われていますが、この瓦は手取川南方の湯屋窯から運ばれたことが確認されています。このことから、手取扇状地の開発には加賀南部の有力者が進出していたという見解も提示されています。

以上まとめますと、6世紀末頃から7世紀以降に地域開発のあり方が変動する中で寺院造営が進められ、内陸部の農業開発と寺院とがリンクしてくるといって、興道寺廃寺周辺と似たような状況が、加賀三湖周辺でも確認できるのではと考えております。

(2) 島根県・神門水海周辺

さらに島根県の事例を見ていきたいと思います。図5をご覧ください。北側の出雲大社がある方が出雲郡、そして南側の方が神門郡という二つの郡の境目に、神門水海という広いラグーンが形成されています。今は東に流れていますが、昔は斐伊川の本流は西に向けて、ちょうど出雲大社の方に向かうような形でラグーンの北側に流れておりました。神戸川も同様に、こちらはラグーンの南側に注いでいるという地形です。この二つの大きな河川の下流域でラグーンが形成されています。そして、ラグーンのちょうど出口付近にあるのが出雲大社で、ラグーンと海の一番よいところに神社が置かれています。また、ラグーンが一番奥まったところの扇状地にも青木遺跡という神社の遺跡があります。神社遺跡の判断は結構難しく、明らかに神社であるという遺物などが伴わないと建物遺構だけで神社と確定させるのはかなり難しいのですが、青木遺跡は出土遺物などから見ても、神社である可能性が高いと言われている遺跡です。

では、その前段階の古墳の展開はどうかということですが、ラグーンに突き出した丘陵の端部に6世紀半ば頃に、全長92mの前方後円墳、今市大念寺古墳が造営されています。平野部やラグーンから見渡しがよいところ、丘陵の頂部に載るような形で古墳が造営されています。それが6世紀半ばあたりになると、首長墳の系譜が内陸部に移ります。神戸川右岸の丘陵裾部の周囲からさほど見渡しがよくないところに、立派な馬具が出土した6世紀後半の全長46mの円墳、上塩冶築山古墳が造られ、その後はその周辺で首長墳の系譜が継承されていくことが指摘されています。森浩一さんは「出雲市とその周辺に勢力をもち、大念寺、上塩冶築山、…などの顕著な古墳を造営した神門臣勢力は、神門水海…のたまものとみてよかろう」といった見解を示されているのですが、単純に古墳の立地という意味で考えるならば、今市大念寺古墳がラグーンを意識し

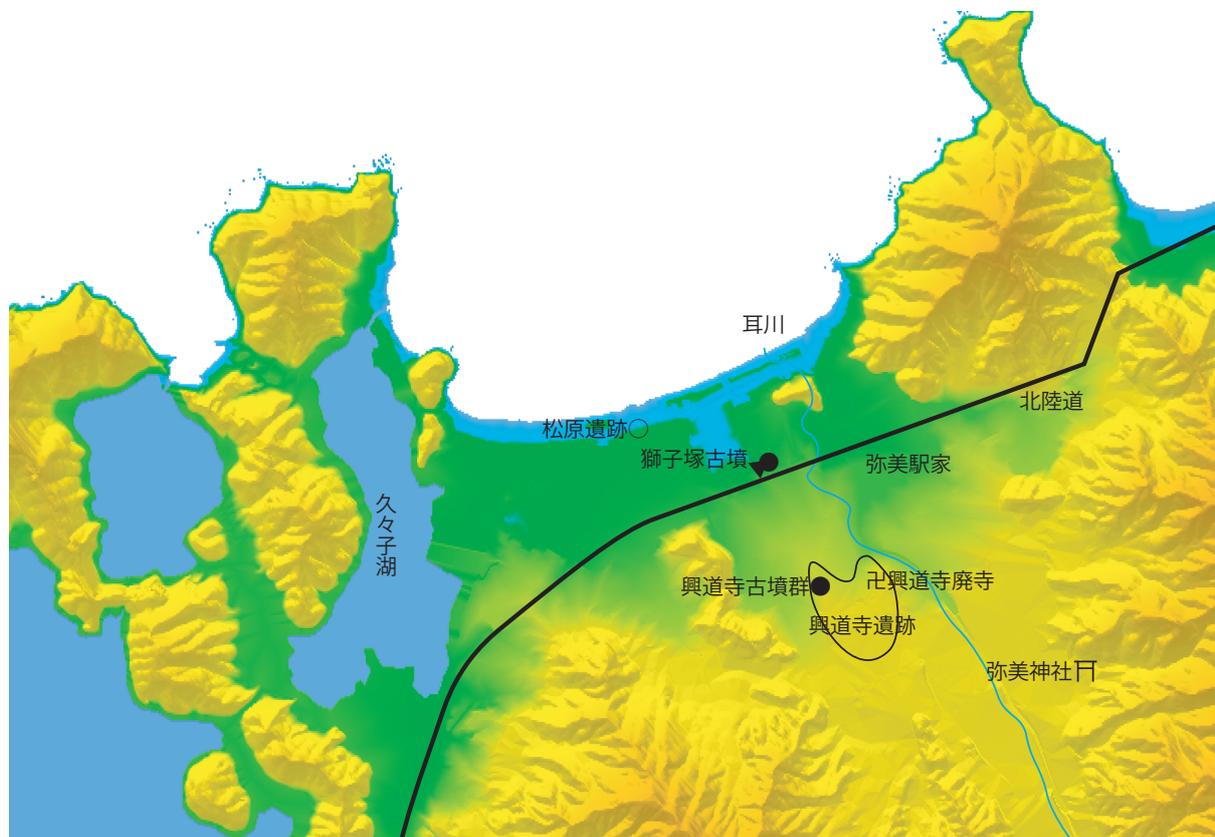


図3 若狭・興道寺廃寺周辺の地形と周辺遺跡 (縮尺約 1/50,000)

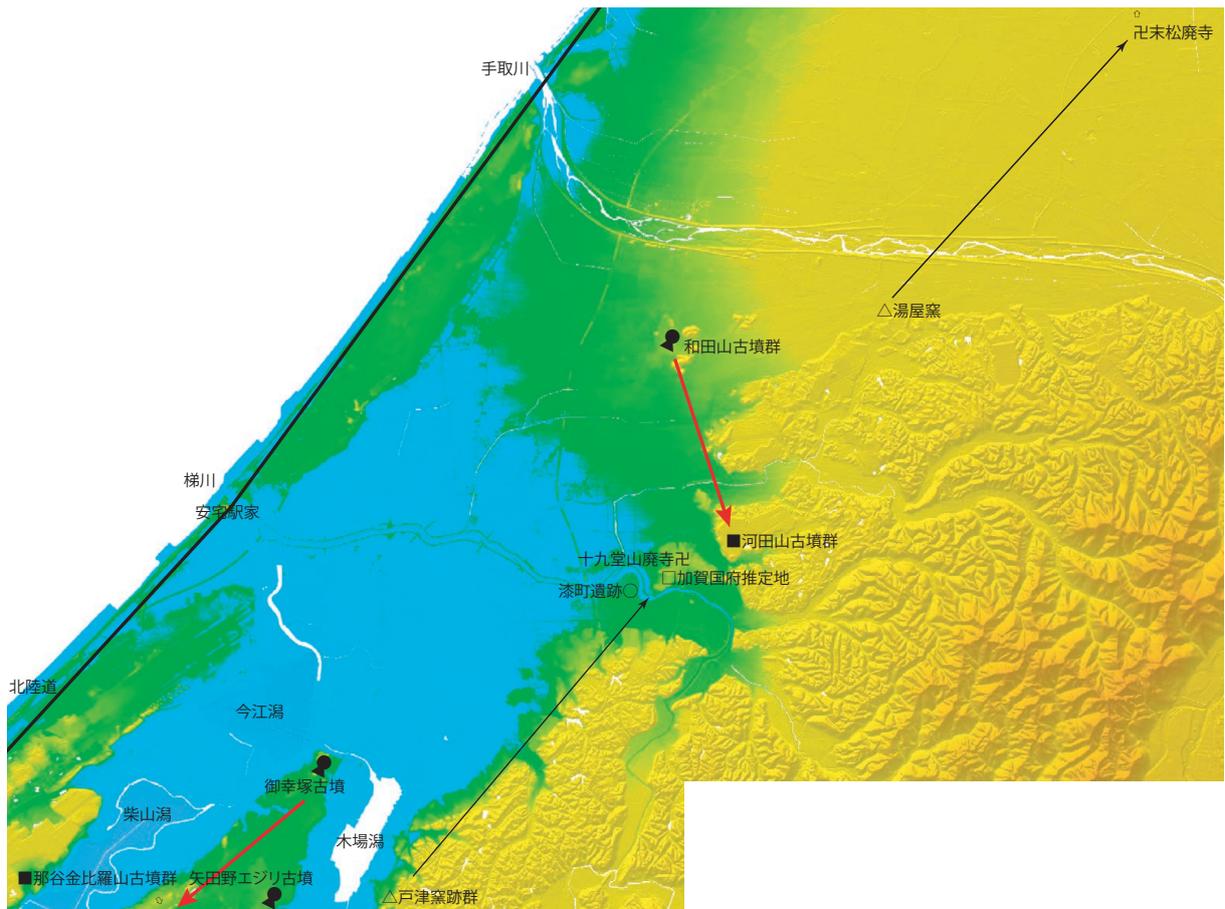


図4 加賀・加賀三湖周辺（能美郡）の地形と周辺遺跡（縮尺約 1/150,000）

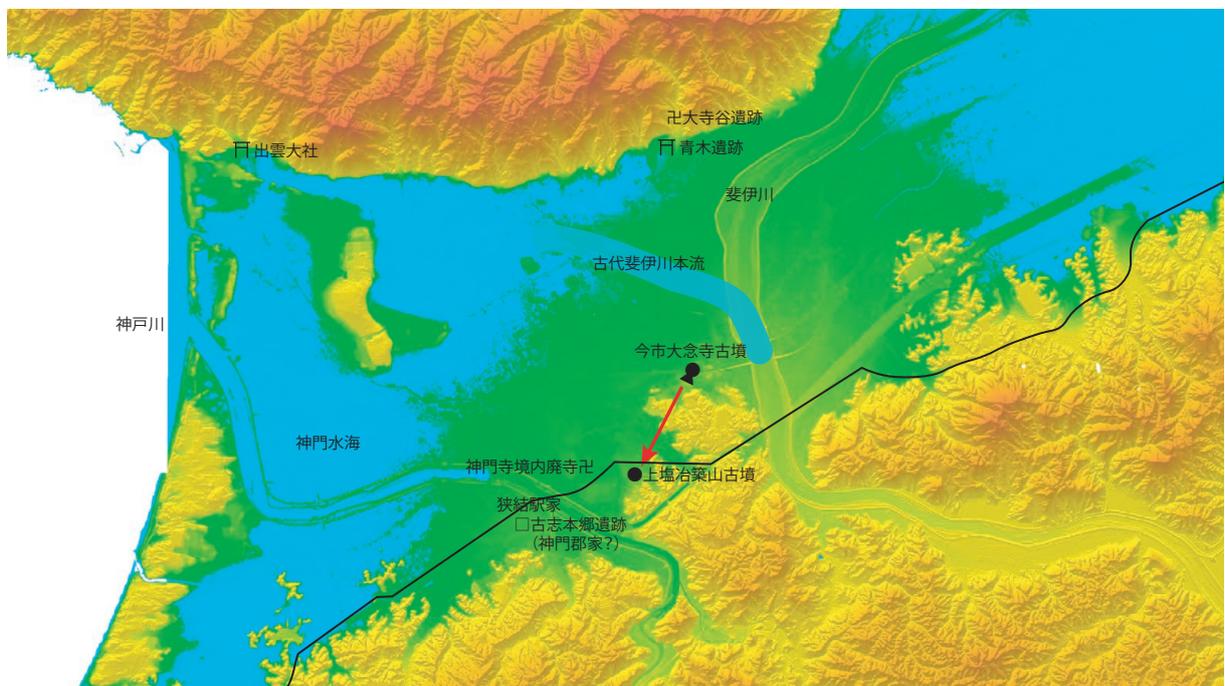


図5 出雲・神門水海周辺（神門郡・出雲郡）の地形と周辺遺跡（縮尺約 1/150,000）

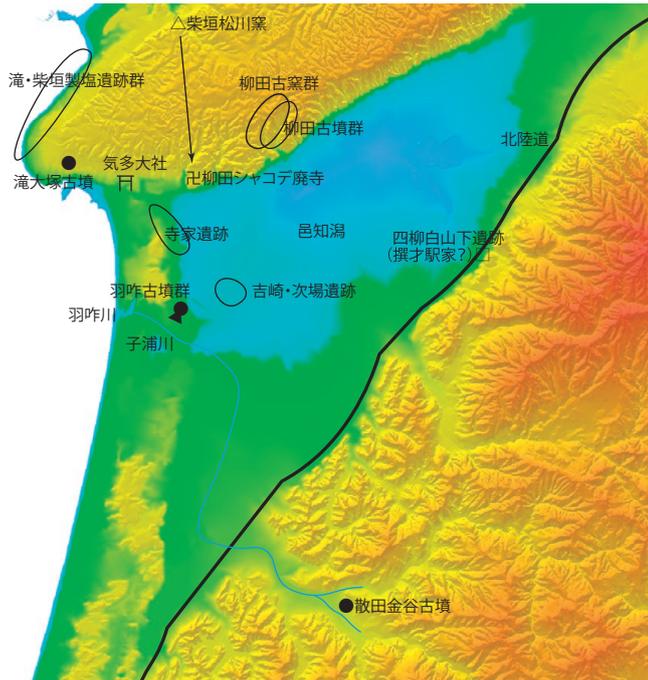


図6 能登・邑智潟周辺(羽咋郡)の地形と周辺遺跡(縮尺約1/150,000)

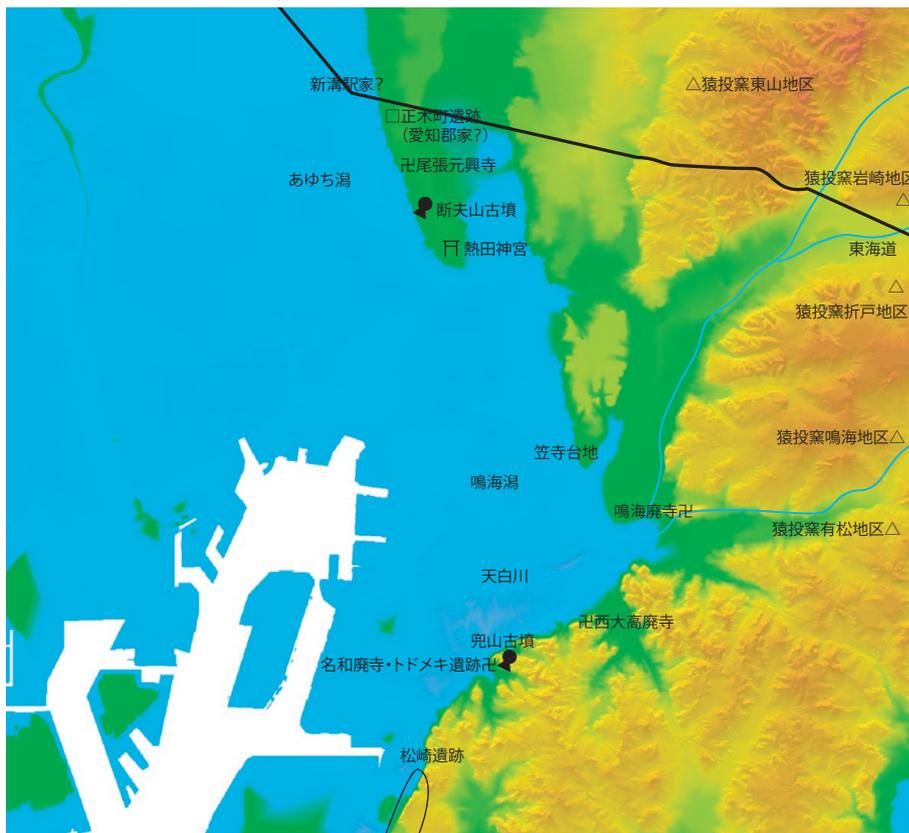


図7 尾張・愛知郡周辺の地形と周辺遺跡(縮尺約1/150,000)

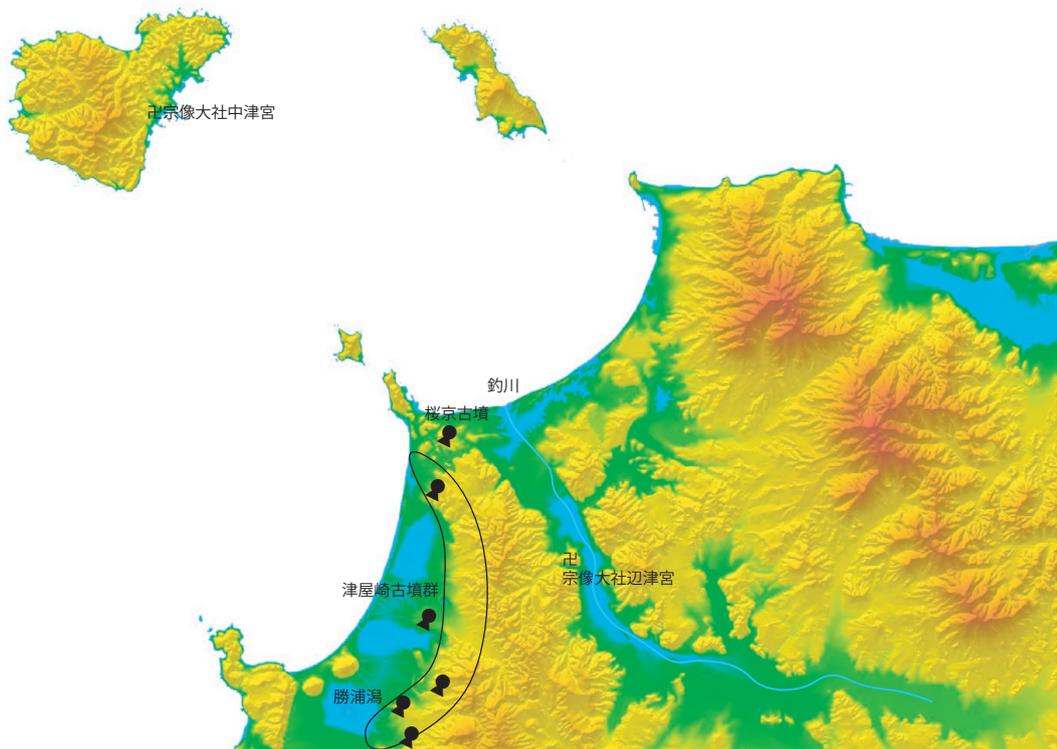


図8 筑前・宗像郡周辺の地形と周辺遺跡（縮尺約 1/150,000）

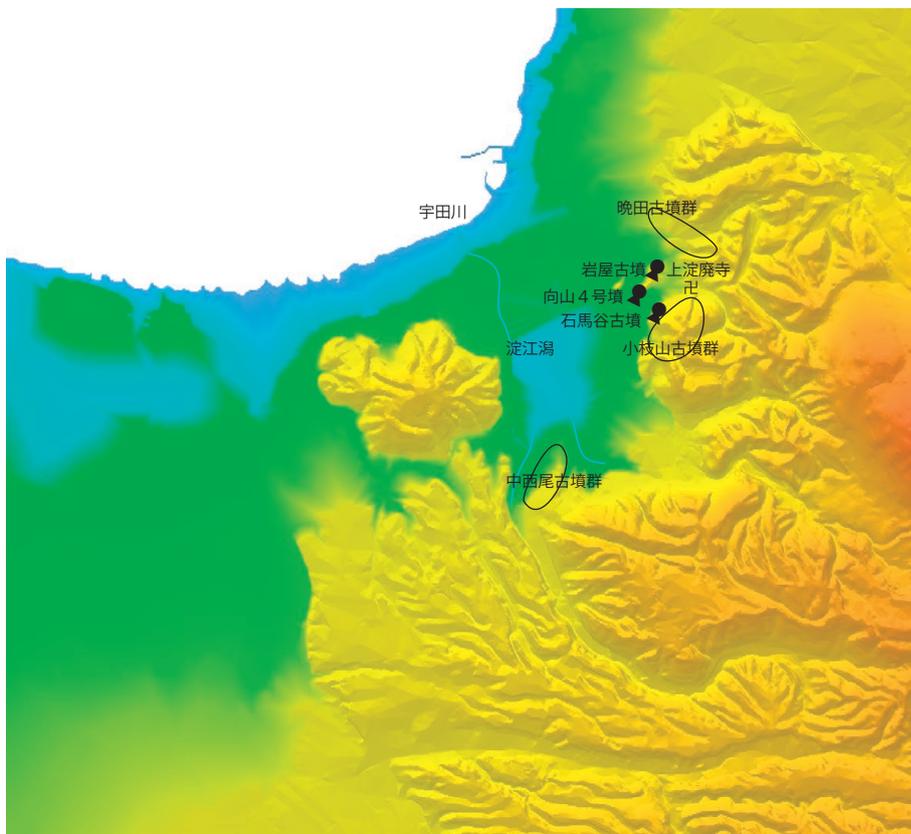


図9 伯耆・淀江潟周辺（汗入郡西部）の地形と周辺遺跡（縮尺約 1/75,000）

た立地であることと、どちらかと言えば神戸川中流域に広がる自然堤防上の開発とリンクするような上塩冶築山古墳の立地とは随分と違うのではないかと私は考えます。これまでの諸事例で見てきたように、これもラグーンを意識した古墳立地から、扇状地や河川堤防上の開発との関連へと変化しているのではないかとことです。

寺院はどうかと言えば、神門寺境内廃寺が上塩冶築山古墳に近い神戸川中流域右岸の自然堤防上に造営されています。河川型かつ、神戸川中流域の開発に伴う開発拠点型と評価することができようかと思えます。出雲大社の立地とはずいぶん異なることも注目できそうです。ちなみに神門寺境内廃寺では水切り瓦という、軒丸瓦の先が尖っているような珍しい瓦が出土しています。

(3) 石川県・邑知瀉周辺

次は石川県の能登、邑知瀉の周辺です。羽咋市の中野さんも先日、美浜町でお話しされていますが、邑知瀉もやはりラグーンです。図6は少しラグーンの範囲を広く描き過ぎました。実際の邑知瀉はもう二回りくらい小さいです。まず注目したいのは気多大社の位置で、先ほど見た出雲大社の位置と全く同じで、ラグーンの出口の一番よいところに神社があります。また、滝大塚古墳や羽咋古墳群などラグーンや海上交通を意識した立地の首長墳が比較的多く展開していることが確認できます。そして何よりも邑知瀉周辺で著名な遺跡が寺家遺跡で、神祀りに関連するような遺物がたくさん出土していますので、気多大社との関連が想定される、祭祀専従集落としての寺家遺跡、これがラグーンに面し、気多大社の近くに所在します。

では、寺院はどうなのかということですが、気多大社のすぐ東側の丘陵部の端部に、柳田シャコデ廃寺という寺院遺跡が立地しています。南に邑知瀉を臨む丘陵沿いに位置しているのです、明らかにラグーンを意識した立地であろうと思われる。これまでいくつかの事例を見てきましたが、その中でラグーンを直接意識した寺院というのはあまりなかったのですが、柳田シャコデ廃寺については、明らかにラグーンを意識していると言ってよい立地です。ただこの遺跡、少なくとも8世紀半ばぐらい以降は、気多大社の神宮寺として機能しているということの中野さんも指摘されているところですが、それ以前はどうだったのか。そもそも柳田シャコデ廃寺の創建瓦の年代をいつの時代に位置づけるのか、7世紀末ぐらいなのか、8世紀前半ぐらいまで降るのか。類例が少ない瓦で判断が難しいのですが、神宮寺がいつ頃から造られ出し、機能していくのかということも含めて、柳田シャコデ廃寺が最初から神宮寺として造られたのか、それとも氏寺として造られたものが神宮寺へと包摂されていったのか、その解釈によって随分と柳田シャコデ廃寺の造営事情は違ってくると考えています。

このように邑知瀉周辺の遺跡展開は、柳田シャコデ廃寺の立地以外は、出雲の状況とよく似ております。それでは出雲では神戸川周辺に想定した農業開発は、この地域ではどのあたりを中心に行われたのかということですが、はっきりと遺跡として見出しがたいのですが、私は邑知瀉南方の子浦川のあたりがどうも怪しいと考えています。子浦川を遡ったところに散田金谷古墳という6世紀末頃の北陸最大級の横穴式石室をもった全長約20mの円墳が造られています。やはりこのあたりが農業基盤の一つとして機能している。ひょっとすれば近くで寺院が見つかるのではないかと妄想しています。

(4) 愛知県・あゆち瀉周辺

続いて愛知県のあゆち瀉周辺について見ておきます。図7をご覧ください。ここはラグーンと

いうより伊勢湾に面して干潟が広がっているところですが、ここで注目していただきたいのは、熱田神宮の立地です。熱田台地が岬状に飛び出しているその先端部にあります。先ほどの出雲大社や気多大社の例にもあったように、水上交通という面からみてこのように一番よいところに神社があるということをご理解いただけたらよいかと思います。熱田神宮に隣接して6世紀初頭の全長150mの前方後円墳、断夫山古墳がありますが、尾張元興寺や愛知郡家推定地の正木町遺跡は、熱田台地の基部あたりの干潟に面した場所にあります。天白川の河口部には兜山古墳、名和廃寺、トドメキ遺跡、西大高廃寺、鳴海廃寺などの古墳や寺院があり、猿投窯製品の積み出しと関係した港津型寺院の可能性を私は考えています。

(5) 福岡・宗像周辺

続いて図8の福岡県宗像市の周辺を見ていきます。宗像と言えば世界遺産にも登録された宗像大社が著名ですがこの周辺は津屋崎丘陵を挟んで西側の勝浦潟と、東側の釣川流域にもう一つラグーンがあるという、二つのラグーンによって形成された地形です。西の勝浦潟周辺では、これも世界遺産に登録された新原・奴山古墳群を含む津屋崎古墳群、立派な金銅製の壺甕が出土した宮地嶽神社古墳などが、津屋崎丘陵西側に張りつくように広がっています。それに対して津屋崎丘陵の東側では、釣川河口部に装飾古墳の桜京古墳が造営されていますが、西側に比べて古墳が多くない。そして、釣川河口から3kmほど離れた、ちょうどラグーンに飛び出すような丘陵の端部に、宗像大社の辺津宮が造営されています。

以上のようなこのあたりの土地利用を考えると、津屋崎丘陵を挟んで、古墳中心の西側ラグーンのエリアと、古墳があまりない東側ラグーンのエリアがあり、東側に古墳が少ない理由としては、そこは神の領域、宗像大社の沖津宮から中津宮、辺津宮というように、いわばこのルートは神の通り道として、古墳の造営が忌避されたエリアではないかと私は考えます。

このようなことは私だけが妄想しているわけではなく、例えば伊勢に阿坂山という山があるのですが、神の宿る山として山の周辺では古墳造営が忌避されたのではと、三重県の穂積裕昌さんが指摘されています。

ちなみに宗像郡内に寺院がないわけではなく、南方の山間部に8世紀前半から半ばぐらいの神興廃寺という寺院が一つ確認されています。このあたりは宗像の中心エリアとは関係ないと思われ、宗像大社の周辺はお寺が入っていないエリアということになるかと思えます。

(6) 鳥取・淀江潟周辺

最後に鳥取県の淀江潟周辺を見ていきます。図9をご覧ください。ここもやはり顕著なラグーン地形です。淀江潟東岸には6世紀半ばから後半にかけての古墳の集中地帯があり、規模の大きい特徴的な前方後円墳が造営されています。全長52mの岩屋古墳や、石馬が発見された全長61mの石馬谷古墳などもあります。これらの前方後円墳は明らかにラグーンに面したところにあり、海上交通と密接な関係がある古墳群と評価してよいと思います。また、ラグーンに面する周辺丘陵部にも多くの群集墳が造営されています。そのような一連の流れの中で、彩色壁画が出土するようなランクの高い寺院である上淀廃寺が7世紀後半に造営されていきます。ただ、立地としては向山4号古墳や岩屋古墳がある台地がちょうど屏風のようになって、淀江潟から上淀廃寺を直接、見渡せないといった立地になっています。折角、三重塔、五重塔を造るのであれば、それを見せつけなければ何の意味もないのではないかと思います。むしろ奥まったところに、あま

り人に見られないようにひっそりと寺院が建っている。ひっそりと建っているのに塔を3基も造ったりしているので、訳がわからない寺院です。ただ、立地的には古墳に囲まれているところで、やはりこの古墳の造営者と密接に関連をするのでは。多くの人に見せつけるというより、これらの古墳の造営者、または古墳自体を顕彰する意味で、私は聖域型と分類していますが、それこそ三舟先生のおっしゃるような祖先祭祀と関連してくる可能性が高い寺院ではないかと考えています。

5. おわりに—古代海上交通と古代寺院—

以上、ラグーン地形の中で寺院がどのような場所を選んで展開していくのかについて、興道寺廃寺周辺を含め、いくつかの事例を見てきました。結論として、本論で検討した多くのラグーン地形において、ラグーン自体を強く意識し、ラグーンから見渡せる、ラグーンを見降ろすといった形で造営された選地の寺院は、興道寺廃寺を含めてあまりないのではないかと。むしろラグーンがあろうが、なかろうが、多くの寺院は他の地域とほぼ同様、立地の面からは高燥地の水田開発や、古墳をめぐる祖先崇拜などとの関係性の元で寺院が造営されていると判断できるのではないかとということです。

ではそのような地域社会における土地利用の変化がいつ頃始まったかということですが、少なくとも今回見てきた地域の中では6世紀後半から7世紀頃、つまりお寺が造られる少し前の古墳時代後期から終末期にその萌芽が見出せるのではないかと。ラグーン近辺で古墳を造っていた時代から、内陸部の開発にシフトしていった中で、地域中心の移動が確認できるのではないかとということです。

その一方で、宗像あたりでは7世紀に入ってもラグーン沿いに古墳が連綿と造られていくわけです。王権と結んだ宗像氏のような大勢力はラグーン沿いに古墳を造り続けて、海洋民として遠洋航海も含めた水運を担い続ける。しかし、それ以外の中小の海洋民はそうではなく、沿岸交易を生業としつつも、他地域の豪族と同様、高燥地の新規開拓などいわば律令制下での基盤生産でもある農業生産へとシフトしていくのではないかと思います。王権が海上交通を強く把握していく流れと、このような地域社会の変動はある程度リンクしていると私は考えています。開発の象徴と寺田確保のための寺院造営はラグーン沿いでも、そうでなくとも同じような造営事情であったと思います。興道寺廃寺もまたしかりと考えています。

その一方で、今回は神社の立地を少し見ましたが、出雲大社でも気多大社でも熱田神宮でも、やはりその立地は海上交通の要衝であり続け、しかも宗像郡や出雲郡の中心には寺院自体が展開していかないといった状況もあります。このような状況から、海上交通と寺院との関係についてさらに想定を加えていくなれば、海上交通・航海はいわば「神の領域」として認識されており、仏教とは結び付かなかつた、結び付きにくい属性だったのでないかと私は妄想するところです。

今回は立地を軸に憶測を重ねる議論をしましたが、また多くの方々のご批判をいただければと思っています。以上で私の報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

興道寺廃寺と三方郡家

福井大学 教育学部 教授

門井直哉

福井大学の門井です。よろしくお願ひします。興道寺廃寺について、随分以前から発掘調査に関する委員会に加えていただき、度々この歴史フォーラムでもお話しさせていただいていますが、今回、2年ぶりに登壇することになりました。今回は「復元！興道寺廃寺をとりまく景色」というテーマで、サブタイトルには「古代寺院の景観を考える」とあります。このお題をいただいてからどのようなお話をしようか、いろいろと悩んでいましたが、興道寺廃寺そのものというより、その周辺の景観を取り上げてみようと思っています。三方郡内における興道寺廃寺の意味を考える上でも、その周辺にどのような景観を想定できるのかということ、今回は特に三方郡内では所在のよくわかっていない郡家、郡の役所の問題について取り上げてみようと思っています。



1. 大化改新と天下立評

まず初めに、三方郡の成り立ちについて少しご紹介しようと思います。古代の地方行政単位としてコオリがあります。コオリは「郡」と書きますが、これは大宝令以降の表記であり、それ以前は「評」という字があてられていました。この評という行政単位が、いつ頃できたのかと言えば、大化2年（646）正月の詔の中で、評を創設することがうたわれています。なお、『日本書紀』は奈良時代に入って成立しますので、当時の郡という用字でもって説明していますが、これは本来、評のことです。【史料1】、「およそ郡は40里をもって大郡とせよ。30里より以下4里より以上を中郡とし、3里を小郡とせよ。」という記述が見えます。これによれば郡には大、中、小のランクがあり、郡の中に含まれる里の数で異なるということですね。そして郡の役人、この中では郡司という言葉で説明されていますが、郡司には国造をとって大領、小領とするということが記されています。

【史料1】『日本書紀』大化2年春正月甲子朔条

其の一に曰はく、昔在の天皇等の立てたまへる子代の民・処処の屯倉、及び、別には臣・連・伴造・国造・村首の所有る部曲の民・処処の田莊を罷めよ。（中略）其の二に曰はく、（中略）凡そ郡は四十里を以て大郡とせよ。三十里より以下、四里より以上を中郡とし、三里を小郡とせよ。其の郡司には、並に国造の性識清廉くして、時の務に堪ふる者を取りて、大領・少領とし、強く幹しく聡敏くして、書算に工なる者を、主政・主帳とせよ。

【史料2】『日本書紀』大化2年秋8月庚申朔癸酉条

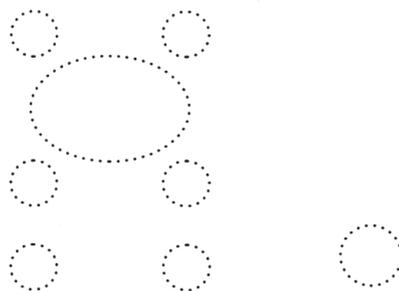
国国の境界を觀て、或いは書にしるし或いは図をかきて、持ち来りて、示せ奉れ。国県の名は、来む時に將に定めむ。

もっともこれは改新の詔ということですが、この段階では新しい施政方針を示したということにすぎません。詔が出たことによってすぐさま翌日から評が成立するわけではなく、ここからまたしばらく時間がかかるわけです。この後、評が成立するのがいつかと言えば、『皇太神宮儀式帳』という史料の中に「難波朝天下立評」という文言が見え、孝徳天皇の時代、大化5年(649)に評ができたということが記されています。また、『常陸国風土記』にも香島郡の成立が大化5年であったと記されています。このことから、いわゆる神郡であった伊勢国度会郡や常陸国香島郡の成立が大化5年であることはわかります。ただし、この評の成立を一般の評にまで広げて、全面的に大化5年に成立したのか、あるいは他の一般的な評は遅れて成立していったのかという点については、見解の分かれるところです。

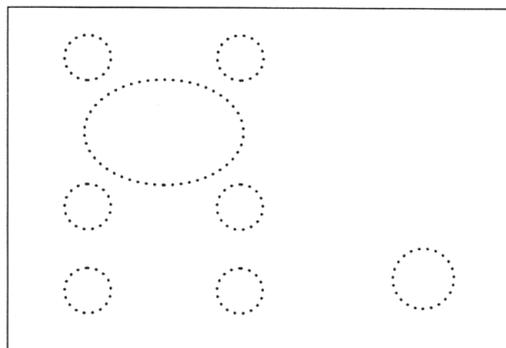
私自身は、大化5年の全面立評の考えに立っています。【史料2】、『日本書紀』大化2年8月の記事には国々の境界を見て、あるいは書に記し、あるいは図に書いて持来たりて示し奉れとあり、国県の名はその時に定めると記されていますが、私はこの時に各地の国造が統治すべきクニの範囲が画定されたのではないかと考えています。

大化前代には各地に国造があり、従来の研究ではそのような国造が領域支配していたというように説明されることが多いのですが、私は疑問をもっています。国造が大化前代に、後の郡、あるいは令制国の範囲に相当するような空間的な範囲、地理的な範囲を一円的に支配していたのかと言えば、決してそのような状況にはなかったでしょう。

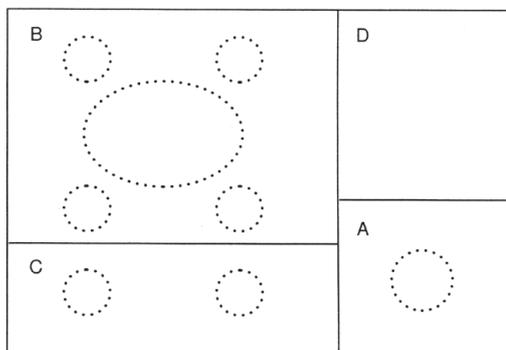
大化前代のそのような状況は、図1のように模式図で表すと、各地に国造と呼ばれるような有力豪族もいれば、それ以外の中小の豪族もいて、それぞれが独自の支配地域を有していたものと思われます。あるいは有力豪族の支配地域が飛び地状にあるケースも当然あると思います。そしてこのような状況を廃して、一定の地理的な範囲を役人が支配する、統治するシステムを確立したということ、これこそが評の創設の一番大きな意義ではないかと考えているわけです。国々の境界を見て、記録せよというのは、まさに将来的に評の役人になっていく国造が統治すべき地理的な範囲を画定するということと私は



I. 大化前代



II. 大化2年(646)「国国境界」の画定～大化5年(649)評制施行



III. 評領域の分割・再編

※破線は豪族支配領域、実線は評の領域を示す。

図1 評領域の編成過程模式図

理解しています。その上で、いよいよ評がつくられたのです。

しかし、この段階の評の規模にはばらつきがありました。空間的にあまりにも広過ぎる評も生まれました。そのようなものを是正するために、大化5年の天下立評の後には評の再編が行われます。『常陸国風土記』によれば、白雉4年(653)以降、このような広大な評を整理するということが起こってきます。

その一方で、評の役人に任じられなかった国造以外の有力豪族が評の役人として登用されることを望むという事情もありました。この二つが相まって評の分割、第一段階で成立した評の分割が起こってくるわけです。評の分割・再編の結果、A：領域内に特定の有力豪族が存在する評、B：領域内に大きな勢力をもつ豪族と複数の中小豪族が存在する評、C：領域内に勢力の拮抗する複数の豪族が存在する評、D：領域内に有力豪族の存在がうかがえない評と、さまざまなタイプの評が生まれます。

このように評を4タイプに分けましたが、評の成立当初、大化5年の天下立評時には、B型を基本として評が成立し、その後の分割によって、A型やC型、D型のようなものが派生していったのではないかと考えています。

それで、今回取り上げる三方評はどのように考えられるのかということですが、若狭地方では、まず4世紀終わりから6世紀にかけて北川流域に脇袋古墳群や天徳寺古墳群、日笠古墳群などの前方後円墳が造られるわけですが、これらの古墳については若狭国造、膳氏との関連性が想定されています。若狭国造の基盤は北川流域にあったと考えられますが、一方で耳川流域には、これよりも少し遅れて5世紀終わりから6世紀初頭にかけて獅子塚古墳が造営されます。この獅子塚古墳を造営した勢力の末裔が耳別氏ではないかと言われていています。

このような古墳の動向から三方評の成り立ちを考えるに、三方の地域は大化5年の時点では若狭国造が評のトップとして治める小丹生評の一部に含まれていたのではないかと。そして、そこから分離するような形で後に生まれたのが、この三方評であろうと考えています。

木簡では、飛鳥京跡から「三形評三形五十戸」と記した木簡が出土しています。この「五十戸」は後に「里」へと表記が変わっていくのですが、「五十戸」という表記が見られるのが、天武10年、681年頃までということです。ということは、三方評も天武10年頃までには成立していたことになります。

なお、平安時代の『和名類聚抄』によれば、三方郡には三方郷、能登郷、弥美郷がありました。他に駅家郷、余戸郷がありますが、この二つの郷は特殊な郷で、一般的な郷としては三つの郷がありました。ただし、竹田郷も存在していたことが木簡でわかっています。和名抄の段階までに郷の再編があったか、消滅したようで、竹田郷の所在地はわかりません。

弥美郷は、今、我々がいる耳川流域にあります。三方郷は三方湖の南の端のあたり、そして鮭



図2 三方郡の主要部 (縮尺 1/150,000)

川を遡ったあたりに能登郷が比定されています。式内弥美神社に祀られているのが耳別氏の祖とされる室毘古王、そして鱒川流域の閼見神社に祀られているのが、その室毘古王の母の大閼見戸賣です。この状況から考えると、この三方郡、三方評の領域は、どちらも耳別氏とある程度関わりがある地域であった可能性があります。だとすれば、先ほどの評の分類ではA型のタイプに近いと考えています。

2. 仏教の普及

三方地域に寺院が造られたのは7世紀後半のことですが、7世紀は寺院数が激増した時代でした。史料によれば、推古32年(624)が46寺であったものが、7世紀終わり頃の持統6年(692)の段階では545寺にまで増えています。実に10倍以上もの寺院数の増加がみられました。寺院がこれだけ増えた背景には国家による造寺の奨励があり、例えば大化元年(645)には「凡そ天皇より伴造に至るまで造る所の寺、造ること能はずは、朕皆助け作らむ」(『日本書紀』大化元年8月癸卯条)、あるいは天武14年(685)には「諸国家毎に仏舎を作りて、乃ち仏像及び経を置きて、礼拝供養せよ」というようなことが命じられています(『日本書紀』天武14年3月壬申条)。このような奨励策もあり寺院が増えていった。その流れの中で、この興道寺廃寺も出現したことになります。

3. 寺院と郡家の立地

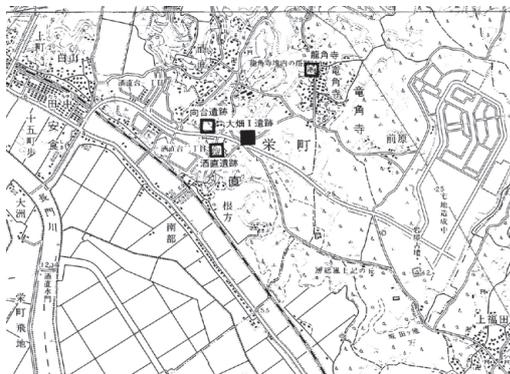
古代寺院の立地について、三舟隆之先生はⅠ類からⅢ類までの類型を示されています。Ⅰ類は寺院周辺に有力な古墳が存在しているタイプで、その事例として挙げられているのが下総国埴生郡の龍角寺廃寺です。龍角寺廃寺のすぐ近くには埴生郡衙推定地とされる大畑Ⅰ遺跡があります。ちなみに周辺には古墳群もあり、在地の有力豪族の基盤のあるところに寺院と郡衙・郡家が設けられたケースかと思えます。Ⅱ類は、寺院周辺に有力ではない中小の古墳群が存在しているケースで、この事例として挙げられているのが常陸国新治郡のケースです。決してその地域の最大規模というわけではないのですが、そのようなところに新治廃寺が立地しています。そしてⅢ類は、寺院周辺に古墳群が見られないケースで、下野国那須郡の浄法寺廃寺などがこの類型に当てはまります。

では、興道寺廃寺はどのように考えられるのかということですが、この周辺では獅子塚古墳が6世紀に造営され、7世紀前葉にかけては興道寺古墳群も造営されています。有力豪族がこのあたりを基盤にしていたことは、まず確実ですので、三舟先生の分類で言えばⅠ類に相当するかと考えられます。

一方、山中敏史氏による郡家、郡衙の立地類型もあります。山中氏は郡家が有力豪族の基盤とどのような関係があるのかということに注目して、古墳などとの距離から3タイプに分類されました。一つは本拠地型郡衙遺跡A類、これは相対的に規模の大きな古墳が集中する地区に郡衙が立地しているケースで、先ほどご紹介した下総国埴生郡衙と推定される大畑Ⅰ遺跡がこれに該当します。本拠地型郡衙遺跡B類は郡内の主要古墳や集落跡が集中する複数地区の一つに立地するケースです。事例として紹介されているのが美作国久米郡衙とされる宮尾遺跡で、久米郡内にいくつかある古墳集中地区の一つにあるということです。ちなみにすぐ隣には久米廃寺という白鳳寺院もセットで存在しています。そして非本拠地型郡衙遺跡とされるのが主要古墳や集落跡の集中地区から離れて立地しているというケースです。これは先ほどの常陸国の新治郡衙、下野国那

須郡の梅曾遺跡などが非本拠地型郡衙と位置づけられています（図3）。

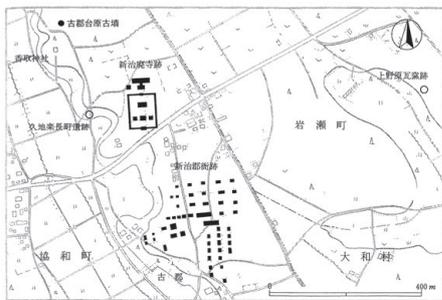
さて、先ほどご紹介したいくつかの事例の中には、寺院と郡家が近接しているというケースがありました。これらを寺院近接型と呼ぶとすれば、下総国埴生郡、常陸国新治郡、下野国那須郡、美作国久米郡などが寺院と郡家がセットと言えそうな近距離に立地するケースということになります。一方、必ずしも郡家は寺院を伴っているわけではない、いわば非寺院近接型というべきものもあります。『出雲国風土記』には出雲国にあった寺院、新造院について郡家からの方位と距離が記されていますが（表1）、必ずしも郡家に近接する形で寺院があるわけでもない。例えば楯縫郡の新造院は郡家の西に6里以上離れた位置にある。出雲郡の場合も郡家の南に13里以上ということになっていますので、結構距離があります。



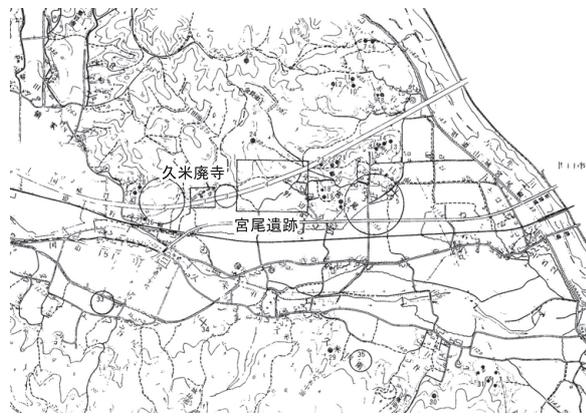
下総国埴生郡の寺院と郡家の立地(縮尺1/50,000)



下野国那須郡の寺院と郡家の立地(縮尺1/50,000)



常陸国新治郡の寺院と郡家の立地(縮尺1/2,000)



美作国久米郡の寺院と郡家の立地(縮尺1/25,000)

図3 寺院と郡衙の立地

郡	郷	寺名	郡家からの方位・距離	建立者	備考
意宇郡	舍人郷	教皇寺	正東25里120歩	教皇僧	散位大初位下 上腹首押猪の祖父
	山代郷	新造院	西北4里200歩	日置君目烈	出雲神戸 日置君猪麻呂の祖
	山代郷	新造院	西北2里	飯石郡少領 出雲臣弟山	
楯縫郡	山国郷	新造院	東南31里120歩	山国郷人 日置部根緒	
	沼田郷	新造院	正西6里160歩	大領 出雲臣太田	
出雲郡	河内郷	新造院	正南13里100歩	旧大領 日置臣布彌	今大領 佐底磨の祖父
神門郡	朝山郷	新造院	正東2里60歩	神門臣等	
	古志郷	新造院	東南1里	刑部臣等	
大原郡	斐伊郷	新造院	正南1里	大領 勝部臣虫麻呂	
	屋裏郷	新造院	東北11里120歩	前少領 額田部押嶋	今少領 伊去美の従父兄
	斐伊郷	新造院	東北1里	斐伊郷人 樋伊支知麻呂	

表1 『出雲国風土記』にみえる寺院

先ほどご紹介した出雲国大原郡の郡家の移動であれば、元々郡家があった屋裏郷のあたりより、むしろ斐伊郷の方が斐伊川の水路も利用でき、郡内各地にも行きやすいというアクセスのよさも関係していた可能性が考えられます。常陸国の茨城郡の場合も下野から常陸に入る古くからの幹線交通路に沿う「茨城里」に初期郡家がありました。それが後に下総から常陸に入る東海道駅路や香島社に向かう駅路が整備されるに及んで、新たな交通の要衝となる「茨城郷」に郡家が移転することになったのではないのでしょうか。

郡家の場合、交通の便が重視されるという側面があるので、必ずしも本拠地型の立地が適切とは限りません。より良い立地を求めての移転も起こりうるわけです。



図5 常陸国の交通路

4. 三方郡家の所在地

以上を踏まえた上で、三方郡家の所在地について、私の考えをお話ししようと思います。現在、三方郡家の候補地と考えられているところは、若狭町の三方周辺です(図6)。城縄手遺跡からは「郡厨」「郡」「三方」などと書かれた墨書土器が出土しています。これらは8世紀終わり頃の須恵器です。また小字地名として「郡神」「館藪」「館ノ下」「市港」といった地名も見られます。この三方周辺は三方郡家の所在地として可能性の高いところです。

一方で美浜町の耳川流域も、やはりこの地域の有力古墳である獅子塚古墳があり、在地の有力豪族が建てた興道寺廃寺があるということで、郡家が置かれていた可能性があります。先ほどの郡家の移転の例も踏まえれば、当初の郡家は興道寺廃寺周辺にあり、後に三方へ移転したという流れを想定できるかもしれません。

ところで、北陸道駅路は美浜町河原市や郷市を通る丹後街道、ないしJR小浜線の付近に推定されています。しかし、これらの推定ルートは興道寺廃寺の背面を横切ることになります。このことから私は平成22年の歴史フォーラムで興道寺廃寺の正面、すなわち南方にこの地域の主要道が通っていた可能性を指摘しました(図7)。三舟先生のご発表の中でも、南を向くことの意味についてのお話がありましたが、これが駅路であったかどうかはともかくローカルな道として興

道寺廃寺の南方を東西に進んでいく古道があったのではないかと考えています。駅路は大化改新以降、整備されていきますが、少なくとも南側の道はそれよりも古い段階から使われていたと思われる。おそらく興道寺廃寺の立地にも影響したことでしょう。

さて、三方郡の初期郡家をはたして興道寺廃寺周辺に想定しうるのかどうか。この問題を地名の観点からもう少し検討してみましよう。和名抄にみえる全国の592郡のうち、郡名と同じ郷名をもつ郡が239郡あります。239郡は郡名と同じ名称をもった郷が存在しているのですね。これを郡名郷と呼ぶことにします。郡名郷は郡家の所在地とみなされることが多いのですが、郡名郷とは別に郡家郷が存在するケースもあります。美濃国の厚見郡・可児郡、淡路国津名郡がこれに

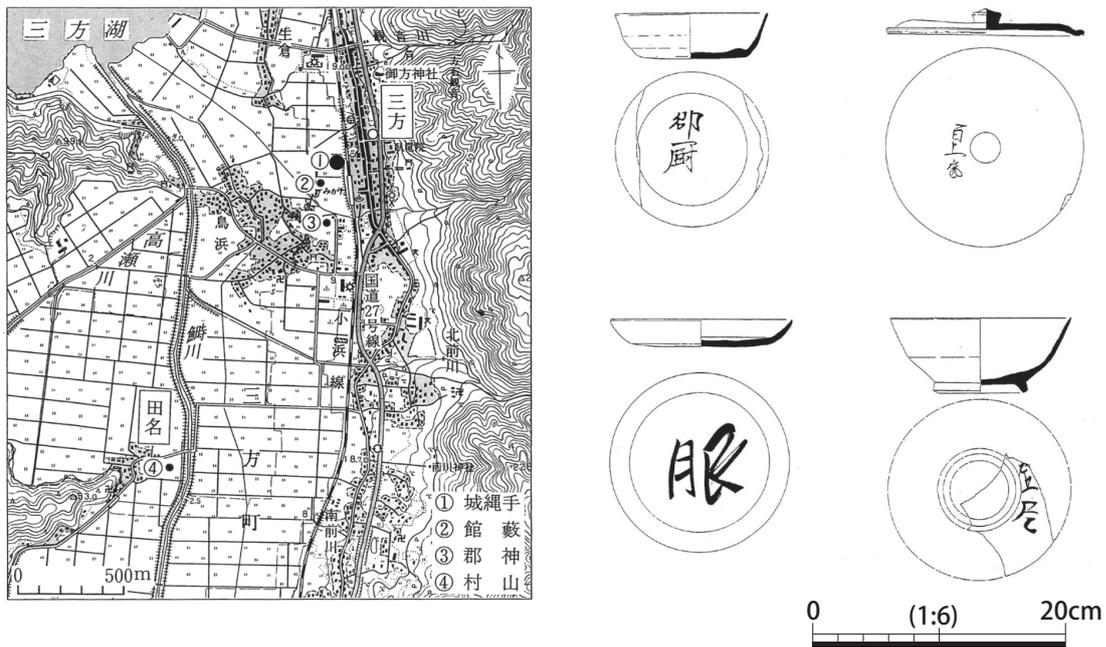


図6 城縄手遺跡位置図・城縄手遺跡出土墨書須恵器実測図

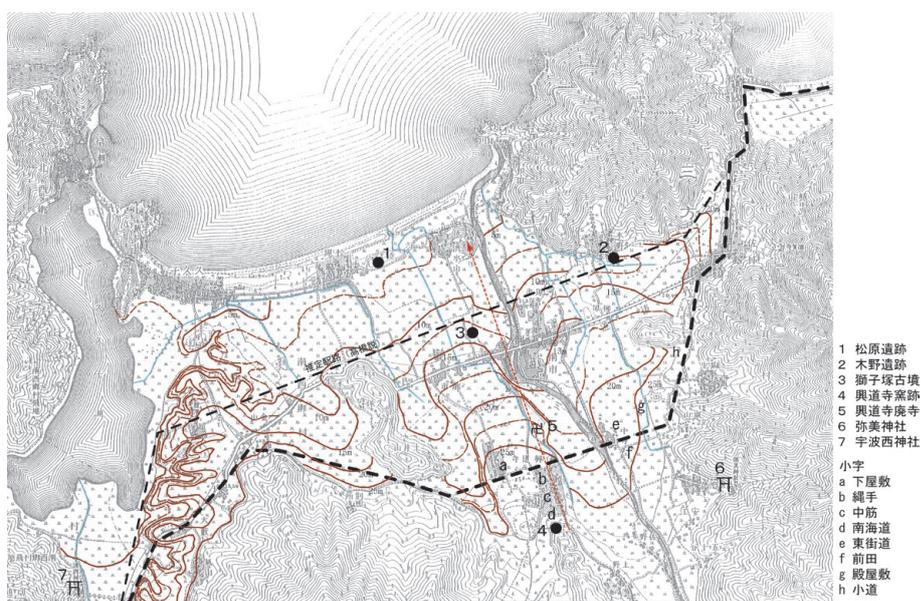


図7 耳川流域周辺の古道推定図

該当します。また、中には郡名郷に郡家が存在していないケースもあります。これは出雲国飯石郡で、『出雲国風土記』によれば飯石郷もあるのですが、郡家は多禰郷に所在するということになっています。

そして郡名郷が他の郷に遅れて成立するケースもあります。これは出雲国大原郡です。大原郡については先ほども話しましたが、和名抄には大原郷が記載されていますが、『出雲国風土記』に大原郷はみえません。『出雲国風土記』よりもさらに時代が降った段階で大原郷が現れるわけですね。大原郡については、実のところ郡家の3遷説があり、最初に屋裏郷にあったのが、斐伊郷に移り、また屋裏郷に戻ったという推定もあります。となれば大原郷の名は当地に郡家が再置された後、生じた地名ということになりましょう。

では、三方郡の場合、どうなのか。三方郡にも三方郷が存在していますが、先ほどご紹介した飛鳥京跡出土木簡には、既に「三形評三形五十戸」という記載がありました。ということは、郷レベルの「三方」地名の発生は天武10年以前まで遡るということになります。ちなみに郡（評）名の「三方（ミカタ）」がそもそも潟、すなわちラグーンに由来するものだとすれば、その名は久々子湖から生じた可能性が最も高いように思われます。そして三方郷が久々子湖畔に位置していないという地理的事実は、三方郷は郡（評）の行政拠点が置かれることによってその名を負うようになったことを物語っているようにも思われます。

このように考えますと、先ほど私は興道寺廃寺周辺から三方湖畔への郡家の移動の可能性について言及しましたが、評や郡の行政拠点は一貫して三方郷周辺にあった可能性も否定できません。やや歯切れの悪い結論ではありますが、今のところの私の考えということで紹介させていただきました。

お時間です。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

座談

復元！興道寺廃寺をとりまく景色 ～古代寺院の景観を考える～

東京医療保健大学 医療保健学部 教授
福井大学 教育学部 教授
名古屋大学大学院 人文学研究科 准教授
東京大学大学院 工学系研究科 准教授
進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員

三舟隆之
門井直哉
梶原義実
海野 聡
松葉竜司

【松葉】歴史フォーラム最後のプログラムです。今回は「復元！興道寺廃寺をとりまく景色」というテーマで、特に古代寺院をめぐる景観について、いくつかの論点に沿って座談を進めたいと思います。会場の皆さんからもいろいろとご質問もいただいていますので、これも随時、取り上げる形で進めていきたいと思っています。



1. 興道寺廃寺の伽藍景観を考える

【松葉】興道寺廃寺をとりまく景色の中で、最初に一番近いところから取り上げます。今日海野さんのお話の中で、金堂の平面復元に関する重要なご指摘、問題提起がありました。身舎の桁行の柱間を3mでとると、無理のない平面復元になるという理解でよいと思いますが、このことについて、文献、考古学の立場から三舟先生、梶原先生、ご意見はありますか。

【三舟】螺髪の大さきから考えて丈六仏で、坐像として8尺、高さが2m40cmぐらいですので大型の仏像で、柱の位置がわかりませんが、柱間によって建物の高さが決まるということになると、8尺の坐像としても、今、想定されている柱間では少し小さいかなということをお話していましたが、私は建築については全く詳しくないですが、螺髪の大さきから考えて丈六の仏像が安置されていたであろうと予想しています。海野さん、どうですかね。

【海野】今の三舟さんのお話にあつたように、丈六の座像であつたとして2.4mの8尺程度の仏像がきっちり納まるとなると、8尺の大さきでは柱に隠れてしまうわけですね。金堂も一回りほど大きいとすれば、基本的に柱間が広ければ高さも大きくなって、建物全体としても高くなるという関係性があります。丈六の半分、8尺の仏像が安置されていると想定すれば、発掘調査報告書にある現在の復元案では金堂の建物がやや小さいという気がします。私がお話ししたように金堂がもう少し大きかったとすれば、螺髪、8尺の仏像との整合性がとれるのではないかと個人的には考えています。

【梶原】他の寺院の柱間をきちんと把握しているわけではないので、この場では申し上げようがないのですが、やはり古代の屋根瓦を研究している身として海野先生の軒の出のお話は腑に落ちました。

【松葉】個人的な興味からおうかがいます。今回、興道寺廃寺の金堂については海野さんが今

回、検討されたかと思うのですが、これは前のご職場の奈良文化財研究所でそのような議論などはあったのでしょうか。

【海野】基本的に柱の配置に関しては私が個人的に検討したものですので、もちろん奈良文化財研究所のお墨つきというわけではありません（笑）。

【松葉】以前、興道寺廃寺の塔に関してもいろいろとご指摘を受けているので、今後、改めていろいろと考えていかなければいけないことも多いのですが、今回、海野さんに金堂について問題提起していただいたのは、将来的な遺跡の復元整備を考える上でも参考になるかと思います。

ちょうど今、仏像のお話しができましたが、会場からご質問をいただいています。「野々市市の末松廃寺跡から線刻の弥勒天女が発見されたということが最近、報道発表されましたが、興道寺廃寺から出土する可能性は今後あるのでしょうか。」ということです。これは陶製の塔とも考えられる土製品で天女さんが線刻されていたという新聞報道を私も拝見しましたが、これは余談のようなお話しかと思いますので、お気軽にお答えいただければと思います。いかがでしょうか。

【海野】建築史の私が答えるのもどうかと思いますが、一般的に小建築、あるいは瓦塔と言われるものは、一つの機能として塔の代用品、代替品であると言われることが多いので、興道寺廃寺の場合は立派な塔があるので、その点を鑑みるとあえてこのようなものを作る必要はないか、可能性は少し低いというのが私の個人的な印象です。ただ、瓦塔でなく、木造の小塔は模式的な役割で造られたり、あるいは建築技術を写すために使ったという可能性もあるので、そのようなものが出土する可能性はもちろん否定しません。

【三舟】やはり天女は古代の人々が好きな像の一つですね。法隆寺の飛天の像もありますが、この界限では丹後の峰山町には天女伝説が『丹後国風土記』に残っています。このような物語が残っていることからして、古代の人は天女が好きです。私も今、お話しを聞いたばかりで、実物も見えていないし、年代もわかりませんが、近江の日置前廃寺でも壁画が見つかっていますので、上淀廃寺にしても残っていた壁画は本当にわずかですが、おそらくお寺に壁画がきちんと残っていれば、その中に天女像がある可能性はかなり高い。もし興道寺廃寺でも見つければ、またこちらに来る楽しみが増えると思います。

【梶原】余談の余談になって恐縮ですが、私は毎年、学生を連れて一週間ほど野々市市で発掘調査実習でお世話になっているのですが、今年はちょうど末松廃寺跡の発掘調査に参加している時に出土しました。現地で直接、弥勒天女が掘り上げられたところを見るという希少な経験をして、今年の学生はついていると思いつつ私も感動した記憶があります。

そんなことはどうでもよいのですが、このようなものが出土する可能性ですが、まず興道寺廃寺では瓦塔が出土していませんよね。瓦塔に描かれた弥勒天女ということであれば、なかなか難しいと思います。ただ、あのようなお絵描きをした、線刻をしたものが出土するかということであれば、戯画瓦という瓦に線刻を、いたずら書きをしたような瓦は全国で結構出土しています。例えば佐渡国分寺でも役人の姿を描いた瓦が出土しています。野々市市でのことがあったので、結構調べたのですが、他にも人物を描いた瓦はそこそこ出土しています。そのよ



写真1 末松廃寺跡出土・
女子像が線刻された土製品

うな意味で言えば、興道寺廃寺でも出土する可能性はあるのではないかと思います。

【門井】天女について、私からお話しできることは今のところありません。先ほど控室でも少し話題となっていたのですが、螺髪が出土しているので金堂に祀られたのは丈六仏であろうということでした。一方で今日の三舟先生のご発表に、地方寺院の仏像では観音菩薩が多いというお話もありました。ちなみに興道寺廃寺の地籍の小字は観音です。金堂に祀られる像は如来像に限らず、多様な仏像などが祀られていたのであれば、天女像もあり得るのではないかと、今、皆さんのコメントをお聞きして思いましたが、三舟さん、いかがでしょうか。

【三舟】螺髪から丈六仏と考えられるので、本尊は丈六仏であるという可能性はなくならないとすれば、島根県の来美廃寺でも出ましたが、本尊があり、脇侍として観音が並ぶ場合もあるので、観音が存在する可能性はあるのではないかと思います。

【松葉】余談にお付き合いいただき、ありがとうございました。

三舟さんからの振りにもあったのですが、実際、会場からも法起寺式伽藍配置が多い理由をぜひ教えてくださいというご質問もいただいています。三舟さんのお話しの中で、法起寺式が多い理由があるのではないかと問題提起されていましたが、各先生方のご意見をぜひお聞かせいただきたいと思います。

【海野】建築史の立場から言えば、四天王寺式のように金堂、塔が中軸線に乗るというのは対称性、軸線性の強い伽藍配置ですが、法起寺式、あるいは法隆寺式は金堂と塔が併置される形式です。基本的に元来の研究では法起寺式と法隆寺式は分けて考えられてきて、それはもちろん東と西のどちらに金堂が、どちらに塔があるのかということ自体に仏教教義的に大きな意味がある可能性がもちろんあるのですが、こと建物を外観から見るという点に関して言えば、並ぶのではなく、両方が中央から見えるという意味で法起寺式と法隆寺式は、もちろん中央の奈良では形式として違う系統がある可能性はあるのですが、それが地方に来た時、必ずしも理解した上で両方を分けて使っているのか、それとも金堂と塔の両者が併置されるということに意味があるのかというところは、また改めて考えていく必要があります。一概に法起寺式の方が多いというよりは、いったん、併置式というものも考えてよいのではないかとというのが個人的な見解です。

【梶原】はっきりと記憶していないのですが、たしか石田茂作先生のご論考にあったかと思うのですが、仏教において西が重視され、西に塔を置くか、金堂を置くかということで、塔の重要性がより高い法隆寺式と、金堂の重要性がより高い法起寺式という見方がされていたように思います。それが正しいかどうかかわからないのですが、例えば三舟先生が取り上げられた川原寺式の伽藍配置も西金堂が東面していますが、やはりあれは東金堂ではなく西金堂で、逆になることはありません。そのような意味で、7世紀第3四半期以降に流行していく川原寺式の垂式として法起寺式が展開していくという見解もありなのではないかと個人的には思っています。

【門井】伽藍配置でなぜ法起寺式が多いのか、なかなか答えを見つけるのは難しいと思っています。地方寺院では法起寺式が多いということですが、伽藍配置のフォーマットのようなものがあり、それが中央から伝わってくるというプロセスを想定できるとすれば、やはりどのような人が地方に仏教を伝えていったのかということを考える必要もあるのではないかと思います。

【三舟】4人で昼御飯を食べながら、なぜ法起寺式が多いのかということをお話ししていたのですが、私が問題提起した経緯は、確かに地方寺院では法起寺式が多く、例えば瓦の文様などもそうですが、畿内から地方にどのように技術が伝わっていくのかということに実は関心があるので、すね。仏師なのか、僧侶なのかわかりませんが、法隆寺式、法起寺式を理解した人がやはり伽藍

配置の設計図をつくり、地方に伝えていったそのルートがわかるのではないかとということで、いろいろと調べてデータを集めたのですが、結果からすればわからないということで、今、悩んでいるわけです。

今日、皆さんの報告をお聞きしながら、本当に思いつきの感想ですが、相模国分寺は法隆寺式伽藍配置をとります。法隆寺式伽藍配置は7世紀の伽藍配置で、国分寺は8世紀の寺院ですので、これはなぜなのかという議論がされていて、この地方の豪族の寺院を建て直したのではないかとということも以前は言われていたのですが、最近の研究では相模川から一番よく見えるのが塔で、だから川から見える景観を重視して塔を置いたから、結果として法隆寺式伽藍配置になったということが現在、相模国分寺の理解になりつつあります。

梶原さん、門井さんにお聞きしたいのですが、景観から見てどうでしょうか。川から近い方が塔だから法隆寺式とすれば、今日の門井さんのお話しをお聞きして、耳川に近い方に塔があるから興道寺廃寺は法起寺式になったのかなと思いました。門井さん、どうでしょうかって、これは今、私が司会になっていますよね。松葉さん、ごめんなさい。何か感想があればお願いします。

【門井】そうですね。今、答えがすぐに出てこないのですが、確かに興道寺廃寺の立地は四方からの見通しがよい。中でも、やはり川の向こうからもよく見えるということがあるので、伽藍配置にも影響した可能性もあるのかも知れません。

【梶原】確かに川から近い方に塔がある寺院も結構あるかと思います。これは塔と金堂、どちらを重視して、どちらを先に建てたのかということもあるかと思います。国分寺の場合、塔が先に建った例、金堂が先に建った例、両方がありますが、比較的早い段階の国分寺は聖武天皇の七重塔を国華とせよという詔に沿って、塔から先に建てるということがあったかと思います。相模国分寺も先に塔ができたのですね。塔が一番よいところに建つことはあるのではないかと思います。

塔を最も重視して一番目立つところに建てるという見方のある一方で、東大寺は2基ですが、国分寺は七重塔が1基しかないのです。東か西、どちらかに振って建てるしかありません。国分寺の塔を東に建てるか、西に建てるかという傾向性があるのか、実は少し調べたことがあって、国分寺の場合、官道沿い、陸路沿いに建てられることが多いのですが、その時にどちらかと言えば奥の方に建てられることが多いという気がしています。

要は、塔だけが目立つのではなく、金堂と並べた景観として塔がきれいに見えるかを考えているという印象をもっています。相模国分寺をどこから眺めるのかということにも関連してきますが、相模国分寺の塔が目立つのは、逆に国分寺として異質ではないかという気もします。

【松葉】ありがとうございました。周辺景観については、また後ほどゆっくり取り上げたいと思います。

2. 興道寺廃寺の幢幡を考える

【松葉】ここで一つ取り上げたい話題があります。今日の海野さんのお話しでも幢幡、幢竿支柱穴のネタを仕込まれておられたと思いますが、近年、古代寺院の発掘調査では幢竿支柱穴が見つかる事例が増えています。2か月ほど前の美浜町の歴史講座でもこの話題を取り上げて、羽咋市教育委員会の中野さんと野々市市教育委員会の腰地さんにお越しいただいて、北陸の古代寺院の幢幡はどうだったのかというトークセッションをしたのですね（第2部 トークセッションを参照）。その時に末松廃寺跡も柳田シャコデ廃寺跡も塔の東側に幢幡があった、幢竿支柱穴が見つかったというお話があつて、北陸の古代寺院は塔の東側に幢幡があるのかと話題になりました。

先ほどのお話しでもないのですが、興道寺廃寺では塔が東側にあり、耳川からよく見えるということは、実はそのトークセッションでも幢幡も東側にあって、耳川の往来からよく見えたのではないかという議論もしました。今日、折角、幢幡のネタをご準備されていた海野さんに古代寺院と幢幡との関係についてコメントをいただきたいと思えます。

【海野】古代寺院の建物は景観を構成する大きな要素の一つとして重要ですが、それ以外に儀式を行う場合、あるいは常設的に使う場合、いずれの場合にしても幢幡を立てることがよくあります。興道寺廃寺の場合は塔があるので別ですが、塔を造らないところでは幢幡をおくことで塔の代わりとするような機能をもっている場合もあります。建物の正面や背面に幢幡を立ててお堂全体を荘厳する、あるいは寺域の四隅に幢幡を立てて寺であることを示す、またよくあるのが門の前に幢幡を立て、正面を飾るような例もあります。

発掘事例としては山寺で幢幡のいろいろな例が見つかっているのですが、私が興道寺廃寺を見て少し気になったのは、講堂の北側に大きな柱穴が2基ある点です(図3-幢竿支柱穴(?)A)。柱穴が並んで出てくると講堂の背面側を荘厳するような大きな幢幡が立っていた可能性もあるのではないかと。実際に巨勢寺でもやはり講堂の背面側で幢幡を立てたのではないかという例もあり、このような例と通じるようなお堂の背面側を眺望して伽藍全体を構成するようなものがあるのではないかと考えられます。

さらに言えば、興道寺廃寺の金堂では柱位置がよくわからないということはお話ししましたが、逆に基壇外装は残っているので元々の地表面がほぼ残っているわけですね。旧地表面が残っているということは、建物がない場所を発掘しても荘嚴の痕跡がまだまだ出てくる可能性もあるのではないかとということも含めて、興道寺廃寺から古代地方寺院の荘嚴の実例がわかるのではないかと問題提起をさせていただきます。

【松葉】興道寺廃寺の講堂の北側に幢竿支柱穴を想定するというお話しですが、確認として第10次調査7トレンチで2基の柱穴が東西に並んでいる部分を指しての想定ということでよろしいでしょうか。

【海野】そうですね。第10次調査8トレンチの柱穴ももしかす

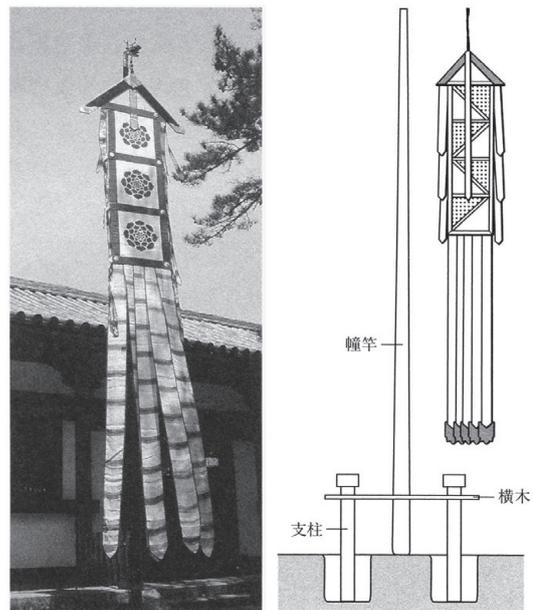


図1 幢幡

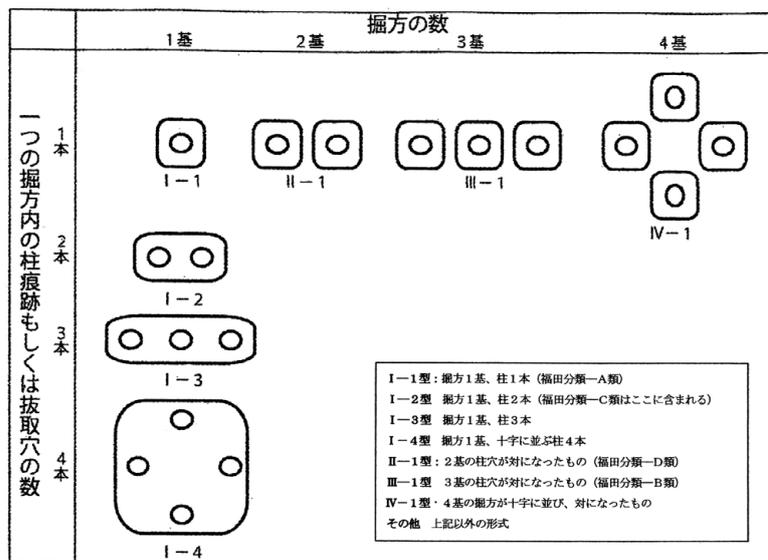


図2 幢竿に関わる遺構の類型模式図

れば寺院の中軸に載ってくるので、これもその可能性があるのではないかと思います（図3－幢竿支柱穴(?) B)、幢幡の場合、柱穴単独ではなかなかその機能を証明しにくく、ある程度面的に発掘調査して柱穴が対称的に並んでいる、あるいは何本か並んでいる、あるいは柱筋が揃っているといった条件が重なってくることで遺構として認定されるという性質をもっていますので、興道寺廃寺の場合は可能性を指摘するに留まりますが、講堂の北側の柱穴が可能性としては幢竿支柱穴の可能性はあるのではないかと思います。

【松葉】 ちなみに興道寺廃寺では塔の東側にも柱の並ぶところがあるので、2か月前の歴史講座の時は末松廃寺跡と柳田シャコデ廃寺跡の事例に私が悪のりして、塔の東側に幢幡の存在を想定してみたのですが（図3－幢竿支柱穴(?) C・D)、実際に両遺跡の発掘調査報告を聞きながら、興道寺廃寺の場合は塔の東側には幢幡はなさそうだと思います。逆に今回の海野さんのご指摘を受けて、今度は講堂の北側についても幢幡の存在を検討しないといけなと感じました。

梶原さんは末松廃寺跡の発掘調査に関わっておられますが、末松廃寺では昨年度の発掘調査で塔の東側に幢竿支柱穴が見つかったと思うのですが、ご意見はありますか。

【梶原】 すみません、この手のことは不勉強で、腰地君には他の例を見ておくといいながらサボって全然していないので、今後勉強させていただきますということでご勘弁ください。



図3 興道寺廃寺の幢竿支柱穴の可能性のある遺構（縮尺 1/500）

【松葉】文献史料から見て寺院と幢幡の関係はどうでしょうか。

【三舟】『続日本紀』靈龜2年5月庚寅条に有名な寺院併合令が出てきます。これが何かと云えば、地方寺院ですでに荒廃が進み、荒れ放題になっている。その理由の一つとして、とにかく寺院だけ造って、豪族達が一番欲しい免税となる寺院の田んぼ、寺田の確保ばかりしていると政府が批判しているのですが、その史料に寺の形として幢幡をわずかに施すという部分があります。建物、屋敷も少し造っても、海野さんがおっしゃったように幢幡を飾ればお寺として見做されているということがあります。

【門井】海野さんにお尋ねしたいのですが、先ほどのお話しでは寺域を幢幡によって示す例があるということでしたが、そのようなところに築地はないのでしょうか。

【海野】遮蔽施設があっても、その四隅の部分で区画として認定されているところでも、幢幡はその四隅の内側にある場合や外側にある場合もあります。やや記憶が曖昧ですが、区画の内側の例としては興福寺の中門の四隅に置くような事例があったと思います。

【門井】イラスト図には南側に幢幡が描かれています。松葉さんは幢幡を塔の東側に想定したけど引っ込めたということでした。興道寺廢寺の場合、東側が段丘崖になっていますが、全く東側は考えられないですか。

【海野】逆に東側に幢幡を置いて、そこを区切りとするような見せ方があった可能性も考えられるとは思いますが、常時、幢幡を置いていたのかという問題もあって、儀式をどこでしたのかということになるかと思えます。寺院の区画といっても、いわゆる金堂院の中で儀式をする場合は金堂院の四隅、入隅のところに幢幡を置くようなことも想定されるのではないかと。そうすれば儀式の区切りとしてその場所に幢幡を立てます。あるいは、金堂からの中軸線上のところに幢幡を立てることも想定されるのではないかと。

興道寺廢寺の場合、西側に金堂があるので、金堂の前面で儀式をするのか、堂内だけで行ったのか、あるいは金堂院全体を使うのか、そのようなお堂の使い方にも関わってくるのではないかと思います。

【梶原】今の門井さんの海野さんへのご質問で、私も思い出したのですが、地方の古代寺院を考える際、囲いがあるのか、ないのか、寺域を画する施設の存在の有無は結構大きいのではないかと考えています。先ほどの末松廢寺でもなかなか寺域を画する施設がよくわからないのですが、幢幡の使用法の一つとして寺域や何らかの区画を表示するという事は、ありますか、なしですか。

【海野】奈良時代の儀式はなかなかわからないということは、それこそ三舟先生がよくご存知かと思えますが、私の個人的な意見として中世以降の状況を見ると、基本的には室礼を整える、あるいは何らかの仮設的な施設を置くことで、この区画が儀式の空間であることを示しています。本来であれば境界を張り、その中を清浄に保つことが望ましいのですが、そうではなく臨時的にそのようなことをすることは、少なくとも日本においてはあったのではないかと考えています。ただ、それが東アジア的に適用できるかと言えば、おそらく中国では寺院の中の清浄を保っていないのは普通ではないということになるので、それは日本の特性かも知れないとは思っています。

【松葉】もし興道寺廢寺の講堂の北側に幢幡があったとすれば、その北方の興道寺遺跡の律令集落からも幡がよく見えたかと思えます。末松廢寺跡でも東側に末松遺跡という律令集落があるので東側からの景観を意識したのではないかという指摘もされておられますが、次は寺院をめぐる周辺景観の話題に入っていきたいと思えます。

3. 興道寺廃寺と周辺の古代景観を考える

【松葉】私は興道寺廃寺の北方に北陸道の存在を想定しているので、寺院の背後を駅路が通っているということになります。今日の三舟さんのお話しにもあったかと思いますが、山陰地方の古代寺院では寺院が南面するという中で、寺院の北側、背後を山陰道が通っているケースもあるのではないかと思います。若狭でも興道寺廃寺だけでなく、遠敷郡の太興寺廃寺もおそらくそのような立地になると考えられます。

古代寺院の場所と北陸道との関係で言えば、寺院の背後を駅路が通るという中で、例えば門井さんは以前の歴史フォーラムで興道寺廃寺の南側に駅路、北陸道が通過し、そのことに関して興道寺廃寺が南面するという議論をされておられたように記憶しています。今日の門井さんのお話しをおうかがいすると、そのあたりのトーンが柔らかいような、以前のご説を引っ込められたのかとも思ったのですが、このあたりはどうでしょうか。

【門井】今、ご紹介いただいた考えを発表したのは、もう8年ほど前になりますが、今日の発表は一応はその際の発表を元に再構成したものです。その後、いろいろと考える中で軌道修正というわけでもないのですが、確かにトーンは和らいだところもあるかと思います。ただ、8年前もお話ししたと思いますが、それが駅路かどうかは別として、興道寺廃寺の南側にも間違いなく古道、この地域のローカルな主要道が通じていたであろうという考え自体は変わっていません。そのような道がある中で、後に駅路が整備されていったという理解です。

先ほどの発表で少し触れましたが、駅路は大化改新以降に整備されていくわけで、これまでの各地での発掘調査などで駅路は直線的で、計画的な道路であった事実がわかってきています。ただし、このような道路が実際に敷設された時期については、よくわからない部分もあります。

三方郡の北陸道が、いつ頃整備されたのかという問題にも関係しますが、寺院の建設が先行し、その後に美浜町の河原市のあたり、あるいはJR小浜線が通っているあたりに直線的な駅路が整備されたというプロセスが考えられるのではないかと。そうであれば、興道寺廃寺の立地が駅路を意識していないように見えるのは当然で、少なくとも興道寺廃寺が造られた当時は南側にこの地域の主要道があったのではないかと。このように興道寺廃寺の立地と交通路を理解するのがよいのではないかと考えています。

【松葉】道が先か、寺が先かと言えば、興道寺廃寺が先に造られて、駅路として北陸道がその後に北側に敷設されたという理解かと思いますが、他の先生方のご意見はありますか。

【梶原】寺が先か、駅路が先か、なかなか難しい問題かと思うのですが、駅路に沿って寺が建てられた場合、駅路の方位に寺地の軸線が向いている事例がいくつかあったかと思いますが。近江の穴太廃寺の創建期伽藍は、該地の旧地形に沿ってかなり東に振って造営されておりまして、豊前の垂水廃寺というお寺は、隣接する西海道の方位に沿って、寺地の区画がかなり傾いていることが、発掘調査の結果からわかっております。

興道寺廃寺も創建期と再建期がありますが、基本的には再建期に方位を正南北に振り戻しています。創建期の伽藍の方向は、旧地形をある程度意識しているのではないかと思いますし、そう考えれば門井先生がおっしゃるとおりお寺の方が先でもよいのかと思いますが、この場合、北陸道は真東から真西へ通っているでしょうから、その方位には沿っていません。旧地形に振った形で興道寺廃寺があるということは、お寺が先にあった可能性は高いかと思いますが、また、北側には堅穴建物などの雑舎群が多いので、北側はあまり正面観としては美しくないのではないかと考えます。

【三舟】寺か道のどちらが先か、これはなかなか難しい議論と思いますが、私が見てきた事例では、確か斎尾廃寺では大高野遺跡という郡家の遺跡が近くにあり、想定されている山陰道はお寺の北側で、お寺は法隆寺式伽藍配置で南に向いています。郡家のある、なしは別として、ちょうど二つの川に挟まれた少し高いところにお寺を造っている雰囲気は、興道寺廃寺によく似ていると思うのですね。

変と言えば怒られてしまいますが、上淀廃寺も南に向いているのですが、南側の目の前には山があります。無理な状況でも南に向けるということが古代寺院の立地で、それを踏襲しているということは感じられます。景観として、北の海から見れば変な格好でも、お寺を造った豪族本人は全く変ではないと思っているのではないかと。

【海野】建築から見て、駅路が先か、お寺が先かということは、それぞれ判断が難しいところですが、一つはやはり講堂が奥にあるということです。講堂が手前に来ることは、正面性の話からすれば、やはり不可思議なところがありますので、やはり南側からのアクセスを考える必要があると思います。

もう一つ、先ほどから地形のお話しがいくつか出ていますが、現存する建物の時代は降りますが、葛城に當麻寺があり、現在でも8世紀後半から9世紀初頭の二つの塔、双塔が残っています。金堂と講堂が南北にあって、その西側奥に曼陀羅堂という本堂がありますが、それが正面にあります。現在は東西のアプローチで、東側が正面のように見えるのですが、双塔はちゃんと東西に並んでいるので、古代には南が正面であったと思います。ただ、その南側に大きな山があり、現状ではアプローチできないという状況になっていますので、そのような意味での伽藍の方向性として南を向くということは、このようなことにも表れているのではないかと思います。

【松葉】先生方は興道寺廃寺の現地に、今日初めての方もおられれば、何回も来ていただいている方もおられますが、実際に現地に立って、周辺を見渡しながら、どのようなことを意識して伽藍を設けているかという考えやお気づきの点はありますか。

【海野】興道寺廃寺の周辺を見て感じた、気づいたというレベルの話ですが、南側の谷筋への方向との関連性もあり得るのではないかと感じました。それに対して北側の海上から見た場合、ではどれくらいお寺が見えたのか、おそらく塔はシンボルとして見えたと思うのですが、それ以外、例えば金堂や講堂は大きく立派な建物ですが、塔に比べればシンボル性は低いので、寺院の景観は必ずしも北側からはそれほど重視されなかったのではないかと思います。

【三舟】今日の朝も車でぐるりと回りましたが、先ほどお話しした斎尾廃寺のように立地として微高地の上に興道寺廃寺があり、やはりよい場所にお寺を造っていると感じましたね。西側には興道寺古墳群があり、興道寺廃寺には先行する時代の建物もあるわけですが、やはりかなり限られた一番よいところにお寺が造られています。この周辺では最も見晴らしのよいところで、興道寺廃寺の東側が段丘崖になるので、やはり眺望として東を見れば、やはりかなり見栄えがよいという印象を受けました。

【梶原】三舟先生と共通することも多いのですが、私が河川型と分類したお寺は全国にたくさんあるのですが、河川沿いの河岸段丘や自然堤防の中でも、やはり川に寄ったところにお寺を建てるので、川が十分に意識されています。興道寺廃寺も同様に、やはりこの河岸段丘の崖に近いところに塔が建てられていますので、耳川の河川交通はかなり強く意識されていると思います。むしろラグーンからは少し遠いので、ラグーンを意識したのであればもう少し違うところに建てたのではという印象をもっています。

また、集落が比較的近いので、集落の中のお寺というような信仰形態も、やはり強く感じるところです。

【門井】先ほどもお話ししましたが、興道寺廃寺の南方には東西に川を渡って、対岸の耳川右岸の山の麓を北上していく古道のルートを想定しています。このルート上を移動していく人々の目線に従えば、興道寺廃寺は南方から立派な伽藍を見通すことができ、さらに川を渡ってからも段丘の縁に建つ塔を目にすることができます。私はやはり南から東にかけての見栄えは相当意識されていたのではないかと感じています。

【松葉】以前の歴史フォーラムでご提示された図では、興道寺廃寺の南側に東西道が通り、眺望の方向として北に矢印が向いていたかと思いますが、その方向としては天王山か、洪水山を意識しているということですかね。今ほども海野さんから南側への、近江への谷筋の方向についてもコメントいただきましたが、まさに耳川という河川が流れる南北の方向線がその方位にあたるかと思います。特に南からの眺望がかなり意識されているということですね。

梶原さんは12月に山のお寺についてもご講演されるということですが、耳川流域では北にある天王山と洪水山があります。山への眺望という意味で何か言えることはありますか。門井さんはおそらく洪水山の方向を意識されていると思うのですが、耳川流域の山について感じたことはありますか。

【梶原】興道寺廃寺と洪水山との関係については、門井先生が既にご紹介されたことを後追っただけということが先ほど判明したので、さすがだなと思いました。古代寺院の立地の一つとして、きれいな形、目立つ形の山を遥拝する事例は結構あります。南から興道寺廃寺を見れば、きれいに洪水山を背負っているということは言えるかと思います。ただ、神南備としては少し山容が違うかなとも思いますので、ひょっとすれば洪水山と南方の日吉神社の裏山を、門井先生が示していただいたものにはきちんと矢印の線が引いてありますが、このような目立つ山容を結んだ軸線や河川も含めた地形をもとに地域の地割が規制され、それに沿ってお寺が造られたということも考えられると思っています。

【三舟】興道寺廃寺から山を意識して見ていなかったのも具体的なことは言えませんが、来美廃寺の向こう側には山があり、それは神南備山という山ですね。『出雲国風土記』でも、その神南備山が意識されているので、おそらく来美廃寺ではそのような山を目の前にして遥拝する寺院で、このような例は結構あるような気がします。私は山林寺院という言い方が好きではないので山寺と言いますが、山寺と言えば山の中の誰も行かないようなお寺というイメージがあるかも知れませんが、奈良時代の山寺は山麓の麓にあるので、やはり山の信仰とお寺の関係については、今日、梶原さんが指摘されたとおりで感じました。

【梶原】先ほどからお話しに出ている洪水山が興道寺廃寺の伽藍の中軸線の先にあり、その後には軸線が変わるといいうところにも意味があるのではないかと思います。河川交通の方向に合わせる、あるいはその後の周辺の地割の方位などによって時期差によって軸線が変わっている可能性もあるのではないかと。

もう一つ、やはり山を主体としているところに在地性を感じますね。いわゆる国分寺など官が造ったお寺は、そのような要素よりも既に規格されたものをあてはめるといいう開発行為になることに対して、そのような山などの在地の軸線を重視しながら伽藍を造るといいう部分に、在地に密着して生み出された寺であることが現れているのではないかと感じたところです。

【松葉】興道寺廃寺が造り替えられた再建期の伽藍は基本的に正方位を向くので、おそらくこれ

は古代寺院のあり方としては正しいかと思うのですが、初期の創建伽藍がやはり西に傾いています。今までのコメントをうかがっていると、やはり洪水山の方位に伽藍が向いているような気もしてくるわけで、ひょっとすれば南側、近江からの谷筋から、北側の洪水山に向ける方位の軸線が伽藍の造営に反映されている可能性もあるのではないかという気がします。

会場からもご質問をいただいています。「興道寺廃寺の南門跡あたりから見て、天王山の眺望が三角形のシルエットで一番美しく神々しいと感じます。海側、北陸道側からでは天王山が近過ぎて、このような感動は覚えません。日の光を浴びて、金堂と塔の奥に天王山が聳える姿はさぞ美しい景観であったであろうと想像します。このような視点場としてのポジションが、この地にこのような伽藍配置で寺院が建設された理由の一つではないかと思いますが、いかがでしょうか。」ということで、どなたかへのご質問というわけではありませんが、一つのご意見をいただきました。天王山と言ってしまうと、寺院の方位が少しずれるような気がします、いかがでしょうか。

【梶原】方位から言えば確かにそうですが、やはり山と言えどどこからでも見えるのですが、興道寺廃寺のあたりは天王山の山容が一番きれいに見える場所ということは確かにおっしゃるとおりかと思います。興道寺廃寺がそれらの山を意識して造られたかどうかは、慎重にならなければいけないとは思いますが一番山がきれいに見えるところにお寺を造る可能性は検討していく必要があると思います。

【松葉】もう一つ、ご質問をご紹介します。「ミミ（耳、弥美、美々）の地域の象徴的景観として耳川河口左岸の洪水山（こうづやま）に注目すべきと考えています。『角川地名辞典』によれば、この山は「洪水によって新庄村から流されてきた」、「昔の耳川の大洪水を忘れまいと命名された」とされていますが、元禄期成立の『若狭郡県史』の郷市の項に「小村あり、古津山と号す」、「向水山」という記述があって、ここに古く津が存在していたことが強く想定されます。長い年月の経過により、この古津の記憶がすっかり忘却されてしまったことに起因して、専らその音「コウズ」から「洪水」山の地名起源伝承が生まれ、今日に至っていると考えます。元禄期の文献で、既に古津山（古津村）と記される耳川河口の津の存在をどの程度遡り得るかは検討を要しますが、少なくともこのミミの地域に水路交通の拠点になり得る津の存在を、古代中世にも現実的に想定して、そのミミや興道寺廃寺の歴史的考察を進化すべきと考えます。いかがでしょうか。」ということです。地名に関することですので、門井さん、コメントがあればお願いします。

【門井】興味深いお話しをご紹介いただき、ありがとうございます。地名の悩ましいところは、それがいつの時期にできたものか特定しにくい点にあらうかと思います。ただ、今は洪水という字を充てていますが、元々は古い津、古津に由来するということは十分考えられると思います。今日の梶原先生のお話しのとおり、今はもう陸地になっていますが、洪水山のあたりもラグーン地形があり、ラグーンが広がっていたということを裏づける間接的な証拠となり得るのではないかと思います。

【松葉】確か昨年11月に愛知県の考古学フォーラムで立ち話をした時に、梶原さんは興道寺廃寺とラグーンとの関係性を結構強調されていました。それはむしろ逆にそうではなく、地理的に狭い地域なので必然的にラグーンが見えてしまうだけではないかということをおは少し申し上げたのですが、今日の梶原さんのお話しはラグーンの寺々ということでしたが、今日はかなりトーンを抑えられ、むしろ逆に興道寺廃寺を地域開発と結びつけられていたので、逆にすんなりと聞かせていただいたのですが、それはやはり興道寺廃寺の現地や耳川流域の地形を見られ、そのようなお考えになったのでしょうか。

【梶原】興道寺廃寺については、以前から松葉さんにそれは違うのではないかとということも言うか
がっていたのですが、現地を視認するとやはりこれは河川を強く意識していると認識しました。
その過程で、ではその次の段階として、私はこのようなラグーンの周辺にどの程度のお寺が展開
するのかということを中心にきちんと調べたことがなかったので、今回、調べてみるとそれほど多くは
なかったということです。今回は「ラグーンの寺々」という論題を先に提出してしまった後で調
べてみると、寺々でも何でもなく、実は逆にあまり結び付かなかったという結論になってしま
いました。当初の仮説とは真逆になってしまいたいへん恐縮ですが、それはそれとして意味がある
結論が出たのではないかと考えています。逆にいろいろと教えていただき、ありがとうございました。

【松葉】むしろ逆に今日、お話しをおうかがいして、寺院造営と地域開発が絡んでくるという視
点は、興道寺廃寺の場合、例えばお寺がある河岸段丘については結構注目されるのですが、段丘
以外の低地帯についてはなかなか注意も払われなかったのですが、そのような低地への水田開発
も含めてという意味で今日のお話しは理解すればよろしいでしょうか。

【梶原】それでよろしいかと思います。ただ、私も耳川右岸の遺跡動態や集落展開についてはあ
まりきちんと調べていないのですが、右岸も左岸と同じような感じと考えてよろしいでしょうか。
右岸の方が地形も低く、開発が早いということはないのですか。

【松葉】地形的には耳川右岸はむしろ標高が低く、現在の集落が展開しているところは逆に自然
堤防沿いに島状に標高が高くなっています。おそらく遺跡があるとすればそのようなところに所
在していると思うのですが、全体的な地形として右岸は低く、なかなか古代集落も展開しにくい
場所なのかと思います。ただ、祭神として室毘古王という耳別氏の祖先を祀っている式内弥美神
社が耳川右岸にあることを考えると、なかなか無視できない地域とも思います。

【梶原】一般的な見解として言わせてもらおうと、地形的にはやはり土地が低い方が水田として使
いやすいので右岸の開発が早く、左岸の自然堤防はやや遅れて開発が入ったのではないかと。立地
からすれば興道寺廃寺から耳川右岸も十分に眺められるので、必ずしも左岸のみを意識したお寺
ということではないと思います。

【松葉】古代の地域開発に関連するものに条里があるのですが、興道寺廃寺周辺にはほとんど条
里地割が残っていません。逆に耳川右岸や河口付近の低地には条里地割がある程度残っているの
で、高橋美久二先生がかつて条里地割の余剰帯を根拠に北陸道の位置復元もされたのですが、古
代寺院の立地と条里について言えることはあるのでしょうか。興道寺廃寺の軸線は条里地割の方
位と合わないのです、どのように考えればよいでしょうか。

【門井】条里地割については、起源の問題があります。興道寺廃寺周辺では北方でそのような地
割が確認できるということですが、確かに駅路が河原市、郷市のあたりに通じ、条里地割敷設の
基準になったということもあり得ると思います。ただし、その条里地割がいつ成立したのかはま
た別の問題です。また、そもそもその位置に駅路が成立したのがいつなのかという問題もありま
す。一概には、興道寺廃寺と結びつけるわけにいかないと思います。

【梶原】条里はいつ敷設されたのかという問題があり、それをなかなか解決できない状況では門
井先生がおっしゃるとおりかと思えます。自分が検討した時は、一般的に条里が残っているところ
は比較的標高が低く、早い段階から水田化しやすかったので条里が残りやすい傾向があるのだ
ではないかという傾向性の指標として用いているだけで、やはり条里と寺院の方向を直結させて検
討することは難しいと思います。

【松葉】先ほどの寺が先か、道が先かという問題とも関わってきますが、北陸道と条里の成立の時期の問題もあって、寺院と条里の方位は直接的には関係なさそうということになるのかと思います。

4. 興道寺廃寺と三方郡家を考える

【松葉】最後に三方郡家を取り上げたいと思います。門井さんのお話しの中で丁寧に三方郡衙の所在比定について整理していただきました。現時点では、旧來說として旧三方町のJR三方駅周辺、城縄手遺跡あたりに郡家の所在を想定する説と、興道寺廃寺の発掘調査が進むことで耳川流域に初期郡家の所在を考える説があります。寺院と郡家との関係性で言えば、弥勒寺跡と弥勒寺東遺跡のように寺院と郡家が並ぶパターンもあれば、郡家に近いところに寺院がある、あるいは逆に離れているといういろいろなパターンもあり、郡家の移転もあるという中で、興道寺廃寺の発掘調査が進んできて、三方郡家の所在をどう考えるかということで、ご意見をお聞かせいただきたいと思います。

【梶原】弥勒寺遺跡群は郡家と寺院、律令的祭祀の遺跡が並んで見つかったことで著名な遺跡で、それが郡家をめぐる景観の代表例であると考えてよいのではないかと思います。一方で、お寺をもたない郡家もやはりたくさんあったわけで、もちろん私としても興道寺廃寺の近くに初期評家があった可能性はもちろん否定しないのですが、寺院があるから初期評家があるに違いないという考え方にはあまり賛同できないと考えています。

【海野】郡衙と寺院との関係で言えば、やはり古墳も含めて元々の拠点となる集落なり、あるいは豪族がどこにいたのかという問題と大きく関わってくると思います。興道寺廃寺について言えば、まずもちろん在地の中で本拠地と近いのかという問題もあると思うのですが、それだけではなく、ことに建築に関して、郡衙も寺院もそうですが、単独では造れないということですね。何らかの形で中央なり、建築技術をもっている人達とつながるパイプがないと、どうしても造ることが難しいということが一つあります。三方郡衙がどこにあったのかということを考える上で、移転説が重要な要素かと思います。時期によって、その所在が変わる可能性もあり、継続性の問題からすれば新しく出てきた豪族の問題も可能性として出てくると思います。

郡衙の話から少し離れてしましますが、興道寺廃寺の場合、創建だけではなく、改築をして、修理をして、さらに造り直すということが建築的には大きな意味があって、それは存続期間が長いことを意味しているわけですね。この寺を支える、ある程度安定した勢力が近くにあったのか、なかったのか、少なくとも寺院を維持しようとする勢力が一定期間、存在したことを強く示していると思いますので、その意味は大きいと思います。

【三舟】昨年の歴史フォーラムでは、耳別氏についてお話しをしました。弥美郷が耳別氏の本拠地とすれば、おそらく若狭国造の本拠地は小浜市、現在の若狭彦神社や国分寺のある地域と思いますが、このあたりには膳臣氏がいて、そして興道寺廃寺を建てた人々は時期的には膳臣から独立した者達で、興道寺廃寺の規模から見れば相当な勢力で、上手く成功した方であろうと思います。

その場合、郡庁院という施設があって初めて郡衙と認められますが、もしこれが評の段階であれば、コの字形の建物配置が成立していないので、今、議論していない評衙はないのであろうか。三方評ができた段階で、実は評衙は規則性のある建物配置ではないと思います。規則的な建物配置を探していけば郡衙はわかりますが、評衙の段階では見つけるのはまず無理であろう。

郡衙の中でやはり一番大事なのは倉庫群、正倉群だと思うのです。収奪を行うために大事で、弥勒寺東遺跡や私が住んでいる関東では神奈川県の影向寺遺跡にも倉庫群があり、倉庫群より古い寺院が近くにありますが。ただ、最近、倉庫群のあたりからもう少し古い建物も見つかり、評衙段階の建物ではないかということです。それは今までの定型的な郡衙の形をとらないので、何をもって郡衙、あるいは評衙とするかわかりませんが、城縄手遺跡付近の土器が8世紀代とすれば、やはり興道寺廃寺のあたりに7世紀後半の建物群、倉庫群があり、評衙があった可能性はあり得るのではないかと期待してします。

門井さんが示された評衙、郡衙の模式図はわかりやすいと私はかねがね思っているのですが、先ほどは議論が水田開発に移りましたが、水田を開発する、しないは別にして、やはり開発の新しい拠点を設けることは郡行政の一番の大事な部分になると思うのです。門井さんが指摘されている新しい評をつくり、分割していくパターンと、梶原さんが言うところの開発拠点型はぴったりと合うのではないかという印象を私は受けています。

【門井】三方郡家についても、実は8年前の歴史フォーラムで少しお話しさせていただいたところです。移転の可能性もその時に指摘したのですが、当時は移転の時期まで言及していませんでした。今回、発表するにあたり、もう少しこの部分に突っ込めないかということで、少なくとも若狭町三方に役所ができたのは、天武10年頃までに遡るのではないかというお話しをさせていただきました。

天武朝以降、評衙が全国的に出現するのが、7世紀第4四半期頃からとされています。おそらくその頃には、三方に中心があったのではないかと。それ以前の中心を興道寺廃寺のあたりに求めるにしても、7世紀第4四半期の頃には三方に中心が移転したというプロセスを考えています。

【松葉】7世紀の段階から三方に中心があったと想定されているわけですね。

【門井】三方評の成立時点の中心は興道寺廃寺の周辺に考えてはいますが、三方へと中心が移る時期は、以前に発表した時よりも少し遡らせて考えています。

【松葉】後に成立してくる気山津のような港との関係から郡衙の所在を考えれば三方に中心が移るのはもう少し後の時代でもよいと思うのですが、いかがでしょうか。

【門井】確かに気山津が成立してくるのはもう少し後のことになってきますが、それが郡衙の機能とどのように関わっていたかという点について明快な解釈は、まだ私の中で持ち合わせていません。

【松葉】実際に城縄手遺跡から出土している須恵器には、郡、郡厨と墨書されたものもあり、郡衙があったという根拠にもなっているのですが、8世紀に遡るものもありますが、9世紀以降に降るものもあります。耳川流域説をとるか、三方説をとるか、結局は可能性の議論をぶつけ合っている部分もあるので、今後の調査の進展次第ということになるかと思えます。

5. 国史跡・興道寺廃寺跡の保存活用を考える

【松葉】残り時間も少なくなってきました。興道寺廃寺については平成31年度にかけて保存活用計画を現在作成中で、将来的に国史跡の興道寺廃寺跡をどのような方針で保存し、公開活用していくのかという計画づくりを進めています。今日は折角のよい機会ですので、特に今日のフォーラムのテーマであった景観も踏まえていただき、最後のまとめとして、今後どのような保存活用を望まれるかということでコメントをいただいて、閉会したいと思います。

【海野】正直、整備委員でも何でも無い無責任な立場で好きに言わせていただくと、やはり私が

今日、提示させていただいたように建築的にはやはり建物平面がよくわかっていないところが、なかなか整備が難しくなるところかと思います。ただ、一方で基壇の規模、あるいは基壇返しも外側がきっちり残っているということは基壇規模を示す上で有力な根拠になりますので、整備をする際に柱の位置まで整備するかどうかということが、まず問題となります。逆に基壇の規模であればきっちり整備できると考えられます。

もう一つ、基壇の高まりが残っている現地の状態ですが、どこまで現地を整備するのかという問題があります。興道寺廃寺も、それ以外のところでもそうですが、ことに興道寺廃寺では周辺との関係から景観というのが話題になっていますが、今日の議論と同じように景観全体を考えていく、古代にどのように見えていたのか、あるいはどのような周辺環境であったのかということまで踏まえて考えると、必ずしも現地性ということだけではなく、AR、VRなどのCGを使った技術、あるいは模型での視覚化を検討することもあり得るのではないかと思います。このメリットは、現在の段階でできることを検証して作っていくので、その時点で100%の担保のある古代ということではなく、新しい発掘成果なり、研究なりが進み、この部分は実は違ったということがわかれば、それを修正していくこともできるので、そのような方法も考えていく必要があるのではないかと思います。

【三舟】海野さんの後で話しにくいのですが、私みたいに一般庶民から見れば、今日、現地にも行きましたが、やはり今の状態で興道寺廃寺を見て感動される方は少ないのではないかと思います。金堂、塔、講堂といった表示があるとわかりやすい。社会教育や、私は女子高の教員をしていたので、例えば学生を連れてきて、ここが金堂、ここが塔と説明しやすくなります。ただ、難しいのが何かと言えば、海野さんがおっしゃったようにやはり遺構を保存しなければならない、そして今でき得ること、発掘調査や整備も今の技術の段階で、将来、もっと技術などが進んだ場合、もっと他によい方法があり、それを邪魔しないような形にしなければならない。

あともう一つは、私には他人事で、これは美浜町の問題ですが、予算の問題です。どこまでできるか、わからないのですが、私が言いたいのは古墳があり、寺院があり、式内社の弥美神社があり、その他に製塩遺跡があり、さらに景観がよい。私も全国いろいろと回っていますが、これらが揃っている状況はなかなかなく、本当によい環境と思います。興道寺廃寺だけではなく、美浜町の歴史的環境の復元をして、歴史を体験できる場所となって保存活用していただければ、またぜひ来たいと思います。

【梶原】保存整備については、私も海野先生と基本的に同様の考えです。考古学、文化財保護の立場として、やはりあまり過度なことをやり過ぎないで、わかるところをきちんと復元整備するという原則を堅持すべきと思います。そして、その上でやはり興道寺廃寺がきれいに整備されて、多くの人が古代寺院があったことを実際に感じられるようになることは大切なことです。

保存整備の場で、たくさんのお客さん、観光客が来るようにしたいと言われることがあるのですが、それはなかなか難しく、おそらく興道寺廃寺だけで人を呼ぶことは難しいのではと思います。遺跡整備が行われた後、それをどのような形で生かしていくのか、地域の方々に積極的にいろいろなご提案、ご提言をしていただけることで、遺跡整備が社会教育や学校教育的な活用の中で生きてくるのではないかと思います。整備されて終わりということではなく、整備された後に皆さんがそこをどのように使っていきたいかということが、遺跡の価値をより高めていくことにつながると個人的には思っています。

【門井】私は興道寺廃寺等調査指導委員会に加えていただき、2月に国史跡の指定までこぎつけ

ました。松葉さんを初め、多くの方々の努力が実って本当によかったと思っています。一方で、今後、保存活用計画の策定を進める、整備を進めるということで、私は今後も委員として、お三方の先生に言われたことを踏まえて、松葉さんと活動していく立場かと思っています。現地に行っても実際の寺院の伽藍をイメージすることが難しいという状況もあるわけですが、そこにかつて古代寺院があったということを実感してもらえる工夫、努力が必要だと思っています。

CG、グラフィック技術の活用も費用のかかることですが、やはり一案と思っています。最近ではGoogleをつけて、現地でリアルに再現するような方法もあるそうです。興道寺廃寺の復元イラストもイメージの助けとなりますが、少しデフォルメされた部分があるのでリアルな景観とのリンクとなると難しい面もあります。新しい技術を少しでも取り入れるような形で整備していければよいのではないかと考えています。

【松葉】はい、ありがとうございます。突然で申し訳ないのですが、会場に奈良文化財研究所の清野陽一さんがおられるかと思っています。コメントをいただいて、閉会にしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

【清野】国指定史跡に指定されたということで、まずはおめでとうございますと言わせてください。会場の皆さんも、どのぐらいご存知かわからないと思うのですが、国指定史跡になるということはものすごく大変な作業で、松葉さんや関係の皆さんのご苦労たるや想像を絶するものがあったのではないかと考えています。

将来の史跡整備を見据えてということで、興道寺廃寺をどのように活用していくかというお話ですが、全国いろいろなところでさまざまな整備がなされていく中で、整備がされる年度によっていろいろな実験が毎年のように行われ、史跡を見ると大体いつぐらいに整備した遺跡なのかということが逆にわかってしまうような感じもあります。逆に興道寺廃寺は今全く何もない状態からのスタートなので、いろいろなことができる余地があるのではないかと考えています。もちろん地元の方々のご理解も含めて、まだまだ乗り越えなければならない壁がいっぱいあるかと思うのですが、そのようなゼロベースからいろいろなことができる可能性をプラスに考えて、いろいろな実験と言っては失礼かも知れませんが、試みに取り組んでいただき、門井先生の援護射撃もおそらくあるかと思っていますので、ぜひ全国の人に誇る整備をしていただき、それが逆に全国から人が来て、「あっ、このような整備の仕方があるのか」というものが見られる場所になってくれたらと思います。他に興道寺廃寺以外にも見るべきものがいっぱいある場所ということは、皆さんもよくご存知かと思いますが、そのような興道寺廃寺を取り巻く遺跡環境も含めてすばらしい史跡整備がされればと思います。

今日は歴史的な解釈についてもたくさん勉強させていただきましたが、このことにはいろいろなご意見もあろうかと思っています。また、私自身もこれから考えていきたいこともいっぱいありましたが、ここで取り上げることは控えておき、史跡整備の件に関してだけコメントさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

【松葉】はい、ありがとうございます。突然コメントを振りまして申し訳ありませんでした。

これをもちまして、今回の歴史フォーラムを閉会させていただきたいと思っています。最後までおつき合いいただき、ありがとうございました。



【第2部】

北陸の古代寺院、発掘最前線

調査概報 I

末松廃寺跡、発掘最前線

野々市市教育委員会 文化課 主事

腰地孝大

1. 立地

末松廃寺跡は野々市市の南西部に所在する。野々市市は手取川によって形成された扇状地上に位置しており、その扇中央部に位置付けられる。手取川は白山を起源にほぼ西流するが、その支流によって扇中央部では南北に微高地が延びる島状微高地が形成され、この微高地上に末松廃寺跡のほか多数の集落遺跡が見つかっている。扇状地の扇中央部は礫層が厚く堆積しており地下水位が低く、水の確保が非常に困難であったことが予想される。



写真1 空中写真（北から）。遙かに白山を望む。

2. 周辺の遺跡と景観

末松廃寺跡の標高は約 37m で、フラットな地形上に位置している。遺跡の西辺は手取川を起源とする用水が北流しており、白山市との境界となっている。東側には島状微高地上に、寺院創建時期前後に形成される集落が複数確認されている。その中で末松遺跡は7世紀代に形成される集落で、建物跡が複数グループにまとまって見つかっており、人工的に開削され護岸施設をもつ大溝が見つかるなど開発拠点の集落の様相を呈している。近江系や丹波系の特徴をもつ土器や竪穴住居が見つかっており、集落を形成する集団には他地域からの移民集団が含まれていることを窺わせる。

末松廃寺がこの地に建立された経緯は不明な点も多いが、周辺の大規模な開発に伴うものであり、白山を望むことができる眺望が重要であった可能性が指摘されている。

3. 寺院の伽藍配置

末松廃寺跡は、西に金堂、東に塔をもつ法起寺式伽藍配置である。門や講堂、その他の付帯施設の存在についてはよくわかっていない。金堂の北側に掘立柱建物が複数見つかっており、これらが講堂やその他の付帯施設であった可能性がある。

金堂や塔は7世紀後半の建立と考えられている（創建期）。金堂については8世紀代に同じ場所に建物軸を違えて建て替えられていることがわかっている（再建期）。上記の講堂の可能性のある掘立柱建物についても建て替えられた金堂と軸線を揃えるため、8世紀以降の年代観が与えられている。

伽藍を区画する施設については築地塀や掘立柱塀が想定されていたが、いずれも近年の発掘調査によって明確な痕跡が認められないことがわかっている。

4. 主な遺構

(1) 金堂

創建期の金堂は雨落ち溝のみが見つかっており、建物の構造を示す遺構は見つかっていない。建物の規模は東西 19.8m、南北 18.4mで、雨落ち溝の外側には瓦溜まりが見つまっていることから、瓦葺の建物であったことは確実視できる。再建後は東西 13.5m、南北 10.8mでやや小規模になっている。建物の外周に玉石敷きが見つまっているが、建物の構造については不明である。また再建時期の瓦は見つかっていないことから、再建時には非瓦葺きの建物が建てられたと考えられる。

(2) 塔

塔は塔心礎の抜き取り痕と四天柱の礎石を支える根石が見つかっており、方3間で、一辺 10.5mであると復元されている。塔の基壇などは見つかっておらず、また掘り込み地業の痕跡も見つからない。全面を調査しているが瓦が出土していないことから、非瓦葺きであったか、または瓦を葺く段階に至らなかった可能性が想定されている。

(3) 幢竿支柱穴

塔の東側、塔心礎から約 17mの位置で幢竿支柱穴が見つまっている。柱穴が南北に2基並んでいるもので、当初は掘立柱塼と評価されていたものを、近年の調査で評価を改めたものである。柱穴は一辺約 1mの方形の掘り方をもち、直径約 60cmの柱が据えられていた痕跡が見つまっている。

(4) 門

門については塔の南側で4基の柱穴が東西に並ぶ柱穴列を検出しており、並ぶ方位から再建期以降のものと考えられる。創建期のものは見つからない。

(5) その他

塔の北東に竪穴建物1棟が見つまっている (SB8)。これは塔や創建時の金堂と同一の方位であり、寺院に関連する建物と考えられる。丹波地方に起源をもつ所謂「青野型住居」と呼ばれる形を呈しており、寺院の創建に関して移民系集団が関わった可能性を示す点で注目される。



写真2 塔心礎抜き取り痕跡



写真3 幢竿支柱穴から塔跡を望む



写真4 塔の北東で見つかった竪穴建物



写真5 再建期の門

5. 寺院の変遷

寺院創建期の遺構は、塔や金堂、幢竿支柱穴のほか塔の北東で竪穴建物1棟が見つかったのみである。この竪穴建物から7世紀中葉から後半の遺物が出土していることから、寺院の創建はこの時期以降であると考えられる。寺院は8世紀中頃以降に再建されているが、金堂のほか講堂と推定される掘立柱建物や柵列などが見つかった。この掘立柱建物の中でもさらに重複関係によって2時期以上に細分されることがわかっている。

9世紀以降についても、「朱仏寺」と墨書された須恵器の存在や油煙が付着した土師器が見つかったことなどから、寺院としての機能を有していたと考えられている。10世紀代においても完形の土師器碗が大量に出土する土坑などが見つかった。11世紀中頃には寺院としての機能を失い耕作地として利用されていたと考えられ、12世紀前半頃には石積みの墳墓が見つかったが建物などは確認されていない。

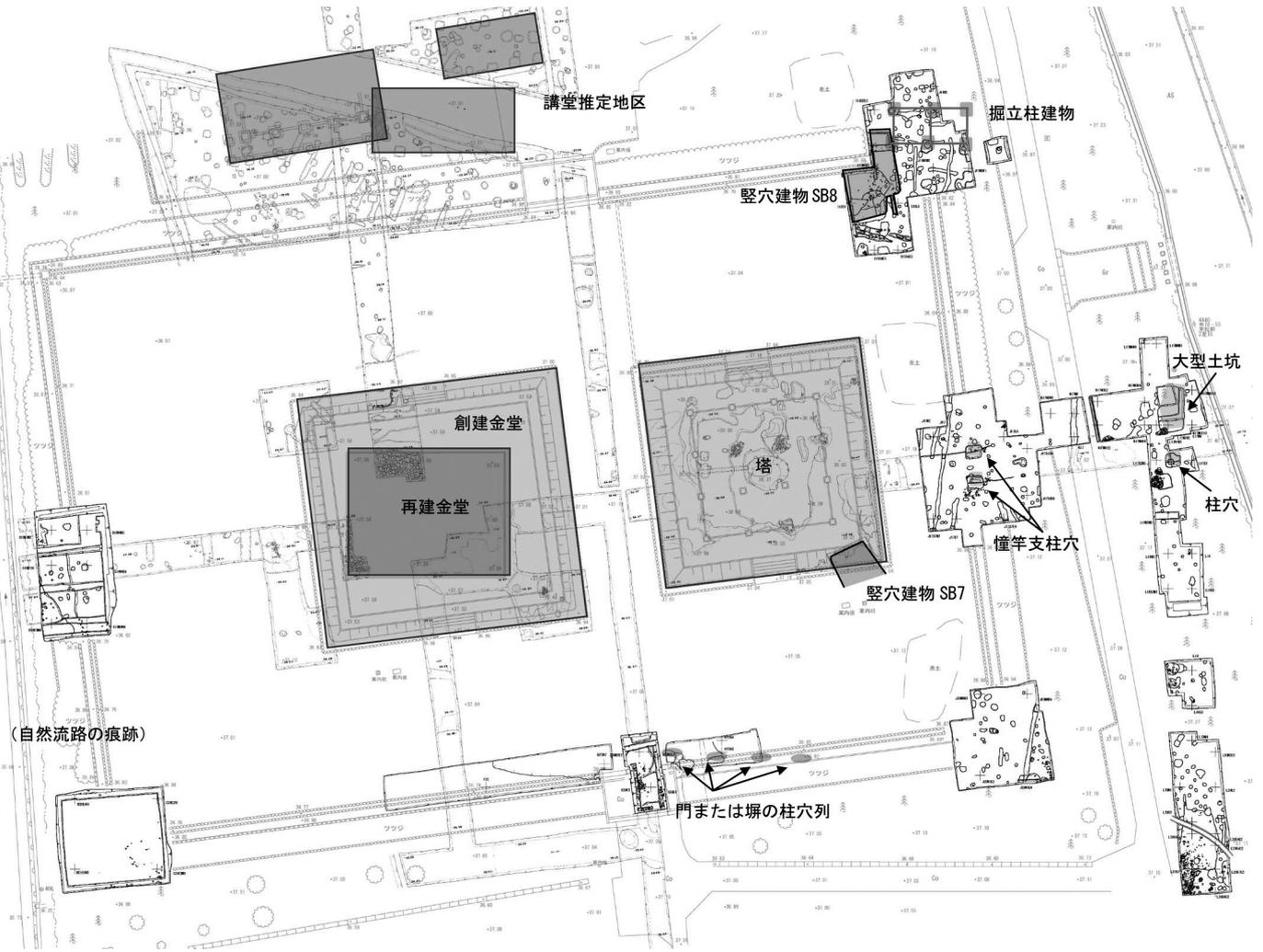


図1 調査区平面図 (縮尺 1/600)

3. 主な遺構

①塔心礎穴と塔跡

塔心礎穴(心礎の抜き取り穴)を再調査したところ、底面には心礎据え付けの根固めの根石が良好に残っていることが判明し、その隙間には明黄色の非常に粘性の高い粘質土が充填され、礎の安定化が図られていた。抜き取られていたからこそ確認できたことと言えるが、当時の北陸における塔建築の土木技術を知るうえで貴重な成果となった。

塔の版築基壇や外装等の痕跡を確認することはできなかった。遺跡が立地する台地は、現代まで続いた耕作により、地上部の遺構は大きく削平を受けたと考えられる。

塔心礎の周囲には約8m四方の方形溝区画があり、昭和46年の調査以来、これが塔跡の規模とされてきた。しかし、今回の再調査で、この溝遺構は近現代の耕作地割に伴う非常に新しいものであることがわかり、基壇の規模を見直す必要が出てきた。心礎石の柱孔径もふまえば、従来よりも大型の基壇を想定する必要がある。とはいえ、塔心礎を周溝状に囲むこの方形地割は、塔跡の区画意識の残存と捉えておきたい。現状では先行する末松廃寺クラスの塔跡を想定し、今後の調査を進めていきたいと考えている。

②塔西側の二列の柱穴列

塔心礎穴の約15m西に、柱穴列が二列並走することを確認した。直径約0.8mの円形柱穴が中心で方形柱穴も混在する。柱穴の深さはいずれも約0.5mで、柱痕跡の明瞭なものが多い。根入れの深さから、地上部の構造としては、それほど高くない施設が想定され、当初は回廊状遺構と考えたが、一部の柱穴で両者の柱間が合わない箇所が確認されたため、時期差をもつ二列の掘立柱塀の可能性も出てきた。両者の新旧関係は、出土遺物が乏しく不明である。

いずれにしても、塔の西側を区画する遮蔽施設と考えられる。過去の調査では、寺域東側の調査区で、同様の区画遺構とみられる同軸方向の柱穴列も確認されており、寺院東西の伽藍範囲を推定する重要な成果となった。

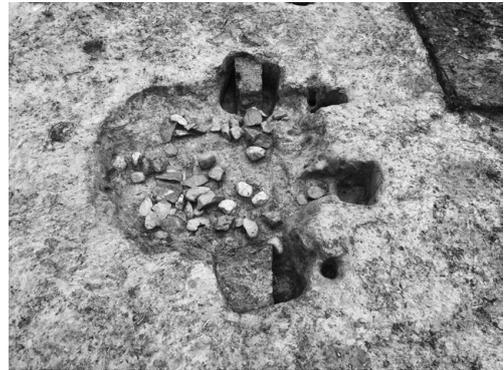


写真1 塔心礎穴と根石



写真2 塔跡調査区



写真3 並走する二列の柱穴列

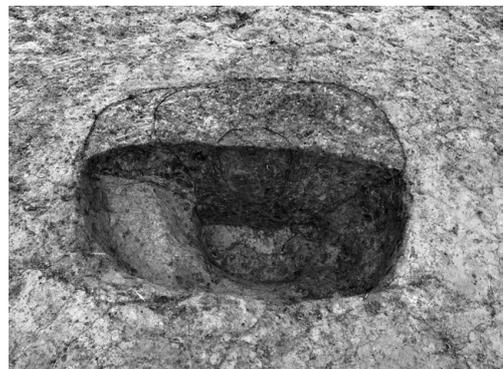


写真4 柱穴断面と柱痕跡

③塔東側の大型柱穴群（幢竿支柱穴か）

塔心礎穴の約10m東に、大型の方形柱穴群が集中することを確認した。なかでも二列の大型柱穴列をなす柱穴群は、いずれも5間6基で、西側の柱穴列は約1.0mの正方形柱穴、東側の柱穴列は約1.0m×1.5mの長方形柱穴による。西側の柱穴群では、深さが1.2m以上に及ぶ非常に深いものがあり、柱痕跡の明瞭なもの、抜き取り痕跡の明瞭なものがある。同様に東側の柱穴列も0.8mと深く、東側に段掘りして柱を抜き取っていることも確認した。両者の時期差は出土遺物が乏しく不明である。

両柱穴列は、同主軸だが柱間に対応せず、掘立柱建物の平面プランにはならないことから、別々の柱穴列と考えられる。一方で、遺構覆土の土色、手ごたえ等は酷似しており、同じ意識により構築・使用された柱穴群と考えられる。以上から、この柱穴群は、地上部に相当の高さを持つ構造物の柱穴もしくはそれを支えるためのものであることが想定される。

現状では、消去法的ではあるが、「幢竿支柱遺構」の可能性が高いと考えている。この柱穴群を幢竿支柱穴とした場合、2穴で1セットもしくは3穴で1セット、あるいは一本柱の支柱穴も想定される。今後の調査で、それぞれの柱穴のセット関係の確認のため、遺構の深度などを検証していく予定である。

このほか、塔の東に幢幡が位置することも検討が必要になってくる。幢幡は、荘厳すべき宮殿や寺院等の施設の儀礼空間の正面に置かれるのが通例である。南面する寺院を想定し調査を行っているが、儀礼空間の位置関係をどう考えるべきか、金堂等の他の施設の位置も含め、その伽藍配置の把握は課題である。



写真5 集中する大型柱穴群（東から）



写真6 集中する大型柱穴群（南から）

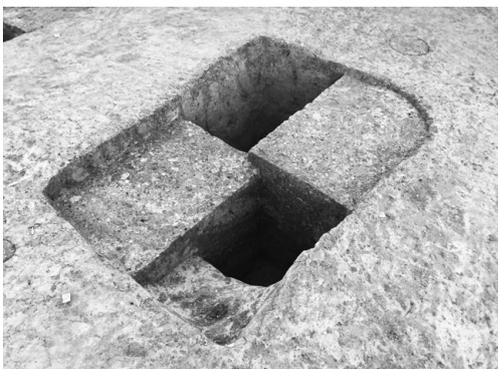


写真7 東側の長方形柱穴



写真8 西側の長方形柱穴

4. 寺院の変遷と課題

残念ながら、年代を決定する遺構出土の遺物に乏しく、寺院の年代および変遷については言及できない状況である。遺物は、耕作による削平を受け移動していることも多分にあるが、過去の調査での出土遺物をみると、8世紀後半から9世紀代のものが中心であり、創建期とする7世紀末から8世紀初頭の出土品は今のところ明確に確認できていない状況である。今後の出土品整理を進めるなかで見極めていきたい。また、瓦資料は一程度あり、軒丸瓦の瓦当面は2種類ある。これが建て替え等による時期差によるものか、年代や時期幅の再検討が課題と言える。

遺構を見ると、塔の西側の区画遺構は、明確な年代は不明だが、二時期の掘立柱塼の可能性もある。この場合、東列から西列へ拡張したと考えるのが一般的であり、寺域の拡張期があったことも想定する必要がある。今後の調査の課題である。

今回の再調査により、東西の区画遺構のセット関係を確認でき、寺域の規模・主軸などがわかってきたことは大きな成果である。このため、南側の区画遺構および中門の有無の確認は重要である。中軸線を中門の位置から確定できれば、「塔と幢幡」に対置される「金堂」を推定できる。

シャコデ廃寺は、寺家遺跡を意識して台地の南斜面ぎわに南面すると想定される。その場合、正面となる参道がどのように配置されていたかの解釈も課題である。また、邑知潟、日本海などの水上利用者からは、塔はどのように見えていたかなど、周辺環境からの景観の検討も課題と言える。寺家遺跡の調査研究とともに、少しずつ明らかにしていきたい。

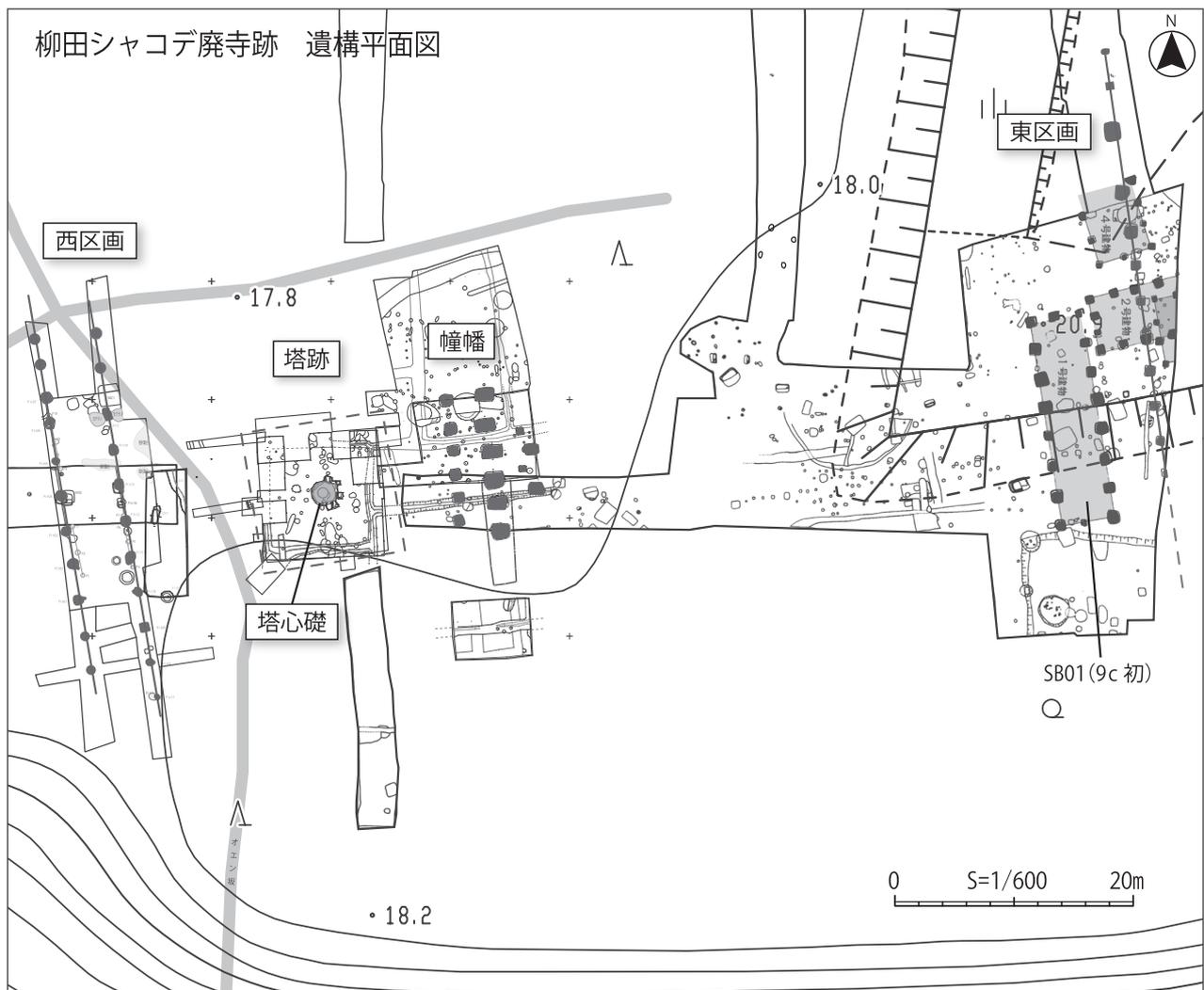


図2 調査区配置図および遺構平面図 (縮尺 1/600)

トークセッション

北陸の古代寺院、発掘最前線

羽咋市教育委員会 文化財室 学芸員 中野知幸
野々市市教育委員会 文化課 主事 腰地孝大
進行 美浜町教育委員会 歴史文化館 学芸員 松葉竜司

【松葉】トークセッションを始めたいと思います。ご報告の中でいくつかの論点がありましたので、私の個人的な関心も含めていくつかのテーマを設けたいと思います。まずは幢幡、幢竿支柱のお話からしましょうか。次に創建や再建という寺院の造営過程がある中で、寺院の造営がどのような背景で進められたのか、時代の変化なども取り上げたいと思います。そして、今日のご報告にはありませんでしたが、11月の歴史フォーラムにも繋げたいという魂胆があるので、お寺の見え方の問題、例えば寺院周辺の景観がどのように周囲の関係施設と関連して見えていたのかという景観論を取り上げて、最後に寺院を造った人はどのような人達であったのか、造営氏族の問題を観点に議論を進めたいと思います。



1. 幢幡をめぐる伽藍と景観

【松葉】まずは幢幡、幢竿支柱の問題です。北陸では末松廃寺跡、柳田シャコデ廃寺跡と現在、発掘調査が進められている古代寺院で、奇しくも塔の東側で幢竿支柱穴があることがわかってきました。そして、それに悪乗りする形で興道寺廃寺にも塔の東側に幢竿支柱穴があるのかということで先ほど無理筋にご報告をさせていただいたわけですが（P68、座談一図3）、会場の皆さんはどう思われたのでしょうか。中野さん、腰地さんにうかがいたいと思います。

【腰地】そうですね。まず、末松廃寺跡の幢竿支柱の評価は、もともと掘立柱塀だったものが、柱穴が二つしか並ばないというところで幢竿支柱と評価しました。文化庁が発行している『発掘調査の手引き』の中に、寺院の中で柱穴が二つ並んでいれば幢竿支柱の可能性があるとように記載されています（P67、座談一図1）。興道寺廃寺の場合、塔東側の柱穴列をどう考えるかというところで、そのような解釈の仕方もあるのかな、面白いなと先程のご報告をお聞きしました。ただ、これが本当に幢竿支柱穴かどうかというところで、おそらく松葉さんも「では証拠を出せ」と言われると難しい部分もあると思いますが、ただ私は興道寺廃寺の場合も塔の東側に幢幡があっても面白いなという気はしています。

【松葉】いや、ないと思います（笑）。自分で報告しておいて言うのもいかなものかと思いますが。末松廃寺跡の場合、確か寺域として築地塀があったというお話でしたよね。

【腰地】掘立柱塀が寺院の東側だけあって、それ以外の西側と南側は土を盛った築地塀が、北側については、発掘調査が行われていないのですが、おそらく南側と相対する築地塀があったので

はないかと考えられていますが、東側の掘立柱塀については幢竿支柱へと評価が変わりました。

【松葉】末松廃寺跡の場合、塔の東側に幢幡があったことになります。おそらく全国各地の事例も調べられていると思うのですが、塔の東側に幢幡がある事例は多いのでしょうか。

【腰地】そうですね。藤原宮などは建物の南側に幢幡がありますので、幢竿支柱が塔の東側にある事例はどうかと言われると難しい部分もあります。ただ、古代寺院の造営はしっかり測量しているということがある一方で、それぞれの地域で、多様な、必ずしも画一的な面だけではないという部分もあるので、塔の東側に幢幡があるという末松廃寺跡のような事例があっても問題ないのではないかと考えています。すみません、濁した答えになってしまいますが、とりあえず今はそのように考えています。

【中野】柳田シャコデ廃寺跡の場合も塔の東側になるのですが、消去法的に考えて幢竿支柱と位置付けました。やはり幢幡は儀式や儀礼空間の荘厳のために施設の正面に置かれるものですので、南面する寺院を想定すると、塔の東側に幢幡があると考えerにはすごく説明が難しいです。ただ、寺院は規格性をもって地域に浸透しているわけですが、一方で地域性というものも認めないといけない。塔の東側に幢幡があるということを、「これは地域性です」と言ってしまうとやはり実証的ではないので難しいのですが、そのような理解、評価も視野に調査を進めていきたいと思えます。柳田シャコデ廃寺跡の場合、塔跡がはっきりしてきて、周囲に遮蔽施設が見えてきたという段階ですので、他の施設、中門や金堂のことも調査の課題です。伽藍配置について、これから全体がはっきり見えてくる中で、あらためて幢竿支柱を見極めていきたいなと思えます。

【腰地】一つだけ付け加えると、末松廃寺跡では塔の東側に幢竿支柱があるのですが、寺院の東側には末松遺跡などの同時代の集落遺跡が見つかっています。つまり集落が末松廃寺跡の東側にあります。南側ではこの時代の集落、人が住んでいた痕跡が見つかっていない。その集落の人から見た景色がキーになるのではないかと。つまり、東から見たときに塔の手前に幢幡があるというような景観があったのではないかとということで、補足させていただきます。

【松葉】今の意見、いいですね（笑）。興道寺廃寺の東側には耳川があるのですが、河川交通、つまり河川を使った南北の往来が当然あったと思えますので、興道寺廃寺の場合、塔があつて幢幡が東側にあると、おそらく段丘崖の下からよく幡が見えたであろうと思えました。

中野さんのご報告では、柳田シャコデ廃寺跡の全体的な伽藍配置について、塔基壇があつて、幢幡もあつて、その東側には金堂を想定されていますよね。イメージとすれば、ちゃんと金堂もあつて、回廊が伽藍を囲っているということかと思いますが、塔と金堂の間には幢幡を設けにくいようなイメージがありますが、いかがでしょうか。

【中野】そこが苦しいところです（笑）。資料を見ていただくと、塔跡が伽藍の西側に置かれて、その西側で発見された柱穴列が遮蔽施設になると考えています。反対の東側でも、同じ軸方位の柵列状の遮蔽施設とみられる柱穴列が見つかっていて、東西の区画と塔の位置がようやくわかってきたという状況です。伽藍配置としては、塔と金堂の間に幢幡があつたと考えられるかなと思っています。幡は寺院の儀礼空間を荘厳するためのものですし、その演出を見てもらう意識もあると思えます。今の腰地さんの話では、末松廃寺跡では、東側の集落からの見え方を意識した外的な関係で寺院景観を想定されていますが、シャコデ廃寺跡の場合は、塔と金堂との間に幡を立てるといった内的な位置関係になります。外からの幢幡の見た目、どう見えるのかということ考えると、寺院の伽藍の内部にあるので、外的な意識は低いかなと考えます。ですから、これは本当に幢竿支柱穴群なのか？と常に疑問をもって調査をしています。疑問を解消していくためにも、

発掘調査で実証的に追及していくしかないと思います。今回、このように報告させていただいて、本当にいろいろと考えるべき課題が多いと勉強になっています。

【松葉】まとめをしていただいたようになってしまいましたね（笑）。折角なので、会場の皆さんからも質問があれば、お受けしたいと思います。

【松山】松山です。平城京の発掘事例では、幢幡は南面して、左右対称に並んでいると思いますが、地方の寺院ではどうなのか。末松廃寺跡では塔の東側に幢幡があることに自分としては合点がいかないです。

【腰地】ご質問ありがとうございます。まず、幢竿支柱が塔の東側にあることについて、元々、柱穴が続く塀と思っていたところが柱穴が二つしかない。門である可能性もあるにはあるのですが、塔を見上げて想像してみると、屋根が出っ張ってくるあたりから近すぎるということもあって、ここに門があるとあまりにも圧迫感があり、自然ではないという議論が以前からありました。2本だけの柱穴があるということで幢竿支柱、幢幡が一番可能性が高いのではないかとということです。藤原宮などと比べると、塔の東に幢幡があるのはどうなのかということで確かにおっしゃるとおりかと思しますので、他の事例もこれから探していきたいと思います。また、地域性や地形的なもの、景観論として、どのような見え方をするのかということも考えていきたいと思っています。

【松葉】はい、ありがとうございます。今日のこの講座で「北陸の幢幡は塔の東側にある」と主張したかったわけですが、なかなか課題も多いようで、残念ながらそういうわけにもいかないようです。

2. 古代寺院の造営過程と周辺からの景観

【松葉】次に、ちょうど今ほど寺院の見え方の話題があったので、寺院がどのように見えるのか、景観を取り上げます。

柳田シャコデ廃寺跡は、時期的には確か7世紀の終わり頃に造られた白鳳寺院と思いますが、後に大伴家持が見たであろう気多神宮寺におそらく転用されているわけですね。幡竿支柱穴を含めて、一連の伽藍施設はその転用されている段階と見ればよいのでしょうか。

【中野】時期を決定する遺構遺物の出土が本当に少なく、土師器、須恵器がいくらかあるのですが、かなり細かい破片で時期についてはまだ何とも言えないところです。これまでの研究で、末松廃寺跡に後出して7世紀末から8世紀初頭ぐらいに建てられた寺院と考えられているのですが、少ない遺物の中でも表土掘削の中で出土している遺物は年代的にはもう少し新し目なんです。8世紀後半から9世紀代の遺物が中心で、創建期の遺物は見られない状況です。大伴家持が羽咋にやってきた天平期の頃の遺物、8世紀初頭から前半ぐらいの遺物も出土して欲しいなとは思っていますが、今のところはよくわからない状況です。幢竿支柱穴からも時期を決定できる遺物が出土しないかと期待しているところです。今後の調査の課題です。

【松葉】寺院の造営過程を考えると、やはり時期を経ていくごとに堂塔が建ち並んでいくという造営順序があると思います。金堂を造る、塔を造る、講堂を造るというように伽藍を整えていく中で、印象としては柳田シャコデ廃寺跡はある程度伽藍が整った段階の寺院ではないかと考えるとすれば、このような幢幡や西側に見つかっている回廊状の遺構もどちらかと言えば家持が見たであろう寺院ではないのかなという印象を受けました。柳田シャコデ廃寺跡の場合、山裾の高台に寺院があるので、お寺の見え方として正面の下からですね。

【中野】今日のスライドは、意識的にロケーションを知っていただきたいと思って作りました。シャコデ廃寺跡の眼下に位置する寺家遺跡、あるいは邑知瀉から見て、独立台地地形の上に立地する寺院ということを意識して説明しましたが、やはりまず周囲から最初に見えるのは塔がランドマークになると思います。何を言いたいかというと、対面して立地する「寺家遺跡と一体的な関係」を強調したかったのです。古代の神祇祭祀遺跡と仏教寺院遺跡が海岸砂丘と台地と瀉湖が交差する空間でレイアウトされていて、寺家遺跡では古代気多神社の神戸の集落が広がる一方で、シャコデ廃寺跡では塔を備える伽藍がある。シャコデ廃寺跡は、寺家遺跡とセットで考えるとやはり南面すると考えられます。また、寺院が台地ぎわの南側に位置していることを考えると、邑知瀉に行く舟や周囲の沖積低地から、あるいは対面する砂丘地の寺家遺跡から見上げるような立地の意図が読み取れると思っています。この塔を大伴家持も見たのであろうと考えています。これが古代気多神社に伴う気多神宮寺であったかは、今後の研究課題です。

【松葉】一方、末松廃寺跡は現在では周囲が見渡す限りの水田というイメージがあって、あれだけの広い平野であれば、おそらく遠い所からもよく塔が見えたのではないかと思います。周辺の環境、例えば交通路や人々の往来も含めると、どのような景観であったのでしょうか。

【腰地】末松廃寺跡はフラットな地形で、かなり遠くからもお寺が見えたであろうという印象です。では何を意識して寺院を造営しているのかということですが、近くで交通路がはっきりと見つかっているかといえれば必ずしもそうではなく、水上交通では末松遺跡で人工的に溝を掘って護岸施設を造って、おそらく船で交通していたのではというような遺構が見つつかっているのです。そのような施設はあったのですが、距離も離れていますので必ずしも川、流路ありきでお寺を造ったのとは少し違うかと思っています。末松廃寺の建立には扇状地の開発が関係していると考えられますので、広く開発できる土地が重要であったということが考えられます。

もう一つ、お寺からよく見えるのが白山です。霊峰白山と言われますが、お寺から南に行くとも白山が望めます。そのような場所を選んでいるのではないかという説を名古屋大学の梶原義実先生もおっしゃっています。私も白山がよく見えるなあと思いながら、発掘調査をしているので、そのような意識もあったのではないかと感じています。

【松葉】白山の話がありましたが、特に加賀や越前などでは山林寺院の造営が盛んですよね。時期的には8世紀後半、9世紀以後が中心かと思いますが、このような山の中での宗教活動に関連するような地域性とは関係あるのでしょうか。それとも創建の古い末松廃寺跡には当てはまらないのでしょうか。

【腰地】末松廃寺を直接、そこに結び付けるのは難しいです。山の中にお堂を造って、宗教活動をするという、いわゆる山林寺院、山岳寺院が、もう少し時代が下ると加賀ではいくつか遺跡も見つかってはいるのですが、よく見える、目で確認できる、そして人がある程度往来しやすい場所にお寺を造っているという末松廃寺跡と、人があまり来ない、人目を避けるような場所にお寺を造っている山林寺院とは性格の違いがありますので、一概に直接つながっているとか、つながっていないとかを言うのは難しいかというところですね。

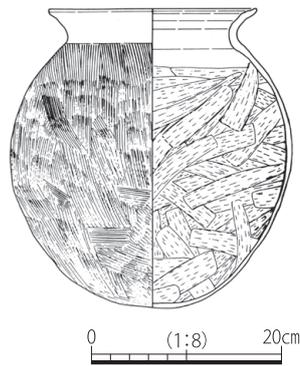
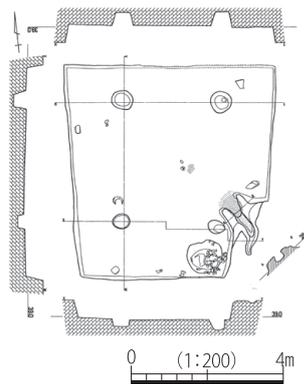
【松葉】末松廃寺跡が立地する手取川の右岸のあたりは、古代、特に奈良・平安時代の遺跡が多く発掘調査されて、腰地さんは丹波系、近江系というようにお話しされていましたが、特に白山市域の北安田北遺跡に代表されるような手取川右岸の古代遺跡は、現在の丹後地方、その中で特に由良川流域に多く分布しているような特徴的な住居と、青野型甕といわれる煮炊きに使う土師器の甕、あるいは近江系といわれる同じく土師器の甕でも外面も内面も刷毛目を施して口縁部は

受け口となる特徴的な甕が結構な頻度で出土していますよね。末松遺跡からも丹波系甕が出土しています。あのあたり一帯では外来の土器も結構多く、いわゆる地域の人達、在地の人ではなく、他の地域から地域開発のために移民としてやって来たような人達、外来勢力がいたということかと思いますが、そのような人達が寺院造営に関わることもあり得ますよね。

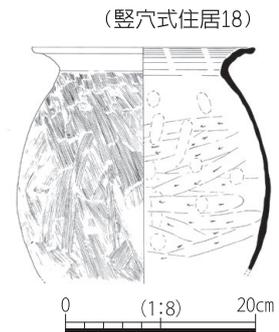
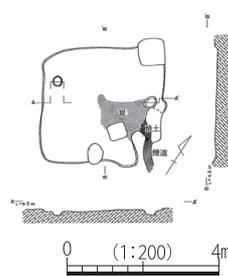
【腰地】私はありません、それもかなり関わっていると思っています。末松廃寺でも塔の北東側で見つかった竪穴建物跡がいわゆる丹波の特徴をもった構造であることが一つの根拠になるのではないかと考えています。ただ、他地域の特徴をそのままつ土器がまだ末松廃寺では見つからないので、必ずしも丹波や近江から直接入ってきたというよりは、末松廃寺の造営に対して、他地域からの移民集団と地元の人達がミックスされた状況で寺院が建立されたのではないかと考えています。

【松葉】複数の豪族勢力による、言うなれば豪族連合的な寺院造営があったのではないかというようにお話しもされていたと思います。おそらくそれはもう少し後の時代になると知識、つまり財力や労力を提供してお寺を造るというようなことにあたるのかと思いますが、ただ最近では知識に関する評価として、もう少し限定された狭いエリア、一つの小さい勢力の中で寺院を維持していくという見解が多い状況かと思いますが、あえて広域なことを想定されたということは、末松廃寺がある程度見渡せるような広い地形をもっているということも視野に置いたのでしょうか。

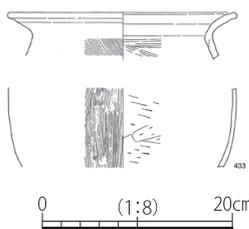
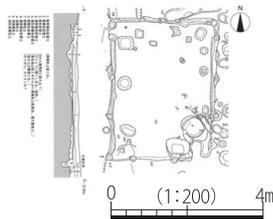
丹後・綾中遺跡SB8108



丹後・桑飼上遺跡竪穴式住居23



加賀・末松遺跡87S102



加賀・道村B遺跡S14349

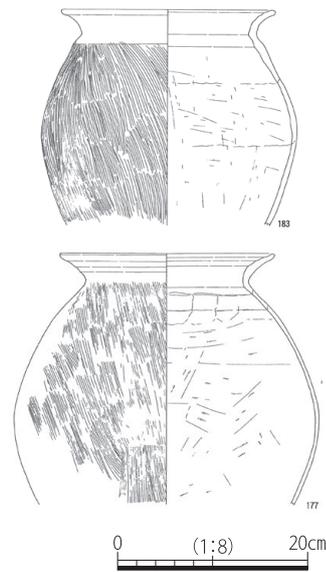
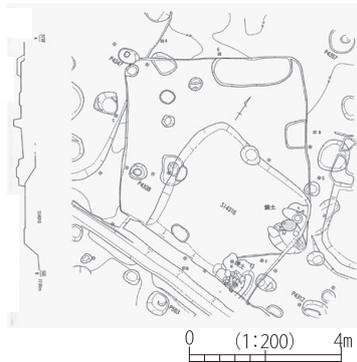


図1 青野型住居と段状口縁土師器甕

【腰地】そうですね。地形的なこともあります。そのほか、例えば柳田シャコデ廃寺跡ではすぐ近くに瓦窯がありますが、末松廃寺跡に供給された瓦を焼いた瓦窯も見つかっています。南に8 km程離れ、手取川を渡った湯屋という地区から、川を渡って瓦をもってきています。末松廃寺跡で見つかっているその当時の土器は今の能美市のあたりから運ばれていますが、もっと南の小松市からも大量の須恵器が運ばれています。かなり広いエリアから土器、瓦が運ばれていますので、狭いローカルな視点というより、もう少し広いマクロな視点で寺院の造営を考えなければいけないと思っていますところでは。

【松葉】はい、ありがとうございました。ちょうどお時間になりました。一言ずつコメントいただいて、まとめにしたいと思います。中野さんからお願いします。

【中野】皆さん、今日はありがとうございました。能登からやって来てよかったです。本当にたくさん勉強になりました。今日、私が強調したかったことは柳田シャコデ廃寺跡の場合は、寺家遺跡との一体的な関係性で理解するということです。神祇祭祀と仏教信仰の関係、それがシャコデ廃寺跡の一番の特徴で、他の古代寺院と決定的に異なる点だと思います。古代の気多神社と並存する古代寺院、つまり初期神仏習合が成立した空間、景観を伝えたかった。課題は多いのですが、発掘調査は毎年少しずつですが進めています。今年は現地説明会もやろうと強心に決めています。興味のある方は、少し遠いですが、ぜひ羽咋まで足を延ばしていただければと思います。能登立国1300年で盛り上がっている能登へぜひお越しいただければと思います。

これから興道寺廃寺も、末松廃寺跡も、寺院の史跡整備や普及活用事業が進んでいくと思います。美浜町の講座は来るたびにいつも勉強になり、刺激をいただいているのですが、このような講座とあわせて地域で史跡を活かす活動も熱心に展開されていくと思います。会場の皆さん一人一人が「興道寺廃寺ファン」になっていかれると思いますが、私達もそれを見習って、柳田シャコデ廃寺跡を地域の人に知ってもらえるように頑張っていきたいと思っています。今日はありがとうございました。

【腰地】末松廃寺跡、柳田シャコデ廃寺跡、そして興道寺廃寺と三つの寺院の話を一度に聞ける機会ということで、今日は私も勉強させていただきました。やはりこれは共通しているな、これは末松廃寺だけの特徴かなといろいろ考えましたが、いろいろと検討していく中でやはり興道寺廃寺はこれまで長年、発掘調査をされて、多くの情報が得られて、この北陸、若狭の寺院の状況がよくわかる、素晴らしい遺跡ということを改めて実感した次第です。

末松廃寺は現在、発掘調査を行っていますが、実は今年度中に発掘調査報告書を発行するという事になっています。もう一度公園をきれいに整備するための事業をしているのですが、わからないことがまだまだ多く、とても公園をきれいにする、リニューアルする事業に手をつけられない状況がありますので、もう少しお寺の様子がわかって、皆さんにきれいにお見せできるようにしたいと思っていますので、もう少し時間がかかるかなと思っています。

私は今、末松廃寺跡は昔はどのような姿であったのであろうと日々いろいろと想像しながら仕事をしているわけですが、その際に興道寺廃寺や柳田シャコデ廃寺跡がいろいろな情報をもたらしてくれています。また皆様の前でお話しする機会がありましたら、また新しい情報を踏まえてご報告できればよいと思っています。本日はありがとうございました。

【松葉】今日の講座にご参加いただき、誠にありがとうございました。これで今日の講座を終らせていただきたいと思います。(拍手)

講演

提言！興道寺廃寺跡の保存と活用

慶應義塾大学 文学部 准教授

渡辺丈彦

皆さん、こんにちは。慶應義塾大学の渡辺です。今日は「提言！興道寺廃寺跡の保存と活用」というテーマでお話しをさせていただきます。なぜ東京の私立大学の教員が美浜町でこのようなテーマでお話しをするのかと、皆さん不思議に感じられると思います。実はかれこれ10年ほど前に、文化庁の文化財調査官という仕事をしており、そのころ興道寺廃寺跡の発掘調査をご担当されていた松葉さんと知り合いになりました。文化庁の文化財調査官というと霞が関の本庁でのデスクワークをイメージしがちですが、実は1週間のうち少なくとも2日ぐらいは出張をしている仕事です。



その出張では、松葉さんのように教育委員会に埋蔵文化財の専門職として採用され、地域の資産になるような遺跡の発掘調査に携わっている方々とお会いします。そしてそのお仕事をつぶさに見せていただき、問題が発生していれば何かお手伝いできることがないかお話しを聞きます。そして把握した内容を文化庁に持ち帰り、その解決策を考えるのが文化財調査官の仕事です。その中の業務の一つには、今回、興道寺廃寺跡がそうなったように遺跡を国史跡にする仕事もありますが、どちらかと言うと出張先でお話しをお伺いし、一緒に問題解決の糸口を見つけるような仕事を中心なのです。

そのような仕事として、今から10年ほど前に福井県を訪れました。美浜町の興道寺廃寺跡がメインであったわけではなく、県内の他の遺跡をお伺いする目的ではあったのですが、その時に福井県のご担当の方から「美浜町で松葉さんが一生懸命、遺跡の調査をされているから、ぜひ寄っていきませんか」というお話しをいただきました。確かすごく寒い日の夕刻くらいと記憶しています。興道寺廃寺跡に立ち寄ると、松葉さんから遺跡や発掘調査の内容を熱心に説明していただきました。事前の情報では、興道寺廃寺跡の保存状態はあまりよくないかも知れないという話でしたが、実際に遺跡を見てみると意外と遺構の残りが良いこともわかりました。しかも遺跡の内容も豊富で、何よりも現場で説明いただいた担当者の松葉さんの熱量がものすごかったのを覚えています。福井での出張を終えて文化庁に戻り、改めて興道寺廃寺跡についていろいろ調べてみました。その結果、調査は継続中で遺跡の価値づけもこれからという時期ではあったのですが、今回のような講座やシンポジウムも頻繁に行われていて、松葉さんを中心に調査研究も長く熱心に進められていることがわかりました。この遺跡で何かできることはないか。その後、文化庁から奈良文化財研究所を経て慶應義塾大学の教員になりましたが、これが松葉さんの熱気に引きずられて10年ほど興道寺廃寺跡の発掘調査に関していろいろとお手伝いをさせていただくことに

なったきっかけです。

2002年から15年近い辛抱強い発掘調査が続き、その成果として興道寺廃寺跡の全国的価値が高まり、そして今年、ついに国指定史跡になりました。国指定史跡と言えば「国の歴史を語る上で欠かすことができない重要な遺跡である」とよく言われます。しかしそれ自体はあまり重要ではないと思います。国指定史跡になることの意味とは何か。史跡になった瞬間、ほぼ未来永劫、その遺跡は破壊から免れていくということが実は重要です。今後、史跡をどのように継承するのか、この遺跡をどのように我々の子孫に残していくのか、そしてどのように活用していくべきなのかということ、今日はお話したいと思います。

1. 文化財保護法にみる文化財保護の理念

最初は少し堅いお話から入りますが、最初に文化財の保護とはどうあるべきなのかという理念をお話して、その後、具体的な事例を紹介しつつ、興道寺廃寺跡の保存と活用がどうあるべきかということをご説明したいと思います。

我々、遺跡の調査・研究、保存・活用などの関係者が従う法令は、国内には一つしかありません。フランスなど外国では複数の法令の組み合わせの中で遺跡の保護を行っています。しかし日本の場合は戦後すぐにできあがった「文化財保護法」という一つの法律で、全ての遺跡の保存・活用の理念が示されています。多くの法律はその1桁目の条文で大切なことが全て言い尽くされていますが、文化財保護法もその例に漏れません。

文化財保護法の第1条には、「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」と示されていますが、実はこの第1条が特に重要です。私も皆さんも何となく曖昧に「文化財の保護」という言葉を使います。この条文を読むと、保護とは文化財を積極的に保存し、公開活用することなのだわかります。遺跡を守るという保存だけではなく、それに加えて活用までして初めて保護になるということ、文化財保護とは何かということはこの最初の一文で明瞭に規定しています。

例えば今日は遺跡のお話しをしています、皆さんの家にもさまざまな文化財があるかと思えます。それは家の中で、例えば蔵や金庫の中で、大切に保存されていると思います。しかしそれだけでは文化財を保護していることにはなりません。財産権に抵触する微妙な話ですが、文化財保護法や、その前身になる法律では一貫して公開の義務も説かれています。保存と活用の片方だけで良いというわけではなく、この二つのことが遂行されて、初めてそれが文化財の保護につながる、いわば保存と活用は文化財保護の両輪なのです。

文化財保護法の第2条は保護対象とする文化財の種類の説明なので割愛しますが、その前後にはこの法律が目指す方向性が良く示されています。第1条には「国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献する」、第3条には「文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないもの」「将来の文化の向上発展の基礎をなすもの」と書かれています。文化財の保護というと、どうしてもその視点は現在や過去に向かいがちです。しかし保護法に示された内容はどう見ても後ろ向きの視点ではありません。現在を生み出したのは歴史としての過去であり、現在を知る上で過去の探求は不可欠であるという原則に基づき、新しい未来を創造し、発展させる基盤としての過去を捉える必要があることが、保護法には良く示されています。

簡単に言ってしまうと、文化財保護の理念の示す方向性は、過去、現在ではなく、あくまで未来を見据えたものだけということ。その後、興道寺廃寺跡の今後の保存・活用のあるべき方向

性についてお話しをしますが、その内容は未来を見据えるという視点がメインになると思っています。ただければ幸いです。

また文化財保護法の示す内容として重要なのは、文化財の保護を行うべき主体、つまり担い手がはっきり示されている点です。第3条「政府及び地方公共団体の任務」には「政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切に行われるように、周到の注意をもってこの法律の趣旨の徹底に努めなければならない。」と書かれています。この中では文化財を守る主体が政府や都道府県・市町村などの地方公共団体であるということも明瞭に規定しています。しかも重要なのは、単に文化財は大切に、守らなければいけないという理念だけを伝えるのではなく、具体的な施策でもって保護を行わなければならないと示していることです。言葉や考え方だけではなく、具体的な行動をおこす重要性が説かれています。

では、国や地方公共団体だけが文化財保護の担い手なのでしょうか。それでは足りません。第4条「国民・所有者等の心構え」の第1項には「一般国民は、政府及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するために行う措置に誠実に協力しなければならない。」、また第2項には「文化財の所有者その他関係者は、文化財が貴重な国民的財産であることを自覚し、これを公共のために大切に保存するとともに、できるだけこれを公開する等その文化的活用に努めなければならない。」と書かれています。単純に言えば、文化財の保存と活用は国や地方公共団体だけが行うべきものではなく、一般国民も共にそれを達成できるように頑張るべき、所有者も含め国民全体で文化財の保存と活用を図りましょうと説いているのです。家の中に昔の高価な壺があれば人は皆それを見て嬉しく思い、それを後の子孫に守り伝えようと思います。しかしそのような文化財はたまたま自分の家に偶然の産物として存在しているにすぎません。本来は公共のためのものであることを認識し、可能であれば公開・活用に努めることも内容と考えてください。

ちなみに、京都や奈良のお寺さんに行くと拝観料を取られることがあります。公共のために活用に努めなければいけないというのに拝観料を取るのはおかしい、違うのではないかと思われるかも知れません。ただ、それはお寺さんが利益を得ようとして拝観料を徴収しているわけではなく、寺院の建物や仏像などの修理に必要な費用を賄うためのこととご理解ください。

まとめますと、重要なのは文化財の保護には保存と活用の両輪にあること、そして見据える視点が未来にあること、そして文化財保護の担い手は、行政、いわゆる国や地方公共団体だけではなく、国民や所有者全員も含まれること、この三点を強調しておきたいと思います。

2. 埋蔵文化財とは

「埋蔵文化財」という単語は、聞き慣れない言葉ですので、初めに解説します。文化財保護法には遺跡、遺物という言葉はあまり出てきませんが、これらとほぼ似た内容として、「埋蔵文化財」という言葉が出てきます。簡単に言えば、土地に埋蔵されている文化財という意味ですので、ほぼ遺跡、遺物と考えていただいてもかまいません。ちなみに遺跡は不動産文化財、遺物は動かせる動産文化財という位置づけです。

埋蔵文化財として知られている土地を「周知の埋蔵文化財包蔵地」と言います。これは遺跡と言い換えることもできますが、日本にどれぐらいの数の遺跡があるかと言うと、実は47万か所以上あります。文化庁は3年か4年に1度、地方公共団体、特に都道府県にアンケートを取ってこの数の確認をしています。松葉さんもそうかと思いますが、教育委員会の担当者はすごく丹念に

その管内を歩かれています。そして、どのような場所に遺跡があるのかということもちゃんと把握しています。場合によっては、今まで見つかっていなかった遺跡が見つかることもあり、毎年遺跡の数が増えているので定期的な統計調査が必要なのです。47 万か所という数は膨大で、各県に 1 万か所ほどの遺跡がある、国土面積では 1 平方 km あたりに一つの遺跡があるという計算になります。日本は世界でも冠たる遺跡の分布密度と言われていますが、それは日本に遺跡が多く、外国の遺跡が少ないということではありません。本当は外国もおそらくそれくらいの密度で遺跡があるのだと思います。日本では文化財専門職員の方々がいかに丹念に管内の遺跡の周知把握に努めているかということを示しています。

世界でも例を見ないぐらいに遺跡があるわけですが、それだけにその扱いは大変です。遺跡のある場所を外して開発行為を行うことができれば、それは幸せなことかも知れません。しかしそれでは普通の国民生活は成り立たないので、遺跡がある場所で開発行為が計画されると発掘調査が必ず行われます。重要な点ですが、言ってみれば通常は土地に埋没している、土の中にあるために、遺跡や遺物は開発行為に対して脆弱な存在です。常に各種の開発行為による破壊の危機に直面しているということが、埋蔵文化財、つまり遺跡や遺物のかかえる大きな問題と言えます。

この脆弱な遺跡や遺物、埋蔵文化財を守るためにどのような対応が行われてきたか、時代を少し遡って見ていきましょう。まさに高度経済成長期を支えられた先輩方が会場には多いと思いますが、その時期に宅地開発や工業団地などの造成、高速道路や幹線鉄道などの大規模な国土開発が進みました。大規模な開発が進むと記録保存の発掘調査の増大が起こります。遺跡をそのまま壊さずに地中に残すことが最善ですが、開発事業を止めてしまうわけにはいきません。そこで遺跡の存在とその内容の記録を後世に残すための発掘調査を行うことがあります。聞き慣れない言葉かと思いますが、これを記録保存調査と言います。開発が進んでいくと、この記録保存調査の数が増加します。

このような調査は、当初は私のような大学の考古学研究室に所属する人間が行っていましたが、それでは手が足りなくなり、地方公共団体、つまり都道府県や市町村に発掘調査のための体制が整備されていきました。美浜町教育委員会の松葉さんのような埋蔵文化財専門職員が発掘調査に対応するため配置されていくこととなります。現状では全ての都道府県、そして3分の2以上の市町村に遺跡に携わる専門職員が配属されています。平成 29 年度の段階で地方公共団体に所属する、いわゆる公務員、または準公務員にあたる専門職員が 5647 人おられ、平成 28 年度は発掘調査に 602 億円の費用が使われました。ただ、バブル経済の崩壊前はもっと多く、もう 1 桁上の数値だったのですが、現在はかなり落ち着いてきています。

このような体制のもと開発行為に対応した記録保存のための発掘調査を行われてきました。総体として見れば開発を前提とした発掘調査を円滑かつ迅速に実施するということが最優先課題にせざるを得なかったわけです。しかし埋蔵文化財はやはり土地に深く結びついた、地域色のあるものであり、地域の歴史や文化を復元することができる格好の重要な資産です。それゆえに教育素材としても使うことができ、さらに自分達の住んでいる地域に、このような歴史的に重要なものが眠っていた、そのような豊かな場所に自分達は住んでいるということが認識できれば、それは地域づくり、人づくりに活かすこともできます。このような埋蔵文化財を活用しない手はありません。そもそも活用しなければいけないことは文化財保護法の理念のところで先ほどお話しした通りです。

ところが、日々、大変な発掘調査に追われてしまい、その活用が全く手につかない状態でした。それを行っていた専門職員の方もいましたが、その多くは個人的、献身的な努力の結果であり、例えば仕事が終わった後、夕方5時以降も残業し、または土日に出勤して行っていたというのが現実です。本来やらなければいけないもう一つの活用ができていなかったのです。そこでもう10年くらい前になりますが、文化庁は、保存と活用の両立が実現できない状況に危機感を覚え、活用をもう少し頑張ることを目的に、埋蔵文化財を積極的に保存・活用するための提言を各有識者の先生方にまとめていただきました。その中では、繰り返しになりますが、埋蔵文化財は土地に密着する地域のシンボルであること。どこに行っても同じような遺跡、同じ遺物があるわけではなく必ず地域性を反映していること。このような遺跡は、地域的なアイデンティティを確立する、シンプルに言えば地域への誇りや愛着を持つ格好の素材となること。これらを上手く利用していけば、歴史を活かした個性豊かなまちづくり、地域づくりにも上手く役立てていけること。そしてこのような埋蔵文化財を活かした地域づくりは、行政だけでなく地域住民の皆さんと一緒に進めていくことが提言されました。

先ほど、今日の講演の視点はどちらかと言えば未来にあるというお話しをしましたが、もう一つの視点がここにあります。今日はさまざまな遺跡の保存と活用の事例をご紹介しますが、それを行うのは行政だけでだめで、住民の皆さんとの協働が大切であると言えるのではないのでしょうか。

3. 埋蔵文化財のさまざまな保存活用

(1) 埋蔵文化財の活用(ハード事業)

まず、遺跡の保存とはいかなるものなのかということ、国指定史跡を例にお話しします。長年の調査・研究の末に遺跡は国指定史跡になります。しかし多くの場合、その場所は公共の土地、公有地ではなく、まだ生活、農業を営んでおられる方もいらっしゃいます。史跡になったので保存をと考えても、前からその土地を利用している方の生活圏を侵害するような仕組みにはなっていません。ですので、最低限の折り合いをつけた形での保存ということになります。しかし史跡の破壊が今後、全く起こらないようにするにはやはり土地を公有地化するのが一番です。そのため土地の所有者の方との長い話し合いの末に、行政が土地を公有地化する場合が多くあります。そして公有地化が終わると、埋蔵文化財のハード的な活用として史跡公園として整備されるのが一般的です。

しかし、日本中のいろいろな史跡に行くと、ここは遺跡なのか、それともお花畑なのかよくわからないところも結構あります。標柱に〇〇史跡、〇〇〇史跡公園などと書いてなければ全くわからない。それでも公有化した場所を史跡公園として管理しているケースは多くあります。ちなみに最近結構お花畑が盛んで、良い意味ですごく手の込んだお花畑にしているところもあります。福岡県には有名な古代遺跡「水城」という遺跡があります。7世紀に朝鮮半島との関係が悪化した時に、いつ唐と新羅が攻めてくるかわからない状況で作られた大規模な防御施設です。規模の大きな史跡ですので、一気に全てを公有地化はできません。ただ、毎年少しずつ頑張って公有化した土地にコスモスの種を植えています。すると毎年ある時期にコスモスの花が一斉に花開らき、地域の人達が史跡の公有地の範囲の広がりを感じられる仕組みになっているのです。

話を史跡公園の整備にもどしましょう。史跡を一般の公園のように整備しても、そこにどのような遺跡があったのかわからないので、良く行われるのが遺構標示という手法です。例えばその場所に建物があつたことがわかれば良いので、その建物の柱位置などが表示されます。奈良県の

平城宮跡ではさまざまな手法がとられ、実際の遺構に土を盛って保護し、そのうえに強化プラスチック製の礎石を置いたり、柱状に剪定した植木を置くなど植栽管理をして、このような柱があったという感じで遺構を示したりもします（写真1）。



写真1 平城宮跡遺構表示

また、大変な作業になりますが、見つかった遺構をそっくりそのまま生で見せる方法もあります。以前話題となった宮城県富沢遺跡では、旧石器時代の森が当時のままに見つかり、鹿の糞や石器も出土しました。旧石器時代の環境を見せる上で重要な遺跡ということで、全て科学処理を施して当時の状況を見ていただけるようにしています。



写真2 平城宮大極殿建物復元

史跡に来られた方の理解を更に深めるため、吉野ヶ里遺跡では遺構を完全に復元する方法を取っています。しかし建物の復元はものすごく大変です。例えば平城宮の大極殿を造る時にご苦労が多かったと聞いています。発掘調査の結果からは基壇規模など限定的な情報しか得られず、建物の構造が細かくわからなかったからです。国特別史跡の復元展示に信頼性を持たせるために多くの調査研究が行われました。文献史料ではどうなのか、少し後の平安時代の例はどうなのか、奈良時代の建物はどのような構造なのかといったように、さまざまな研究が行われた結果として、現在の大極殿復元建築が許可されたのです（写真2）。

このように史跡公園の整備においては、来場される方のイメージを膨らませるため、遺構表示、遺構展示、遺構復元などさまざまな手法がとられます。しかしイメージを膨らませるだけで良いのでしょうか。数年前、私が国営吉野ヶ里歴史公園を訪れたときはものすごい数の観光客が訪れていました。この公園では国土交通省が直接運営管理を行い、例外的とも言える大規模な整備がされています（写真3）。

これだけの大規模な整備の結果、開園直後の平成13年に爆発的に来場者が集まりました。初年度の入園者数は実に68万人です。ところがその後、どんどん来園者が減ってしまいます。毎年10万人ずつ減って、実は3年間で3分の2まで減少してしまいました。これだけの大規模な整備を行ったにもかかわらず、どんどん来園者の数が減ってしまう。ハードの整備だけではだめで、飽きられてしまう。当初の熱気も記憶も失われていくのです。

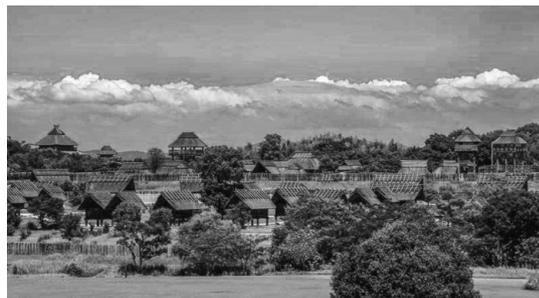


写真3 吉野ヶ里歴史公園

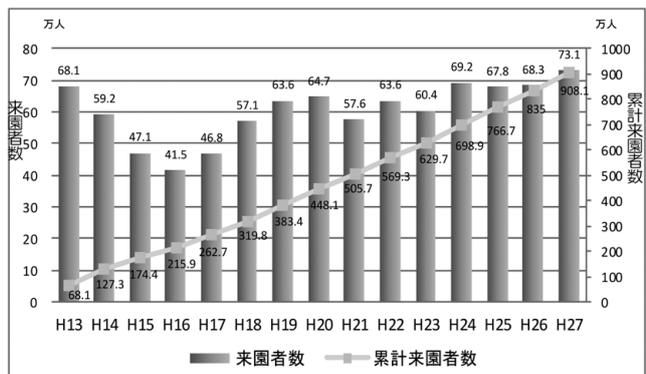


図1 吉野ヶ里遺跡来園者数の推移

ところが、平成16年に来園者数はV字回復します。ちょっとした落ち込みはありますが、平成27年の段階では初年度よりも多い観光客を迎えることに成功しています(図1)。この理由には二つの説があります。一つは、元々、この国営吉野ヶ里歴史公園は全域をオープニングしていたわけではなく、残りの部分をオープンしたのが平成16年であったからと言われていました。しかし実はそれが主要因ではなかったとする説があります。主要因が何かと言えば、遺跡を活かしたソフト事業の展開にあり、弥生時代の服装をして行進したり、建物の中で体験学習をしたり、歴史にまつわるさまざまなプログラムも用意されたのがこの年でした。また遺跡を歴史的な存在として使うだけでなく、気球のコンテストを誘致するなど気軽に訪れることのできる場所としてのアピールも進みました。個人的な考えではありますが、活用事業は遺跡をハードの面だけで復元していけば良いわけではなく、もう一つ重要なのはこのようなソフト事業、活用事業を必ずセットで組み入れていくことと考えています。

(2) 埋蔵文化財の活用(ソフト)

では、どのようなソフト事業があるのか、簡単にご紹介します。これが全て良いということではありませんが、オーソドックスなものをいくつか挙げておきましょう。

一つは体験学習。皆さんも遺跡公園に行くと体験スペースがあり、例えば勾玉や土器、石器作りなどのイベントが行われている様子をご覧になったことがあるかと思います(写真4)。また遺跡発掘の速報展のようなイベントも、ある意味では活用事業の一環です。日本では年間8千件の発掘調査が行われ、発掘調査の予算は600億とお話ししましたが、誰がその費用を出しているのかと言えば、突き詰めれば国民の皆さんです。公共事業を原因とする発掘調査に必要な費用は、皆さんの税金から出されているのです。ところが、そのように発掘調査の費用を皆さんが十分に負担しているにも関わらず、すぐにその成果を知ることはできません。そのために近年では、遺跡から出土した遺物の重要性を速やかにお知らせすることを目的に、発掘速報展が盛んに行われています(写真5)。この速報展もだいぶ定着してきましたが、近年はその内容も少し様変わりしてきました。多くの場合は、皆さんに博物館や文化施設にお越しただく形になります。しかしそれではなかなかお集まりいただけないこともあり、最近の流行としては逆に打って出る、来ていただけないのであれば、皆さんがいるところに出張するというので、ショッピングセンターの一角をお借りして速報展をするような取り組みも行なわれています。

出前授業も文化財の活用の一つです。これもまた「打って出る」型になります。教育委員会の埋蔵文化財専門職員が地域の学校にお伺いし、お子さんに体験学習をしてもらったり、速報展のような内容をお話ししたりします。ただ、これもいろいろと問題を抱えています。地域の中には普通は多くの学校があり、お子さんもたくさんいます。しかし埋蔵文化財の担当職員が1人で全ては回れません。では、どうしたらよいのか。学校の先生に授業の仕方を覚えていただき、それを学校でやっていただくというような間接的な形も最近よく行われています。その際には、学校の先生が授業を行う際に使



写真4 勾玉作り(美浜町歴史文化館)



写真5 発掘速報展(美浜町歴史文化館)

うマニュアルや教材を作ったりすることも多いようです。

関連した歴史的なイベントの実施も活用の一つのあり方ですが、有名などころでは2010年に行われた平城遷都1300年祭があります。平城宮の大極殿院では、奈良時代に関連する歴史イベントが行われ、復元された大極殿がさまざまな形で利用されました。

このようにさまざまな形でソフト的な活用事業が展開されていますが、少し気になる点もあります。例えば縄文時代の遺跡で、勾玉を作る体験学習をしているところもよく見かけます。歴史に触れるきっかけ作りとしては大きな効果が期待できます。しかしその内容が遺跡の内容や価値に直結していないケースも多くあり、そのバランスをどうとるのが今後の大きな課題と言えます。

4. 地方古代寺院の保存活用事例

(1) 地方の古代寺院の整備・活用のイメージ

今回の講演では、興道寺廃寺跡という古代寺院の保存・活用についてお話をいただいていますので、ここからは興道寺廃寺跡の保存・活用をどのように進めたらよいかという観点から話を進めていきたいと思えます。

興道寺廃寺跡はめでたく国の史跡になりましたが、同じような飛鳥時代、奈良時代のお寺が全国でどれくらい史跡指定されていると思えますか。有名どころでは聖武天皇の勅によって造られた奈良時代後半期の国分寺、国分尼寺が全国各地にあります。文化庁のホームページで検索をかけ、簡単に統計を取っただけなので、数値には若干の誤りもありますが、全国で史跡指定された国分寺と国分尼寺は合わせて52遺跡あります。さすがに大規模な遺跡が多く、指定以後の歴史も長いものが多いため、史跡公園等の整備が進んでいるものが多い印象です。その一例に千葉県の上総国分尼寺があります。基本的な整備の手法は、遺構の平面表示ですが、一部は復元展示も行われ、ガイダンス施設も作られています。ソフト事業も活発で、体験学習や歴史イベント、あるいは直接的には関係性が薄いですが物産展なども行われ、さまざまな形での遺跡の活用が行われた結果、短期間で入館数が30万人を超え、賑わいを見せています。次に美浜町から多少近い場所にある例としては三重県鈴鹿市の伊勢国分寺を紹介します。この史跡も案内板に加えてさまざまな工夫をこらした遺構表示が行われています(写真6)。また史跡の外に事実上のガイダンス施設としての「鈴鹿市考古博物館」があります。ここを拠点として活用のためのさまざまなプログラムが用意され、それを楽しみにする来館者も多いようです。ここまで二つの例を紹介しました。いずれもソフト・ハードの両面で多彩な事業を展開し、人の集まる場となっています。少しだけ気になるところは、内容が良く似た遺跡だけに個性的な事業が打ち出しづらいことです。遺跡にはいろいろな性質があるので、それにあわせて画一的ではなく、いろいろなやり方があっても良いと思っています。

興道寺廃寺跡の話につなげるために、同じような性格を持つ古代寺院の保存と活用を次にお話します。ただ興道寺廃寺跡は、郡の役所に付属する郡寺という評価がなされているので、平安時代や中世の山林寺院は含まないこととします。飛鳥・奈良時代の郡レベルの地方寺院で史跡指定を受けているものは、55遺跡ほどあります。基本的に国分寺や国分尼寺は旧国で各国に1寺ずつしかありませんが、郡寺は現在の感覚で言うと各市町村に一つずつある感じで



写真6 伊勢国分寺跡

す。当時、全国にどれほどの郡と郡寺があったのかはカウントし忘れましたが、史跡指定された地方の古代寺院は55くらいしかありませんので、興道寺廃寺跡はとても希少な存在と言えます。

今日は松葉さんから興道寺廃寺跡の素晴らしさをたくさん語ってくださいと言われていました。ご来場の皆様はすでに良くご存知の方が多いと思いますので、あまり多くは語りませんが、興道寺廃寺跡の素晴らしさはその希少性に加えて、創建から廃絶に至る各時期の状況が全てわかっていること、そして全体として良好に保存されている点にあります。先ほどの地方寺院55遺跡の中には、「〇〇廃寺跡」という名称ではなく、「〇〇廃寺塔跡」、「塔跡礎石」という名称を持つものが多くあります。そのような史跡は古い時期の指定が多いのですが、寺全体ではなく、その中の一部の塔やその心礎だけが指定されているのです。このようにお話しすれば、興道寺廃寺跡の素晴らしさをより理解いただけるかと思います。

次にそれぞれの地方寺院でどのような整備が行なわれているのかについてお話します。実際に見たことのある例を説明できれば良いのですが、行ったことのない遺跡も少しあり、それについては公式ホームページの内容や写真などをもとに調べた結果とご理解ください。具体的には、史跡名の記された標柱の有無、解説案内板の有無、遺構表示の有無、復元建物の有無、ガイダンス施設の有無という観点でお話しを進めます(図2)。

史跡で良く目にする標柱は、細長い石材の正面に「史跡〇〇遺跡」などと書かれてあり、大概その裏には指定された年月日が書かれます。この標柱を置いているところは65%、置いていないところは34.5%という比率です。また標柱の横には解説案内板が設置されることが多くありますが、史跡名を記した標柱の役割を兼ねるものもあり、設置されている史跡は87%と多めです。ところが、遺構標示となるとその数は極端に減りわずか25%となります。案内板で補助的に遺構の様子をイメージできる場合もありますが、そうでない場合、どこにどのような遺構があるのか全くわかりません。ましてや復元整備はハードルが高く、実は復元整備を行っているところは1遺跡だけでした。また遺物を展示し、遺跡発掘の歴史を詳細に説明するガイダンス施設が設置される例も極端に少ないようです。

一方、奇跡的にこれらが全て整っている遺跡もあります。三重県名張市の夏見廃寺です。お寺の全域ではありませんが、かなりの部分が史跡として保存され、案内板や標柱もあり、平面表示も行われています。また史跡指定地外には、駐車場や展示館、ガイダンス施設もあり、すべてが備わった整備ですが、このような遺跡はあくまで例外的な存在と言えます。

ここまでハード面での整備の状況をお話ししましたが、次にソフト的な活用事業の実施状況について見てみます。これについては残念ながら、実際現地を見た印象でも、後にホームページ等で調べてみた印象のいずれでも、あまり活発に行われている感じはしませんでした。吉野ヶ里公園がそうでしたが、ハードの部分を整え、その時の熱気があるうちは皆さんよく現地に来てくれます。しかしその熱気が冷めたあとを支えるのがソフト的な活用と考えているので、一つの課題だと考えています。

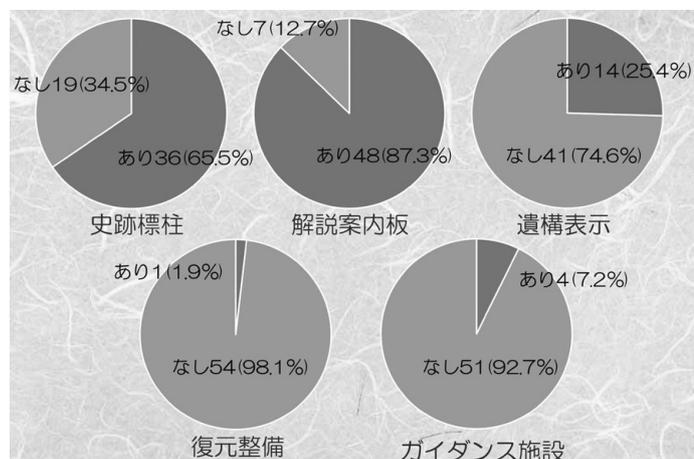


図2 地方の古代寺院の整備事例

ここまでのお話しで、皆さんも地方の古代寺院、郡寺の整備の活用のイメージはでき上がったと思います。多くの古代寺院の史跡の整備・活用のイメージとは「標柱と案内板があり、その向こうには広々とした田園風景が広がっている」というものであり（写真7）、いくつかの例外を除いては有効活用が十分に図られず、地域住民に大切にされる存在にはまだなりきっていないというのが現状と言えます。



写真7 但馬国分寺跡

（2）地方の古代寺院の整備・活用の新たな流れ

ただ近年、この流れも大きく変わり、平成30年3月に福島県須賀川市の史跡上人壇廃寺、鳥取県琴浦町の特別史跡斎尾廃寺など意欲的な古代寺院の保存活用計画書が相次いで発行されました。ちなみに興道寺廃寺跡でも今年度から保存活用計画の策定という段階に入っています。

今日は時間がないので斎尾廃寺を簡単にご紹介したいと思います。遺跡のある鳥取県琴浦町は面積139.97平方km、人口が16,800人、人口密度が1立方kmあたり120人、基幹産業は海辺の町ということもあり漁業もありますが、基本は農業です。役場職員223人、予算規模98億円。どこかの町に似ていませんか。面積と人口、人口密度は若干、琴浦町の方が多いですが、日本海側にあるということも含めて美浜町と良く似た町と私は思っています。

琴浦町には、斎尾廃寺という重要な歴史的な資産があります。東に金堂、西に塔が建つ「法隆寺式」の伽藍配置を持ち、東西160m、南北250m、4万㎡の寺域を持っています。金堂・塔は基壇と礎石が残り、講堂は礎石、中門は基壇が遺存するなど、遺構の保存状態は抜群に良好で、昭和27年に国の特別史跡にまでなっています（写真8）。至近の位置には郡の役所である史跡大高野官衙遺跡があり、それに付属する郡寺「八橋寺」と推定されています。郡寺という性格も興道寺廃寺跡と同じと言えます。

これだけの豊かな内容を持つ琴浦町の斎尾廃寺ですが、残念ながら史跡としての整備・活用はこれまであまり進んでいませんでした。その理由は、まだ営農活動をされている方も多く、史跡の公有地化が進んでいないため、整備しようと思ってもできなかったからです。しかし、琴浦町は大変頑張っていて、出来ることは積極的に進めてきました。例えば教材にして学校教育に活かす「郷土の歴史学習資料集わたしたちのふるさと琴浦町」という副読本を作ったり、現地では実際に遺構標示を見せることができないので、斎尾廃寺復元CG映像を作ったり、さまざまな形で遺跡を皆さんに知らしめるようなプログラム、取り組みが行われています。しかも白鳳館という名前のガイダンス施設も置いています。

実はこのような状況もまた、美浜町の興道寺廃寺跡とよく似ています。興道寺廃寺跡では、皆さんご存知のとおり今でも茶畑が続けられている方がおられます。また史跡になる前の整備状況は、最低限の案内板のみであり、遺構標示をするような状況にはまだ至っていません。



写真8 特別史跡斎尾廃寺跡

一方、本日の講演会場である歴史文化館で

は、興道寺廃寺跡に関する展示があり、遺跡の内容の豊かさを皆さんにアピールするための企画展、講演会、シンポジウムも矢継ぎ早に行っています。また美浜町独自の取り組みではありませんが、文化遺産カードを発行して地域の歴史遺産を巡るカードラリーも行われ、遺跡に人が集まるための意識づけとも言えるべき取り組みも行われています。ハードの部分はなかなかできなくとも、ソフトの部分で頑張っています。琴浦町と美浜町の二つの町に共通するのは、まだ公有地化が済んでいない史跡でのハード事業の展開が現状では困難なこと、しかし教育委員会の担当職員の方々のご努力、周りの住民の方々のご協力によって、ソフト事業がそれなりに大きく展開している点と言えます。

それだけに私は琴浦町の斎尾廃寺の保存活用計画の中で示された方向性は、興道寺廃寺跡の今後の活用を考える上で重要だと考えています。この保存活用計画書の第9章には活用と整備の方向性が事細かに書かれています。ちなみに、琴浦町のホームページにアクセスすると、この保存活用計画書の全文がダウンロードできますので、興味のある方は読んでみてください。結構ワクワクする保存活用計画書です。

この保存活用計画書の中で特に強調されているのは教育であり、斎尾廃寺を、子供達に対する教育だけではなく、社会教育という意味での利用ができる素材として、更にはまちづくりや人づくりに資する存在として位置付けています。そのため、目指すべき遺跡公園は、一部の歴史好きの人間のためだけの場所ではなく、地域の人々全体が集い、交流し、憩うことのできる場として活用する方向性が示されている点も特徴的です。

またこの計画書では、最近よく話題になる遺跡の観光資源化にも注意を払っています。遺跡の観光資源化は、先程の「まちづくり」にも大きくかかわる内容であり、斎尾廃寺だけではなく大高野官衙遺跡をはじめとする町内の他の重要遺跡も含めた一体的な活用方法を模索しています。さらに観光資源としての価値を高める方法として、同種の歴史資産を持つ自治体同士の交流イベントの有効性も示していますが、このような方法は、興道寺廃寺跡のある美浜町でもできることです。古代の郡寺を持つ市町村が集まって交流し、目指すべき調査研究や活用の姿を議論しても良いと思います。

一方、具体的な史跡整備の方法については、遺構の保存、展示表示、環境整備の在り方などについてさまざまな提言が行われていますが、今後の興道寺廃寺跡の活用を考える上でも参考にすべき点が多いと感じています。特に参考となるのは、史跡の整備活用を行う主体を誰にするのかという点です。整備活用の主体は、行政組織としての琴浦町、地域住民、研究者などさまざまな人々が想定されますが、琴浦町は行政が主体となるスタイルはとらず、あくまでも「市民との協働」を前面に押し出しています(図3)。整備活用の具体的な計画策定と実施の際には、地域住民に積極的な協力を求めることにしてあり、そのために行政、住民共同の管理運営協議会が作られることになっています。興道寺廃寺跡の管理活用に際しても、行政だけ、

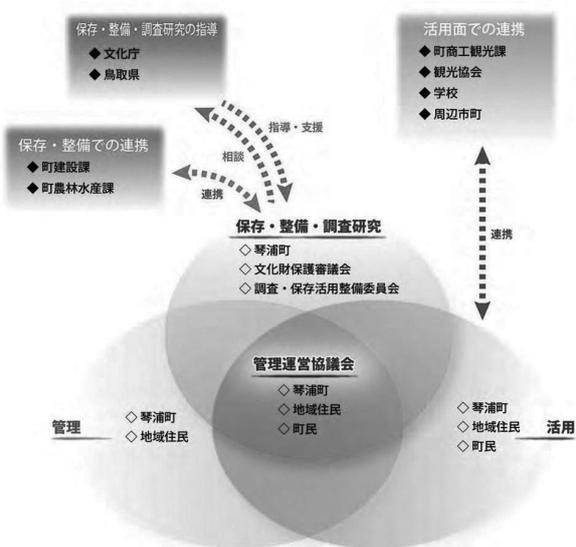


図3 特別史跡斎尾廃寺跡 運営体制イメージ

住民だけという形ではなく、このようなスタイルで進めていただきたいと思います。

5. 提言！興道寺廃寺の保存と活用

(1) 遺跡の維持・管理の在り方

このように、遺跡の維持・管理を行う際の、地域住民・行政・専門家の関係はさまざまです。例えば専門家と行政によって遺跡の維持管理活動にあたり、それを住民がサポートするというスタイルがあります。また琴浦町のように行政、専門家、住民が対等な形で協働するスタイルもあります。更にはもっと革新的な手法ですが、住民が基本的な維持管理活動にあたり、行政がそれを後方からバックアップするという方法もあります。このように住民、行政、専門家のさまざまな協働のスタイルがありますが、地域にはそれぞれの事情があり、どれが良いとは一概には言えません。しかし地域住民を主体とした遺跡の維持・管理は、現状ではもう不可欠な視点と言えます。

この住民との協働ということを考える上での参考として、史跡地蔵田遺跡環境整備事業を紹介したいと思います。地蔵田遺跡は、秋田市南東部の御所野台地にあります。このことは後に重要な意味を持つのですが、発掘調査のきっかけはニュータウンの建設でした。農村の真ん中に大きなニュータウンを造るという計画であり、昭和60年に秋田市教育委員会が発掘調査を行ったところ、旧石器から弥生時代の遺跡であることがわかりました。特に注目されたのは木の柵で囲まれた弥生時代前期の集落であり、土器には北九州の影響を受けたものもありました。東北日本の沿岸部に早くから弥生文化が伝わったということを示す重要な遺跡であることがわかり、その部分は公園として保存、平成8年11月6日には国史跡に指定されました。

遺跡の重要さゆえに現状保存と史跡指定がなされたわけですが、このことは新たなまちづくりを進める上で大きな意味を持ちました。新たにできたニュータウンは、文字どおり新たに建設されたもので、新たな住民同士、あるいは周囲の元からの住人との間には協働で紡いだ町の歴史がありませんでした。そのような中で、町の中核にある史跡地蔵田遺跡の整備活用は、住民同士が共同で新たな町の歴史をつくる格好の舞台となりました。その整備活用は、行政側が整備したものを市民が活用するという行政主導型整備というスタイルは取りませんでした。市民が中心になって整備から参画し、活用していくという市民参加型整備をコンセプトにしました。秋田市教育委員会の担当職員の方々のご努力、ご苦勞も並大抵のものではなかったはずですが、市民参加型の史跡公園づくりという、文化庁でも初めて目にする事業が始まります。復元家屋の茅葺きなども住民の方々が参画して行われましたが、特に斬新であったのはさらに一歩進んだ、息切れしない、持続可能な史跡の整備活用を目指した点にあります。

この事業で中心的な役割を果たしたのは、中高一貫校である秋田市立御所野学院中・高等学校の生徒であり、彼らは郷土学習の生きた材料として史跡を活用しながら公園整備を行いました。将来につながる持続可能な活用を行うために、地域の子供達を整備の主役に据えたのです。御所野学院中・高等学校は名称こそ私立中高一貫校のイメージですが、ニュータウンの建設にあわせて造られた公立校です。ニュータウンの中には秋田市立御所野小学校が1校ありますが、その卒業生は御所野学院中学校に無条件で入学でき、かつ中学校、高校と通い続けることができます。



写真9 地蔵田遺跡復元集落内

まさに地域の子供を育てるための実験的な学校であり、1学年の生徒数もわずか50人と少なくなっています。この学校では町の歴史を上手く利用しながら、町の未来を担う子供達を育てるという考え方があります。学校の基本理念は「伸びゆく秋田と共に学ぶ学校 世界を見据え、郷土秋田を学びの糧とする」、建学の精神は「国際的な視野に立つ新しい時代の郷土秋田を切り拓く人材の育成」です。目指す生徒像は「国際感覚を身につけ、主体的に学ぶ生徒、秋田の発展に夢を馳せ、郷土の歴史と文化を学ぶ生徒」であり、その実践として総合的な学習の時間に「郷土学」という授業を行っています。



写真10 木柵復元体験(埋め込み)

このように地蔵田遺跡の整備活用には子供達を中心になって行われましたが、その内容はかなり本格的です。具体的には、体験学習教室でしっかり勉強したうえで実際の作業に参加し、その際にも当時の部材に近い材料を使用して正確な位置に復元を行っています。その結果、最終的に住居3軒、木柵、土器棺墓、土壌墓などが原寸で復元されましたが、何より良かったのは、その作業を短期間に一気に進めなかったことです。平成14年は住居址1軒、34mの木柵、翌年はそれに加えて今度は土器作り、さらに翌年は土器作りのスタッフ養成と復元というように、少しずつ作業は進められ、7年間かけてお子さん達を中心となった市民参加形の整備は完成しました。一気にやってしまうと、その時の熱量はものすごいのですが、その反面、記憶が薄れたり熱気が冷めるのも早いようです。持続可能な活用を進める上では実はこれが一番怖いと考えています。整備活用が上手くいき、先進事業と言われていたような遺跡は全国にいくつもありますが、ただどこも継続しないという問題を抱えています。ポイントは継続性であり、少しずつ作業を進めることは良いことだと思っています。

また地蔵田遺跡の整備事業の良いところは、木柵に使った個々の木材に、作業したお子さんの名前と日付を入れることです。だからそのお子さんが遺跡に遊びに来れば、この木柵は自分が設置した木柵ということで自然と愛着ももてます。また時間が経てば木は腐り、いずれ木柵の補修は不可欠です。実際、初期に植えた木柵は腐り最近、建て替えが行われました。大変な作業ですが、ある意味ではチャンスと言えます。最初に木柵を植えたお子さんに連絡ができるのなら、木柵の補修・再設置をまたやらないかとお伝えすることもできます。またその子が成長して親となりお子さんがいるなら、その子の参加を促すこともできるのです。そこに遺跡を未来に伝えるという視点が生まれるのではないのでしょうか。また土器棺墓の復元の際には、子供達が勉強して土器を作り、その中に未来の自分へのメッセージを封入したそうです。7～8年経って初めての開封作業が行われた際には、さすがに全員は集いませんでしたが、それでも青年期を迎えた幾人かが再び遺跡を訪れるきっかけとなったようです。このように一過性ではなく、熱気・情熱を継続できる仕組みを、興道寺廃寺跡の整備復元に入れていただきたいと思っています。

(2) まとめ

ちょうど時間になりましたのでまとめますが、まずはハード事業とソフト事業のバランスが重要であると考えています。ハード事業だけで突き進んでも、なかなかそれだけでは人に利用され続ける存在にはなりません。ソフト事業を入れることによってこそ遺跡の活用は継続すると思っています。あと遺跡の整備活用については、個人的には行政の関与は不可欠と考えていますが、

その際にも行政主導ではなく、少なくとも行政、研究者、住民の協働による保存・活用を進める必要があると思います。また未来を見据え、地域を担う人づくりの素材になるような遺跡であって欲しいという思いもあるので、学校教育との連携は必要不可欠と考えています。改めて申し上げますが、一世代だけの熱気、情熱だけで遺跡を守り伝えることは困難です。世代を超えて、その思いを伝える工夫こそ今後の興道寺廃寺跡の整備活用計画に求められると私は考えています。

時間になりましたので、これで今日の私の発表の方は終わりにさせていただきます。ありがとうございます。

質疑応答

【質問者】今日はありがとうございました。住民が中心となって、いろいろなことを絡めながら進めていくことは大切と思っています。私は福井で地域作りのNPO法人をしています。春夏秋冬、とても変化があり、そして海もあり、山もあり、もちろん川もあり、祭りもあり、そのようなものと文化施設を結んで何かをするというNPO法人、市民の団体を作っても私はよいと思っています。今日、いろいろな活用の事例をお聞きして、それは絶対必要だと思いました。先生、もう少し今日、会場におられる皆さんにアピールをお願いしたいと思います。

【渡辺】今、ご指摘いただいたことも、実は今日の一つのトピックにしても良いと思っていました。例えば琴浦町のケースでは整備の方向性として、斎尾廃寺と周囲の重要な歴史資産とを一体活用する形をとっています。ただ遺跡のような歴史資産だけではなく、それ以外にもお祭りのような無形文化遺産や豊かな自然な環境があるのならば、それも含めた地域一体となった活用もあって良いと思います。その際には、ご質問のあったNPO法人の方々も含めてさまざまな方のお力が必要と考えます。

史跡はやはりそれなりに核になり重要ではありますが、それ以外に地域で大切にされている資産をうまく繋ぎ、観光資源化を進めれば、町も活性化すると思います。いずれにしても興道寺廃寺跡だけでは寂しいです。それ以外のさまざまな資産を繋げる方向性が私は絶対に必要だと思います。ぜひそうしていただきたいと思います。その一つの取り組みが、まさに文化遺産カードだと私は思います。史跡になっているものも、なっていないものも、いろいろな文化遺産があったりすると思いますが、そのようなものを巡って繋げていく役割として、文化遺産カードの取り組みを利用されていることは私はとても良いことと思っています。皆さんもぜひ、集めていただけたらと思います。

図表・写真出典

問題提起「興道寺廃寺をとりまく景観」

- 図1 『パンフレット 興道寺廃寺』図7 興道寺廃寺遺構変遷模式図 2017 美浜町教育委員会
を一部改変
- 図2 『パンフレット 興道寺廃寺』図2 耳川下流域における遺跡分布模式図 2017 美浜町教育委員会
を一部改変
- 写真1 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター提供
- 写真2 美浜町教育委員会所蔵
- 写真3 松葉撮影

【第1部】

フォーラムⅠ「7・8世紀の金堂からみた興道寺廃寺の建築的特徴」

- 図1 海野聡『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』「古建築を知る 古建築の基本構造」図5 建物の各部の構成 2017 吉川弘文館（奈良県教育委員会『国宝 唐招提寺金堂修理工事報告書[本編2]』「第3章 技法調査 第13節 修理変遷」第13-1図 当初推定復原梁行断面図 2009
を元に海野氏作成）
- 図2 海野聡『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』「古建築を知る 古建築の基本構造」図11 さまざまな屋根の形 2017 吉川弘文館
- 図3 海野聡『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』「古建築を知る 古建築の基本構造」図8 基本架構の連続 2017 吉川弘文館
- 図4 海野聡『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』「古建築を知る 古建築の基本構造」図10 建物規模の表し方 2017 吉川弘文館
- 図5 海野聡『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』「古建築を知る 古建築の基本構造」図13 平面の拡大と廂の付加 2017 吉川弘文館
- 図6 海野聡『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』「古建築を知る 建築各部の構造」図35 さまざまな組物形式 2017 吉川弘文館（工藤圭章「古代の建築技法」組物各種 『文化財講座 日本の建築 2 古代Ⅱ・中世Ⅰ』 1976 第一法規出版株式会社を元に海野氏作成。元図の著作権は第一法規株式会社）
- 図7 海野作成・撮影（唐招提寺許可）
- 図8 海野聡『建物語る日本の歴史』「4 律令と都城の形成」図4-14 主要金堂の平面模式図 2018 吉川弘文館
- 図9 海野氏の講演内容をもとに美浜町教育委員会作成
- 図10・11 『興道寺廃寺発掘調査報告書』第140図 興道寺廃寺伽藍域・寺域遺構平面模式図 2016 美浜町教育委員会
を一部改変
- 表1 海野作成（箱崎和久・鈴木智大・海野聡「日本からみた韓半島の古代寺院金堂」別表2 古代日本の金堂の平面規模 『日韓文化財論集Ⅲ』 2016 奈良文化財研究所）
- 写真1 海野撮影（海龍王寺許可）
- 写真2 海野撮影（東大寺許可）
- 写真3 海野撮影（唐招提寺許可）
- 写真4 奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2002』図版5 興福寺中金堂 2002。興福寺教学部・奈良文化財研究所許可。
- 写真5 松葉撮影（興福寺教学部許可）

フォーラムⅡ「伽藍配置から見た興道寺廃寺」

- 図1 奈良文化財研究所『吉備池廃寺発掘調査報告 百濟大寺跡の調査』「第Ⅴ章 考察 2 伽藍配置の復元」

P170 Fig. 106 日本および朝鮮半島の伽藍配置の比較 2003

図 2 以下の図を元に美浜町教育委員会作成

倉吉市教育委員会『史跡大原廃寺発掘調査報告書』「IV 遺跡の概要 1 遺構」第 6 図 大原廃寺遺構全体図 1999、倉吉市教育委員会『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書』「第 4 章 調査の概要 第 3 節 遺構 2 中心伽藍」第 10 図 中心伽藍遺構全体図 2001、郡家町教育委員会『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅱ』「第 2 章 調査の結果」挿図 2 土師百井廃寺跡トレンチ位置図及び伽藍配置推定図 1980、東伯町教育委員会『斎尾廃寺跡範囲確認調査報告書』「第 3 章 発掘調査」挿図 トレンチ配置図 1990、鳥取県教育委員会『大寺廃寺発掘調査報告書 国道 180 号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ』大寺廃寺発掘調査略図 1967

図 3 以下の図を元に美浜町教育委員会作成

国府町教育委員会『史跡 栃本廃寺塔跡Ⅱ・鳥取藩主池田家墓所』「第 3 章 遺構 第 1 節 主要伽藍について」図 14 主要伽藍平面図 2003、島根県教育委員会『来見廃寺「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』「第 6 章 考察 2. 創建年代と伽藍の整備」第 59 図 伽藍配置推定復元図 2002、鳥取県埋蔵文化財センター『岡益廃寺』「第 7 章 まとめ -岡益廃寺の伽藍配置と変遷-」挿図 50 伽藍平面計画模式図 2000、長門市教育委員会『長門深川廃寺Ⅲ』「V まとめ」第 13 図 主要伽藍配置図 1985、浜田市教育委員会『下府廃寺跡 一平成元年度～平成 4 年度市内遺跡発掘調査概報一』「VI まとめ」第 26 図 下府廃寺跡の伽藍配置と寺域想定図 1993、淀江町教育委員会『淀江町埋蔵文化財調査報告書 上淀廃寺』「第 3 章 調査の概要 第 2 節 伽藍配置と立地」図 26 伽藍平面計画模式図 1995

図 4 『興道寺廃寺発掘調査報告書』第 141 図 興道寺廃寺伽藍模式図 2016 美浜町教育委員会

表 1 三舟作成

写真 1～5 三舟撮影

写真 6 美浜町教育委員会所蔵

史料 1～6 三舟作成

フォーラムⅢ「ラグーンの寺々ー古代海上交通と古代寺院ー」

図 1 梶原義実『古代地方寺院の造営と景観』「序説 研究史および本書での指針 3 寺院選地の諸類型」図 20 選地パターンからみた古代寺院の造営背景 2017 吉川弘文館

図 2 『興道寺廃寺発掘調査報告書』第 3 図 興道寺廃寺周辺地形分類図 2016 美浜町教育委員会

図 3～9 梶原作成

表 1 梶原義実『古代地方寺院の造営と景観』「序説 研究史および本書での指針 3 寺院選地の諸類型」表 1 古代寺院の選地パターンとそこから想定される寺院認知 2017 吉川弘文館

フォーラムⅣ「興道寺廃寺と三方郡家」

図 1 門井直哉「評領域の成立基盤と編成過程」第 10 図 評領域の編成過程模式図 『人文地理』第 50 巻 第 1 号 1998 人文地理学会

図 2 国土地理院発行 1/25000 地形図「早瀬」「三方」を基に門井作成

図 3 以下の図を基に美浜町教育委員会作成

大橋泰夫・真保昌弘「栃木県」1 浄法寺廃寺 『第 42 回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景』第 1 分冊 1997 埋蔵文化財研究会、岡山県文化財保護協会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査 2』「久米廃寺」第 2 図 久米廃寺周辺地形図② 1974、高井悌三郎『新治郡郡衙跡』『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 1995 茨城県、千葉県教育委員会『栄町植生郡衙跡確認調査報告書Ⅱ』第 1 図 遺跡の位置 1988

図 4 門井直哉「律令時代の郡家立地に関する一考察」第 1 図 出雲国の概要 『史林』第 83 巻第 1 号 2000 史学研究会

図 5 門井直哉「常陸国の形成過程に関する一考察」図 4 常陸国の駅路（奈良時代） 『福井大学教育地域科学部紀要 社会科学』第二号 2012 福井大学教育地域科学部

- 図 6 『福井県史』通史編 I 原始・古代 P428 「第四章 律令制下の若越 第二節 人びとのくらしと税
二 荷札木簡と税」P428 図 62 三方町田名付近 1993 福井県、田辺常博「報告Ⅱ 古代三方郡の
寺院と集落そして生産遺跡」図-2 城縄手遺跡・大將軍遺跡出土墨書土器実測図 『歴史シンポジウ
ム 興道寺廃寺の謎に迫る』 2006 美浜町・美浜町教育委員会
- 図 7 国土地理院発行 1/25000 地形図「早瀬」「三方」を基に門井作成
- 表 1 門井作成
- 史料 1・2 門井作成

座談「復元！興道寺廃寺をとりまく景色」

- 図 1 文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき -各種遺跡調査編-』「第三章 寺院の調査」図 120
幢幡 2013
- 図 2 海野聡「古代寺院の幢幡とその構造」新しい分類、図 12 幢竿に関わる遺構の類型模式図 『第 34
回条里制・古代都市研究会発表資料』 2018 条里制・古代都市研究会
- 図 3 『興道寺廃寺発掘調査報告書』第 140 図 興道寺廃寺伽藍域・寺域遺構平面模式図 2016 美浜町教育
委員会
- 写真 1 野々市市教育委員会提供

【第 2 部】

調査概報Ⅰ「末松廃寺跡、発掘最前線」

- 図 1 腰地作成（腰地孝大「末松廃寺跡」調査区配置図『平成 29 年度発掘報告会 いしかわを掘る』 2018
石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
- 写真 1 野々市市教育委員会提供
- 写真 2 野々市市教育委員会提供（文化庁『史跡 末松廃寺跡』PL.2 塔跡 SB1 全景（南より） 2009）
- 写真 3 野々市市教育委員会提供（腰地孝大「末松廃寺跡」4 区幢竿支柱穴（東から）『平成 29 年度発掘報告
会 いしかわを掘る』 2018 石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
- 写真 4 野々市市教育委員会提供（野々市市教育委員会『末松廃寺跡発掘調査現地説明会資料』竪穴建物
（南から） 2017）
- 写真 5 野々市市教育委員会提供（野々市市教育委員会『平成 30 年度国史跡末松廃寺跡発掘調査現地説明会資
料』作業の様子 2018）

調査概報Ⅱ「柳田シャコデ廃寺跡、発掘最前線」

- 図 1・2 中野作成
- 写真 1 羽咋市教育委員会提供（羽咋市教育委員会『柳田シャコデ廃寺跡現地説明会』塔心礎穴の根石（H26 再
検出） 2018）
- 写真 2 羽咋市教育委員会提供
- 写真 3 羽咋市教育委員会提供（羽咋市教育委員会『柳田シャコデ廃寺跡現地説明会』検出状況 2018）
- 写真 4 羽咋市教育委員会提供（羽咋市教育委員会『柳田シャコデ廃寺跡現地説明会』写真② 2018）
- 写真 5 羽咋市教育委員会提供（石川県羽咋市『広報はくい』「特集「柳田シャコデ廃寺跡」の姿を追う」集中
する大型の柱の穴を発見 2019）
- 写真 6 羽咋市教育委員会提供（中野知幸「フォーラムⅣ 寺家遺跡と柳田シャコデ廃寺跡 ～能登国羽咋の
神宮寺の検討例～」写真 6 柳田シャコデ廃寺塔基壇『美浜町歴史シンポジウム記録集 10 再論、若狭
の古代寺院 ～遠敷郡の古代寺院、そして興道寺廃寺～』 2016 美浜町教育委員会）
- 写真 7 羽咋市教育委員会提供（羽咋市教育委員会『柳田シャコデ廃寺跡現地説明会』写真④ 2018）
- 写真 8 羽咋市教育委員会提供（羽咋市教育委員会『柳田シャコデ廃寺跡現地説明会』写真③ 2018）

トークセッション「北陸の古代寺院、発掘最前線」

- 図1 以下の発掘調査報告書等収録図から松葉作成
綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告第9集』「3 綾中遺跡発掘調査概報 3 検出遺構」第13図 SB8108 実測図、「3 綾中遺跡発掘調査概報 5 出土遺物」第20図 遺物実測図 土師器 47 1982、
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター『未松遺跡』「第3章 調査の概要 第4節 1987年度の発掘調査」第123図 87SI02 実測図、第158図 87SI02 出土遺物実測図 2005、石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター『道村B遺跡』「第3章 遺構 第2節 竪穴建物および竪穴状の遺構」第113図 SI4349、「第4章 遺物 第1節 遺構出土土器・土製品・石器・石製品」第267図 竪穴建物出土遺物実測図 13 2015、京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書第19冊 桑飼上遺跡』「第4章 桑飼上遺跡の遺構 第4節 飛鳥・奈良時代の遺構」第72図 竪穴式住居跡 23 実測図、「第5章 桑飼上遺跡の遺物 第1節 土器」図版第四二 出土遺物実測図(飛鳥・奈良時代1)715 1993

講演「提言！興道寺廃寺跡の保存と活用」

- 図1 国土交通省九州地方整備局『国営吉野ヶ里歴史公園管理運営プログラム』「1. 全体計画及び開園状況等 (3) 利用の状況」P6 掲載図 2017
- 図2 渡辺作成
- 図3 鳥取県琴浦町『特別史跡斎尾廃寺跡・史跡大高野官衙遺跡保存活用計画』「第10章 運営・体制の整備」図10-1 運営体制イメージ 2018
- 写真1・2 松葉撮影
- 写真3 国土交通省九州地方整備局『国営吉野ヶ里歴史公園管理運営プログラム』表紙左上写真 2017
- 写真4・5 美浜町教育委員会所蔵
- 写真6・7 松葉撮影
- 写真8 鳥取県琴浦町『特別史跡斎尾廃寺跡・史跡大高野官衙遺跡保存活用計画』巻頭カラー 特別史跡斎尾廃寺跡 北から 2018
- 写真9 秋田市教育委員会『国史跡 地蔵田遺跡環境整備報告書 -市民と生徒による手づくり弥生っこ村-』巻頭写真 復元集落内 2007
- 写真10 秋田市教育委員会『国史跡 地蔵田遺跡環境整備報告書 -市民と生徒による手づくり弥生っこ村-』「第5章 イベントと復元体験 第6節 御所野学院「郷土学」木柵復元体験(埋め込み) 2007

※ パネリスト顔写真・歴史フォーラム等の風景写真は美浜町教育委員会撮影写真を使用した。

※ 図表・写真の収録にあたっては、出典図表、史料、写真等の内容・縮尺等を適宜、改変の上、使用した。

パネリスト（著者）略歴

【第1部】



三舟 隆之（みふね たかゆき） 1959（昭和34）年生まれ、東京都出身

- <経歴> 1983年 明治大学文学部史学地理学科日本史専攻卒業
1985年 明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了
1989年 明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程満期退学
1989年 渋谷女子高等学校社会科教諭
2005年 東京医療保健大学医療保健学部（現在、教授）
- <著書> 2003年『日本古代地方寺院の成立』 吉川弘文館
2009年『浦島太郎の日本史』歴史文化ライブラリー285 吉川弘文館
2013年『日本古代の王権と寺院』 名著刊行会
2016年『『日本霊異記』説話の地域史的研究』 法蔵館
2017年「古代地方寺院の造営計画・技術の伝播」『考古学ジャーナル』705
2018年「古代東国の仏教受容と寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社 など



門井 直哉（かどい なおや） 1971（昭和46）年生まれ、千葉県出身

- <経歴> 2000年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了、2000年 福井大学教育地域科学部助教授
2007年 福井大学教育地域科学部准教授
2016年 福井大学教育学部教授
- <著書> 2012年「常陸国の形成過程に関する一考察」『福井大学教育地域科学部紀要 社会科学』第2号 福井大学
2012年「古代日本における畿内の変容過程 —四至畿内から四国畿内へ—」『歴史地理学』54-5
2016年「文学にみる七・八世紀の交通—『万葉集』『日本霊異記』より—
『日本古代の交通・交流・情報』2 吉川弘文館
2017年「養置村開田地図に描かれた条里プランについて」『東大寺の新研究』2 法蔵館
2017年「古代日本の空間意識に関する覚書」『日本的時空間の形成』思文閣出版 など



梶原 義実（かじわら よしみつ） 1974（昭和49）年生まれ、滋賀県出身

- <経歴> 2001年 京都大学大学院文学研究科 考古学専攻 博士後期課程中退、京都大学埋蔵文化財研究センター助手
2003年 名古屋大学大学院文学研究科 講師
2010年 名古屋大学大学院文学研究科 准教授
- <著書> 2010年『国分寺瓦の研究 —考古学からみた律令期生産組織の地方的展開—』名古屋大学出版会
2014年「九州北部地域における古代寺院の展開」『九州考古学』89号 九州考古学会
2014年「国分尼寺の造営過程に関する基礎的考察」『名古屋大学文学部研究論集』179号 名古屋大学文学部
2014年「古代日本における造瓦技術の変遷」『考古学ジャーナル』652号 ニュー・サイエンス社
2017年『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館 など



海野 聡（うんの さとし） 1983（昭和58）年生まれ、千葉県出身

- <経歴> 2008年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
2009年 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部 遺構研究室 研究員
2014年 奈良文化財研究所文化遺産部建造物研究室研究員
および奈良県教育委員会文化財保存事務所 薬師寺出張所実務研修員（兼任）
2015年 奈良文化財研究所 都城発掘調査部 遺構研究室 研究員（～2018年9月）
2018年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 准教授（2018年10月～）
- <著書> 2013年「古代における裳階の類型化と二重金堂の変遷に関する試論」『佛教藝術』327号
佛教藝術學會 毎日新聞社
2015年『奈良時代建築の造営体制と維持管理』 吉川弘文館
2017年『古建築を復元する—過去と現在の架け橋』 吉川弘文館
2018年『建物が語る日本の歴史』 吉川弘文館 など

【第2部】



渡辺 丈彦 (わたなべ たけひこ) 1970 (昭和 45) 年生まれ、山形県出身

<経歴> 2000年 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学
2001年 奈良国立文化財研究所文部科学技官 (研究職)
2006年 文化庁文化財部記念物課 (埋蔵文化財部門) 文部科学技官
2006年 文化庁文化財部記念物課 (埋蔵文化財部門) 文化財調査官
2011年 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 主任研究員
2014年 慶應義塾大学文学部 准教授

<著書> 2013年 『遺跡をさがり、しらべ、いかす -奈文研 60年の奇跡と展望-』 (共著) クバプロ
2015年 「ドラえもん学習まんが ふしぎのヒストリー ①日本はじまる[旧石器時代]」藤子プロ・渡辺丈彦監修 小学館
2015年 奈良貴史・渡辺丈彦・澤田純明・澤浦亮平・佐藤孝雄編
『青森県下北郡東通村 尻安部洞窟Ⅰ -2001年～2012年度発掘調査報告書-』 六一書房
など



中野 知幸 (なかの ともゆき) 1978 (昭和 53) 年生まれ、石川県出身

<経歴> 2003年 国学院大学大学院修士課程修了 (博物館学) 、国学院大学文学部助手 (博物館学研究室)
2008年 羽咋市教育委員会文化財室、羽咋市歴史民俗資料館

<著書> 2010年 『寺家遺跡発掘調査報告書 総括編』 羽咋市教育委員会
2012年 「郷土文化資料の概念」『人文系 博物館資料論』 雄山閣
2014年 『史跡寺家遺跡保存管理計画書』 羽咋市教育委員会
2016年 「寺家遺跡と柳田シャコデ廃寺跡」『再論、若狭の古代寺院 ～遠敷郡の古代寺院、そして興道寺廃寺～』 美浜町教育委員会 など



腰地 孝大 (こしじ たかひろ) 1990 (平成 2) 年生まれ、熊本県出身

<経歴> 2015年 名古屋大学大学院文学研究科修了
2006年 野々市市教育委員会文化課

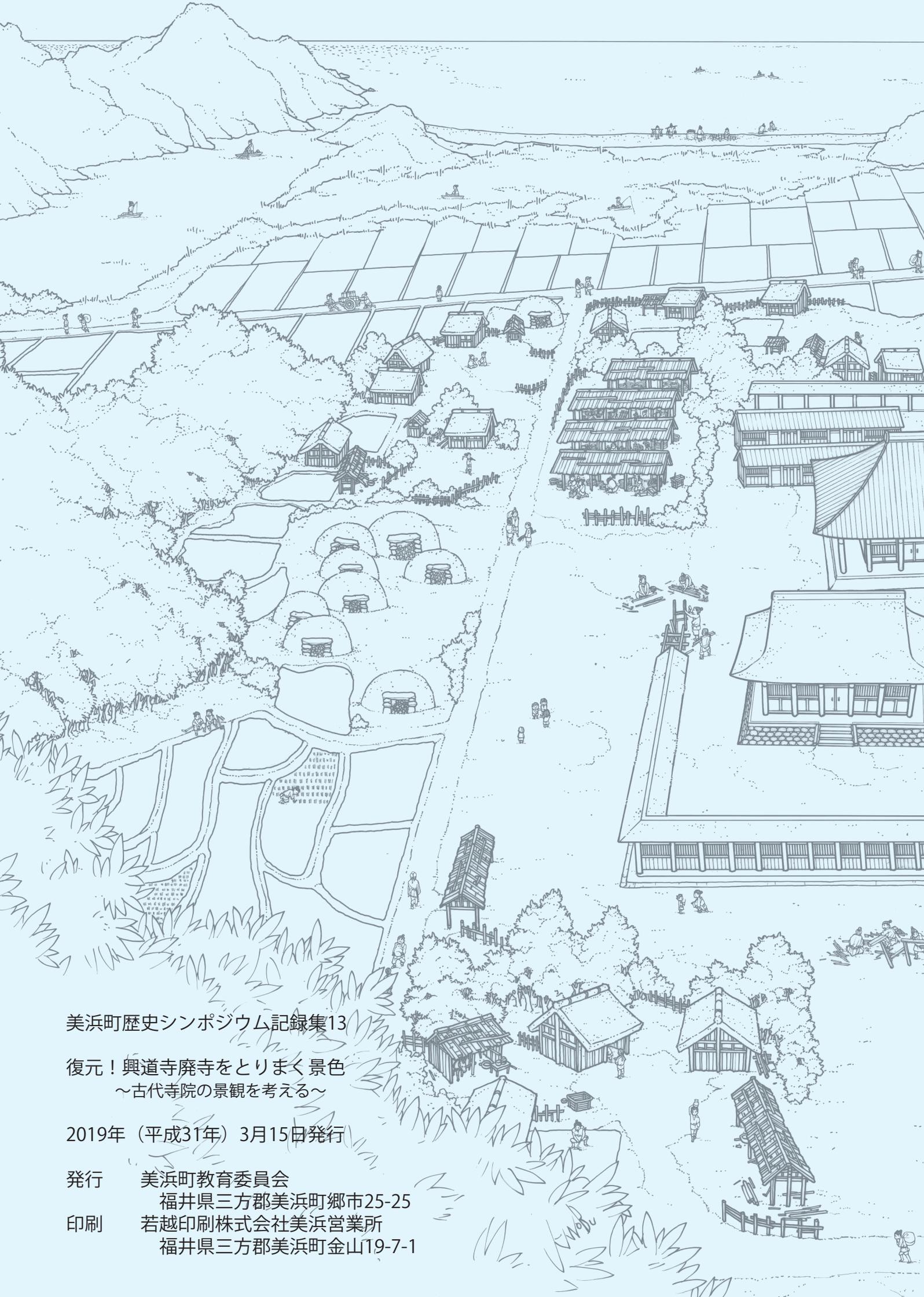
<著書> 2017年 『東山72号窯発掘調査報告書』 (共著) 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室 など



松葉 竜司 (まつば たつし) 1973 (昭和 48) 年生まれ、岐阜県出身

<経歴> 1997年 奈良大学文学部文化財学科卒業
1998年 美浜町教育委員会

<著書> 2011年 「福井県の古代生業」『研究発表資料集 古代社会の生業をめぐる諸問題』
日本考古学協会 2011年度栃木大会実行委員会
2013年 「若狭湾沿岸地域における土器製塩と塩の流通」『第16回古代官衙・集落研究会報告書
塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所
2015年 「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産」『館報 平成25年度』福井県立若狭歴史民俗資料館
2015年 「若狭湾沿岸の土器製塩と地域社会」
『丹後国遷政 歴史連談 塩・鉄、丹後国「国産品」の生産と流通』与謝野町教育委員会
2017年 『興道寺廃寺発掘調査報告書』美浜町教育委員会 など



美浜町歴史シンポジウム記録集13

復元！興道寺廃寺をとりまく景色
～古代寺院の景観を考える～

2019年（平成31年）3月15日発行

発行 美浜町教育委員会
福井県三方郡美浜町郷市25-25

印刷 若越印刷株式会社美浜営業所
福井県三方郡美浜町金山19-7-1

この電子書籍は、2019年3月15日、美浜町教育委員会が発行した『美浜町歴史シンポジウム記録集 13 復元！興道寺廃寺をとりまく景色』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：美浜町歴史シンポジウム記録集 13 復元！興道寺廃寺をとりまく景色

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日